

新しい家庭科

わ
ウ イ

住むという＝と



2・3

巻頭言

○ 住むということ ○

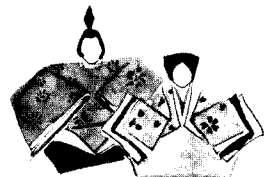
早川 和男

福岡へ行つたついでに、「ひとり暮らし裁判」原告団の人たちを訪ねた。日本の公営住宅は單身者の入居申込みを受けさえしない。これは憲法違反であるとして、一九七五年、福岡に住む單身の身障者、老人、低所得者などが裁判を起こした。その成果もあつて一九八〇年から申込みができるようになったのだが、裁判の証言に立ったこともあつて、その後の経過が気になっていたのである。

驚いたことに、原告団の人たちは一人も公営住宅に入居していないのである。県や市が当ててくるのは二十九平方メートル以下の中古住宅に限られ、しかも今住んでいるところから二、三時間も離れた見知らぬ場所である。なるほど住宅は少しはましになるかもしれないが、いったいそんなところへ行つて生活がなりたつのかどうか。互いに生活を支えあつた親しい近隣の人たちから離れてしまう。からだのことをよく知つてくれるお医者さんもいなくなる。若者なら新しい地域にもすぐ慣れるかもしれないが、貧乏な一人暮らしの老人を周辺の人はどのような眼で見えるであろうか。住宅のことよりも暮らしの見通しについての思いが先に立つのである。

住まいは単なるネグラーではない、生活を支える基盤なのだということが、よくわかる。住むとは、居を定めて暮らすことである。子どもたちをはぐくみ、人びとの暮らしを支えるのが住まいである。住まいづくりは地域づくりである。そのためには、住むものが主体となつた町づくりをしていく必要がある。

(神戸大学)



野の花をたずねて
おにしばり



随分凄じい名を付けられたものだと思いましたが、樹皮は製紙の原料になり、鬼でも縛ることができるほど頑強と知り、やっと命名の意味が納得できました。この低木はもう一つ「夏坊主」という名をもっています。山が濃い緑になるころ、この木だけはなぜか全部葉を落としてしまうのです。絶好の成長期だというのに！

描いた花は、早春の二月、まだしつこく冬が居座ろうとしている千葉の山へ行き、二、三日前に降った雪の中で、健気にも花を開いている姿を見たのです。雌雄異株で、どちらも花の色は黄緑色、ジンチョウゲに似たさわやかな香がします。手製のビニール座蒲団に腰を下ろしての三時間余でしたが、雪はあっても日だまりなので、眠くなるほどでした。時々カラの群れが渡ってきては、いそがしく枝を飛び交い、あつという間にいなくなつて、後はまたしーんと静けさがもどつて来ます。頭が黒く頬や喉がバラ色のウソが、ファイファイと小さく鳴いて姿を現し、私に気がつくと、すぐ飛び去って行きました。美しいこの鳥は、捕えられて籠の鳥になっているのを、よく見かけますが、「放してあげて」という勇気がないのを恥じています。オニシバリの雌株に赤く熟す液果ができるのを、今年こそは見ようと思いつつ、もう何年も過ぎてしまいました。

(大室君子)

新しい家庭科



1984年 2.3 月号

住むということ

へ巻頭言へ住むということ……………早川 和男

住むということ

生き方の表現としての住み方……………田中 恒子 4

ひとりで住むということ……………武田 京子 8

地域の中で住むということ……………岩崎 美穂 12

未来へのかけ橋としての住教育……………山崎古都子 16

私のしている住教育……………黒沢 悦子 20

新しい家庭科を創るために

小学校では 石けんと合成洗剤……………福田三津夫 26

中学校では 子どもたちの環境……………大森 嘉子 32

高等学校では 子どもの発達を考える
入江一恵、西本和代、町田道子 38

大学では 家庭科教育の中での住教育……………阿部 祥子 44

発言

学習の主人公たち こんな住まいならいいな

福生市立福生第七小学校、羽島市立竹鼻中学校 56

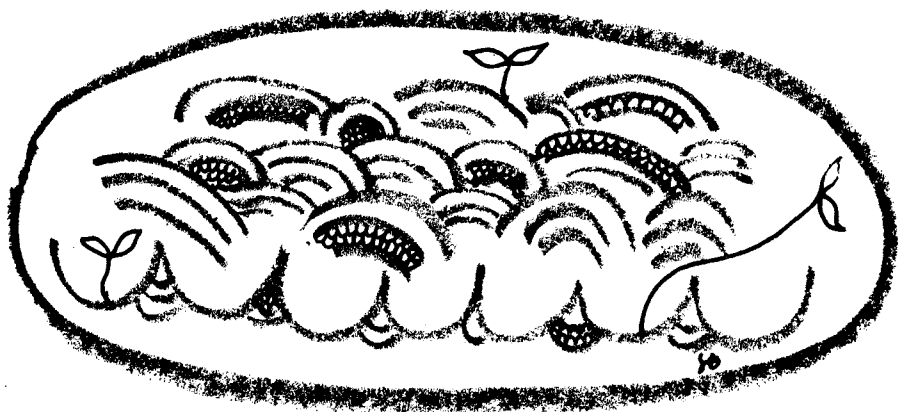
市民として 住むことを人権として考える……………神崎 房子 64

団地に住んで思う……………松本 法子 66

○Weになんでも言おうなんでも聞こう 70

○Weの読者会だより 81

○わたくしからあなたに 84



連 載

野の花をたずねて	おにしばり	大室 君子	1
視点	教育の源流	長谷川 孝	52
體通信	四羽の小鳥が水をのむ	武田 秀夫	54
ねえ、きいて	“戸塚”では私は直らなかつた	宮 淑子	51
つがるいろはがらた	⑤よめどねごあ そばからもらうな	藤田 健次	72
銀輪のうた	私は変わった障害者?	栗原 実抄	73
Weの読書室	日々を生きる	横山 雅子	74
団地の風景	格子なき牢獄	遠藤 和枝	75
わたしのシネマガイド	『ウインター・ローズ』	半田たつ子	76
テレビ残像	さようなら	野村 康子	76

○波 カッキーン コロコロ 半田たつ子 78
○ひと 68 ○新刊紹介 69

目次イラスト 馬場洋子 本文イラスト 中野敬子／野中浩一／半田たつ子
表紙デザイン 加藤由美子

○“We,” EDITOR'S NOTE 88 ○あんでな 80 ○十字路 86

◇ 住むということ ◇

生き方の表現としての住み方

田 中 恒 子



▼ 「そうはできない」という総反撃

もう一年半ほどにもなるが、ある所に講演に行つて、そのことがきっかけになって、主婦の方々と住まいと生活を考えるささやかな会を続けている。最初に申し込まれたときは、一瞬躊躇した。授業とその準備、ゼミナール、学内外の会合、家事、子育て、地域活動、講演、そして研究（これが一番後にくるのは、これが一番時間の都合がつくため、この部分で不足時間を調整しているくらいがあるため）と、時間と格闘している私が、毎月一日を空けることができるだろうかという不安があったからだ。

しかし、それは一瞬のことで、私の口の方はさっさと「しましよ」と答えていた。というのは、この方々の確かな生活感覚が伝わってきたから。私が教えるのではなく、私が教えてもらえそうという実感がしたから。彼女たちは、「先生の言うことは正しい」などとは考えず、自分たちの生活実感という篩にかけて話をきいてくださる。

その第一歩がなんと、「先生の家を見せて下さい」だったのだ。

「先生の言われることはもつともなことばかりだけれど、先生自身はそうしているのですか」という問いかけだった。たまたま午後の予定が詰まっていなかったもので、彼女たちはその日の中に我が家を訪問されるところとなり、そして、私は「合格」の判定をもらい、ささやかな会を始めることとなった。

毎月、いろいろなテーマをとりあげて討論してきた。子ども部屋はあるか、居間はあるか、三世代住宅を考える、台所、照明、……などと話し合い、設計演習（？）もして、お互いの考え方をぶつけた。毎回の会場は会員の家を持ち回るので、その家もいつも話しの中に出た。今は、整理と収納について続けて話し合っているのだが、それまで、大方私の話が受け入れられていたにもかかわらず、このテーマになるや、俄然私の方が受身にまわることになってしまった。

私が提案したことは、空間には限りがあるのだから、何でもっておこうという考え方はやめよう、毎日の暮しの中で「これだけ

は」というものだけ持とう、住まいは物置きではないから、というようなこと。

一番ズバツとでた意見は、「何と言っても先生はお金があるんですよ。『捨てなさい』と言う人は、もう十分に物を持っているから言えるでしょう。私は、もったいなくて捨てられないです」。確かに、私は食うに困っているという状態ではない。だが、物の整理ができない、できないと言っている人もまた、食うに困っている状態ではない。物へのこだわり方に違いがあるようなのだ。

私の原体験に、戦中から戦後にかけての物資の欠乏した生活があり、ひとつの物を使い始めたら、トコトン最後まで使い切らないと納得できないところがある。物の無い時ならば、色も形も材質も問題にできず、何しろ一度手に入れたものはそれを使った。しかし、今時はこちらが望みもしなくても、記念品、贈答品としてつぎつぎに物が来る。一年・二年と使いもしないで置いておくと、押入れの一角はどんどん埋まってゆく。私の好みに合わない物で、使う見込みもない物をとっておく必要は認めない。しかし、「これは使う」と決めた物は、金額の多寡にかかわらず使う。例えば、タオルなどでいかにも高かったでしょうというブランド名入りのタオルをいただく。一方で銀行の名前に入ったごく普通のタオルをいただく。私は前者はバザーに出し、後者を使う。タオルの場合は、毎日使って消耗していく楽しさがあり、最後は雑巾になって終わる。「使い切った」という満足感があるものが好きだから。

でも、私に反対された方の気持ちもよくわかる。住宅調査に回っていると、「なんでこんなものまでとってあるの」とびっくりするような物を、全て残している方もある。入院していた時いただいた

プラスチックの果物籠、銀行が配っている貯金箱、菓子空箱、何年も前に買った洗濯機の入っていた段ボール箱……。いつかは役に立つという思いで何でも残しておく貧しさが見えてくる。その貧しさは、生活水準という貧しさだけではなく、「どう住むか」という思想がないという面での貧しさでもある。

▼なぜ持つものを限るのか

今日の住宅事情は、金のある人は広い家へ、金のない人は狭い家へという状況であり、家族人数と比例しているわけではない。だから、住宅要求調査しても、「これで満足している」という回答は、現実を反映して出てくるわけではない。貧しければ、あきらめの方が先行するから、住宅改善要求は出てこず、逆に一定水準以上の状況でも、要求を実現する経済力があれば、更なる向上を求めて改善要求が表現される。

貧しさの中で、「どう住みたいか」という要求をもつことさえ奪われてしまうと、住宅そのものの改善は困難でも、住み方によって部分的にでも可能な改善までできなくなってしまう。住宅という基本部分をあきらめると、その周辺に要求が向かい、自動車・家具・什器などを持つため、結果的にはますます住みにくくなってしまう。

私が住居学研究の徒としていつも苦々しく思うのは、空間に入る量以上のものを持ってしまっていることは考えず、片付かないということを嘆かれることである。なぜそれだけ多くの品々を住まいの中に易々と入れてしまったのか、それらがいずれも必要であると言わなければならぬ、いやそれだけでは不十分で本当に使っているなら納得もする。使っていないくても、捨てられない品があることも分かる。

こんな風に問い詰めて物が残してある訳ではなさそうだ。「空間には限りがある」という簡単な道理が納得されていないために、住宅という空間の中に、ひとつひとつは大した大きさではない物が入ってくることを、批判的に検討できていないのだ。

私は、骨の髄まで「空間的に考える」習慣がついているため、置く場所や入れる場所を決めてからでないとい物は買わない。

私が、持つものを限っているのはそれだけの理由ではない。異常とも言えるような今日の日本の浪費的生活様式に關与したくないからである。私の生活の主人公は私のはずなのに、商業主義的要求のあおりたてが凄じいために、私の生活様式は企業が決めるという風になっている。

こんな風潮に踊らされて、結婚式の引出物などにびっくりするような馬鹿げた品をいただくことがある。先日、夫が知人の新築祝いということでもって箱をもって帰ってきた。開けてみると「リングむき器」という、話には聞いていたが、実際に見るのは初めての品だった。上から横から眺めまわして、私は憂うつになってしまった。リングを刻くにはナイフが一本あればいい。芯もとれるし、ヘタもとれる。こんなおもちゃみたいな器具を造るなんて、企業も消費者を馬鹿にしているにもほどがあると。二・三回は面白半分に使われるかもしれないが、すぐに馬鹿馬鹿しさに気づいて使われなくなる。吊棚なんぞに放り込まれる。そのまま幾月か、それ以上の時間がたち、放り出される。この類の品が多すぎるのだ。

私は夫に、「バザーね」と言った。夫も、「当然」とだけ言った。一度でも使えばバザーには出し難い。まあ、話の種が提供されたわけだが、私の憂うつさはとれない。

▼ 生き方の表現としての住まい

整理・収納に関する私の提案はすんなりとは受け入れられなかったが、建築家の設計した住宅を見学しようという提案はすんなりと受け入れられて、晩秋の奈良に向かった。お訪ねしたお家は、日本を代表する住宅建築家東孝光氏の設計になるもの。大邸宅でもなければ珍奇でもない。しゃれているけれどもお金はかかっていない。

しかし、主張ははっきりしている。私の心に刻まれた特徴は……。

①玄関とよびたくないほど段差のほとんどない出入口。玄関に吹抜けのあるデザインが流行っているが、逆にこの家は天井が低い。独立した小さな空間。②扉を開けるとそこは食堂。天井が高くなって、体がすっとすべり込む感じ。一メートル八十センチ平方の大テーブルの二方が造り付けのベンチ、二方に椅子が六つ。この部屋の北側に対面型の台所。来客大歓迎という使い易さがわかる。③その奥に祖父のための和室二間。ここには段差があつて、ベンチのかわりにも使える。④②と③をつなぐ部分に吹抜けがあつて、二階に短い廊下を通っている。この部分は総ガラス貼りで、温室でもあり、雲の動きも星の輝きも見える。⑤二階は夫婦寝室と子ども室（男二人・女一人で共同利用）。その間は吹抜け。

一緒に見学に行った主婦の方々が、しみじみと、「この家を先に見てから家を建てればよかったわ」と言われた。どんな家族の關係をつくりたいかという主張のない人は、住まいの形も決めることができるのだ。

居間がなければならぬとか、子ども室は一人に一つ必要だとか、おじいちゃんが出てこないでほしいとか、……そんなことなの

い家族なのだ。家族の出入りは、大きな食卓のある食堂を通り抜けてなされる。子どもたちは宿題も読書も食卓へ来てする。

今頃よくある建売住宅のバターンは、玄関から直接二階へ上れる階段がついていて、子どものことがわからないと母親たちを嘆かせている。ならば、どうしてそんな家を選んだのか。「金」と答えられるでしょう。しかたがなかったと。

洋服を買うときはどうですか。何軒も回って、自分にぴったり合うものを捜すでしょう。住まいが人格形成や家族関係にかかわりをもつということに、少しでも注意を払われるなら、もっと慎重な住宅選びができるのではないか。

▼ 住み方を制約している住宅問題

けれども、私は「しまった」と思っておられる方々を責める気にはなれない。業者の方は儲かればよいと考えて商品としての住宅を売りつける。国民の居住状態に最も関心を寄せるべき建設省は、住宅は国民各自の責任だという住宅政策をとっている。社会福祉にかかわっている厚生省は住宅を福祉の重要部分だとは考えていない。文部省は学校教育の中で住まいにかかわる学習を、家庭科と社会科のほんの一部分として取り扱っているにすぎない。社会教育においてさえ住まいにかかわる講座はほとんどない。

儲けんかなの業界だけが一人熱心に、お金の借り方、住宅の選び方などのパンフレットを配ったり、講演会を開いたりしている。

では、専門家は何をしているのか。建築家と呼ばれる職能の人々の中には、自らの生活は貧しくとも、ひたすら住み手の立場から生活を考えて良心的な設計をしている人もいる。住宅研究者の中に

は、日本の住宅政策を国民の居住水準を向上させるような公的責任を明らかにしたものに変わるよう努力している人もいる。住宅関係の仕事をしている公団や自治体の労働者の中には、公共住宅を質的にも量的にも充実させようと働いている人もいる。保健婦や生活改良普及員の中には、住生活指導に力を入れている人もいる。家庭科の先生方の中には、住む権利をきちんと教えている人もいる。

日本の住宅事情はこのままではいけない。日本の住宅政策を変えていかないとだめだと考えている善意の人々がいる。

住宅は一度建てられると、普通ならば何十年間かその場所にある。住宅は住む人にかかわるだけでなく、近隣の人々にもかかわる。一軒だけ独立しているわけではなく、お互いに影響し合っている。誰もが、心安らぐ町並みを求めている。けれども、住宅の責任は個人にあるという政策は、住宅を持っている人には多大な経済的犠牲をおしつけ、住宅を持っていない人には低い居住状態をおしつけている。

日本の住宅事情が良くならないのは、国民の住意識が低いからだと言われる。「住む権利」を国民全体に広げていく住意識の改革を、今おかしさに気づいている人が始めていかねばならない。

そんな気運はすでに生まれ、広がり始めている。「住居は人権である」を中心スローガンに掲げて、市民と研究者が手を携えて住宅問題解決に向おうとしている、日本住宅会議が誕生したのだ。この研究運動を成功させて、日本の住宅政策の方向をかえていきたいと考えている。最初に述べた主婦の方は全員会員になって下さった。生活の中での住まいのもつ重い意味を理解して下さったから。

(奈良教育大学)

◇ 住むということ ◇

ひとりで住むということ

武 田 京 子



自分の人生をふりかえてみると、ずいぶんいろんな住まい方をしてきたものだと思う。

●私のひとり住まい
親きようだといと共に住んだ子ども時代。親もとを離れて上京してからの学生時代には、寮生活から弟と二人での下宿生活、ひとりきりの間借り生活と変化した。社会人になってからも、同じ社会人の兄との間借り暮らしからひとり住まいへと移った。結婚したのは夫婦二人のアパート住まい、子どもを交じえてのマンション住まいと変わった。

こういっためぐるしい住まい方の変化の中で、たったひとりで暮らしたのは、大学時代の二年間と、社会人になってからの二年間の通算四年と少しの間でしかない。けれども、今にして思えば、このひとり住まいが、その後の私自身の生き方に大きな影響をもたらしているのではないかと思う。その意味で、貴重な四年余りだったような気がする。

そのひとり住まいは、いわゆる賄つきの下宿生活ではなく、衣食

住に関するすべてを自分の手で行う間借り生活だった。それでも学生のうちには生活費そのものは親の仕送りで賄っていたが、社会人になってからは当然のことながらそれも自前であり、生活のすべてを自分の力で成り立たせていた。

それは、貧しいけれど誇りに満ちた生活だった。あらゆる意味での自立した生活に挑んでいることへの誇りである。社会人としてのひとり住まいの二年間に学んだことは、この自立の価値を喜び、もう一つは、矛盾するようだが、人間がひとりぼっちでなく他者と共生することの大切さというものであった。

その自立と共生に対する大きな価値観が、その後の私自身の生きる姿勢の根底に根づいたように思う。まったく偶然に手にしたひとり住まいにすぎなかったのだが、もし、私が生きて生活体験しなかったら、いまごろどんな生き方をしていたらうかと考えるとき、ゾツとする思いがするのである。

●ひとりで住むことの意味
私は、人間は互いに自立を支え合いながら共に生きるのが、最も

自然な人間らしい生き方だと考える。

人間が自立して生きるのは当たり前なことでありながら、実は自分ひとりの力で自立することも、自立を維持しつづけることも難しいのである。事故や病気で身体が衰える場合も、悲しみや悩みで心の自立が弱まるときもある。そんなとき、自立を支え合うまわりの人間関係がなければ、自立を失ったまま自滅していくしかない。また、自立を支え合うことを目的としない人間関係は、ただのもたれ合いであり、これもまた共倒れの危険性をはらんでいる。だからこそ、自立と共生は分かち難いものであり、両方とも人間が人間として生きていくうえには、どうしても必要なものだと言える。

子育てとは、本来、この自立と共生を目的として行われるものであろう。生まれたばかりの赤ん坊のころから二十歳を過ぎて成人に達するまでに、まわりの大人たちがかわりながら、生活のあらゆる分野にわたっての自立度を高め、自立を支え合う共生の姿勢を身につけさせていく。

親子関係も基本的には他の人間関係と同様に、自立と共生にもとづいている。それでも、親の側の自立度が子どもよりも高いので、親子の自立の支え合いは親が子を支えるほうに重心が傾きがちである。子どもが幼ければ幼いほど、親子の共同生活はその傾向を持つてくる。

しかし、子どもが成人に達して学校を終えて社会人となれば、子育てがうまくいっていれば、子どもの自立度はかなり高まっているはずである。つまり、その時点では、なんとか自分の力で生きられる存在に育ち上がっているはずなのである。

ところが、これまでどおり親といっしょに住んでいると、果たして自分は自力で生きられるのかどうか、自分の自立度がどのくらいなのか、弱いとしたらどの分野の自立なのかを確認することがなかなかできない。子ども時代の姿勢のままに、身の回りのことや、判断をどこか親に依存したまま、中途半端な状態で、見せかけだけの大人として生き始めることになる。

自分が自立しようとしなないから、他者の手を借りて生きることがはかても、他者の自立を支えることは考えない。また、考えたとしてもどうしてもいいのかわからない。自立しようとしなない人間には、自立の価値も共生の大切さも身をもって感じることができないのである。

このような状態の若ものたちが、そのまま何年かの独身時代を過ごし、やがて結婚する。結婚すると親もとを離れるものもあるが、そのまま親と同居するものもある。たとえ親から離れて生活し始めたとしても、夫婦が互いに自立を支え合って生きるというわけにはいかないから、依然として親やまわりの大人たちの力を借りることになる。そうでなければ、自立への自信のなさから、いつまでも結婚せずに親から離れず「子ども」のままでもいいとする。そういった半自立的、あるいはまったく自立しようとしなない若ものたちが、最近とくにふえ始めてきている。

自立と共生の大切さは、自立して生きようとする生活の中に身をおいてみてはじめて感じとれるものである。そのためには、大人としての人生の出发点で、まず自分の力で生きること挑戦する。つまり、「ひとり住まい」が必要なのではないか。

●ひとり住まいが減った理由

私たちのころに比べると、最近、若い社会人の男女の親もと通勤がふえ、ひとり住まいが減ってきている。

先日、NHKテレビの『日本の条件』で、東京都の教職員採用試験風景を見た。多くの学生たちが親もとから通勤可能な地域の学校を望み、遠隔地には行けないと答えていた。その理由として、「親の面倒をみなければならぬ」という。二十二、三歳の学生の両親は、四十代後半かせいぜい五十代だろう。まだ老人と呼ばれる年齢ではなく、いまずぐ面倒をみる必要があるとは思えない。若いうちは親もとを離れたついでいっそうにかまわないはずだ。にもかかわらず、親もとと通勤にこだわるのは、親も子どもを手放しきながら、子どももまた親から離れたがらないからなのではないか。

子どもの数も多く、民法に家族制度が規定されていた昔は、跡取りだけを手元におけば、あとの子どもたちはみんな手放したとしても、「家」も親の老後も安泰だった。一組の夫婦の子どもの数が一・七人に減つていまい、たいていの子どもは長男か長女である。法的な家族制度はなくなっても、意識や慣行としては残っているから、長男を手元に残そうとすれば、男の子のほとんどがそれに該当することになる。けれども法制度との規定がないため、遠隔地就職で手放してしまつたら、親もとにもどつてくる保証はない。そこで親たちは、親もとと通勤を子どもに願う。大学入学でいったん親もとを離れても、就職ではターンする最近の傾向の理由の一つもそこにある。女の子に対しては、「嫁入り前の大事なかんだ」という理由で、就職したのちも結婚するまでは親の保護監督下においておこうとする。採用する側も同じ考えで「親もとと通勤」という条件を女子にだ

けつつけるところが多い。そのため、ひとり住まいでの社会人としてのスタートは、女の子の場合ほとんどに難しくなってくる。

そればかりではない。家事が軽減され、子育てにのめり込んでそれを生きがいとしてきた母親にとって、子どもが自立をめざしてひとり住まいを始めることは、生きがいの喪失につながる。生きがいを失わないためにも、子どもをいつまでも手許に引きつけておこうとする。そのためには自立できない子どもに育て上げれば安心である。精神的にも親離れせず、身の回りのことも自分でできない若ものは、ひとりで暮らすことなど望むはずがない。

こんな話を聞いた。親もとと通勤をしていた息子に転勤命令が出て、やむなく赴任した。ところが初めての母子分離のせいで、息子は下宿先で、母親は自宅でそれぞれノイローゼになってしまい、あきれ果てた父親は妻を息子の許にやって同居させることで解決をはかった。そのあと当の父親も身の回りの世話をさせるため、別の女性を家庭に引き入れたというのである。親子三人のいずれもが自立していない家族の悲喜劇である。

若ものたちに「ひとりで住む」ことをすすめると、こんな答えが返ってくる。

「だって、それでは食べるだけで精一杯の生活になる」「クルマも買えない」「流行のファッションも追えない」「海外旅行にも、スキーにも行けない」「デイトにお金もかけられない」。

親に頼った自分の収入以上の派手な生活と、貧しいけれどすべてを自力でまかなっている生活との手応えの違いは、やってみないものにはわからない。自力の生活からは、生きる喜びそのものが感じとれるのである。自立への不安と浅薄な物欲追求のために、いつま

でも親にへばりついているいまの若ものたちは、この真の生きる喜びを知らずに生きている哀れな人間と言えるのではないか。

●ひとり住まいのすすめ

小此木啓吾氏によれば『家庭なき家族の時代』ABC出版、アメリカの若ものたちは、たいていビトウィーン・ファミリーと呼ばれる家族と家族の間の時期を持つという。つまり、大学生くらいになったら親もと離れて、ひとりか友達と共に暮らし、結婚によって新しい自分たちの家族をつくるまでの間に、家族と共に暮らさない生活をする。親たちも子どもにそれをすすめる。親子ともども子ども親から自立した生活を望んでいるわけである。

しかし、アメリカの場合、この自立は強い個人主義、能力主義的な傾向に裏打ちされて、自立に共生が伴ってこない。自分の力だけで自立を維持しつづけるものだけが生き残ることができるため、一人ひとりが肩ひじ張った生き方になる。年寄りも病人や障害者も、それぞれが自分で頑張ればいいのだと、互いにつき放してしまふ。

自立だけをめざしたひとり住まいは、むしろ恐いことだと思う。私は、若ものたちがアパートの自室にカギをかけて自分だけの生活の中に閉じこもり、あらゆる人間関係を断ち、他者の手も借りなければ、手も貸さないといったひとり住まいをすすめているのではない。その生活の中から、他者と共生することの必要性をも感じとってほしいのである。

ひとり住まいの若ものが風邪をひいて寝こんだときの心細さが、風邪をひかない体力づくりに向かうのではなく、同時に同じアパートのひとり住まいの仲間との助け合いの人間関係に発展していくような生活姿勢が、自立と共生をめざすひとり住まいというものである。

う。ひとり住まいの中で、その生活姿勢を身につけた若ものは、故障がらの身体でひとり住まいをしている老いた親の心細さもよく理解できるし、何をしてやることで自分の親の自立を支えられるかもわかる。

自立と共生をめざしたひとり住まいの体験者にとっては、結婚もまた互いの自立を支え合う人間関係づくりの一つである。すべてを自力でやってのける生活の中で、自分の自立度を高め、自立への自信をつけた男女の結婚は、ひとり住まいのころよりも、互いの助け合いで自立を維持しやすくなる。ということは、結婚によって前よりも自立的に生きやすくなることを意味する。今日の逆に独身時代より生きにくくなる結婚生活の現状を生んでいる原因は、自立していない男女の結びつきにある。この現状を変えるためにも、ぜひ、自立と共生へ向けてのひとり住まいをすすめた。

また、結婚前の若ものたちばかりでなく、すでに結婚生活を長く営んでいる夫婦も、時どき、ある程度の期間のひとり住まいを試みてみるのも必要なのではないだろうか。單身赴任や長期出張、老親の介護のための帰省、夫婦どちらかの入院などによる離ればなれの生活もそれ自体はないにこしたことはない理由によるものであるが、ともすればもたれ合いになって低まった自立度の点検をし、夫婦が共生する価値を再発見する機会とすることができるなら、「禍転じて福となす」となる。夫を亡くした女性は、子どもに追いつけることをやめて、ひとり住まいで自分の自立を鍛えてみてはどうだろうか。それにより、自分も子どもも一まわり大きくなって、新たな親子関係が結べるのではないかと思うのである。

(評論家)

◇ 住むということ ◇

地域の中で住むということ

岩崎 美穂



(1)

「地域の中で住むということ」の原稿依頼を受けた時、私はちょうど暮らしの容れ物としての「住まい」の変更を明後日にし、前回の引っ越し以来そのまま据え置かれた形で埃をかぶった種々な物たちに囲まれて、悪戦苦闘している最中だった。果たしてまとまった原稿が書けるだけの時間が取れるだろうか、常にクルクルと忙しい日常生活に加えての引っ越し作業、そして何よりも私の気持ちたちが新しい空間に慣れ、少しは落ち着くだろうか、など不安と共に引き受けた次第だった。

幸い、家具だの食器だの机だの、ダンボールに詰まった本を除いた外の物は、約一週間位で大体が所定の場に収まった。三人の子供たちも、おもちゃや絵本が散らかり足の踏み場もない程の前の「住まい」から、一挙に食堂も入れると三部屋もある所に引っ越しして、初めは少し不安そうだったが（何しろ二歳の子が、「あれっ、ママいないねえ。どこ行ったんだろ」と隣りの部屋に探しに来た）、すぐに慣れ、もう所狭しとはかり騒ぎ走り回っている。私はと言え

ば、さすがに疲れ果て、体力の限界近くまで頑張ったという感じで、抵抗力が落ちていたためか、普段なら恐らくならないだろうひようそうになり、医者に切開してもらったりもした。

前日及び引っ越し当日は、もちろん友人たちが親身になって手伝ってくれたが、大方は私ひとりですべてに縄を掛けたり、鍋釜の整理をしたり、アルバムやら思い出のノート類、子供たちの小さいころからの絵やノートなど、次から次へと休む間もなくまとめて行った。加えて新旧両方の部屋の掃除、棚の取りはずし取り付け、電話、ガス電気などの処置……と、まあ挙げればきりのないほど仕事が続く。独身となつて以来初めての大仕事で、さすがの私も疲労困憊、今後はあと少なくとも十年は引っ越しはしないと心に決めた次第であった。

さて、今回の引っ越しの目的は何かと言うと、私と三人の子供たち都合四人が適当な距離を持つて暮らして行くために必要と思われる住空間の確保、これに尽きる。「住まい」が少し広くなったこと以外には、だから変更点はない。私の通勤時間、子供たちの小学

校、保育園、地域とのかかわりなど全く以前と変わらない。逆に言えば、前述の点を変えずに少し広い「住まい」を見つけることが私のここ一年位の願いであり、民間アパートの悪さ、お粗末さからして、それこそ何回不動産屋を覗いてもいつも空振りの一年であつた。

そう言えば、今小一の娘が五歳のころこんなことを言っていた。「大家さんでずるいね。自分は働かないで私たちからお金取ってさ」。全くその通り。その上高い家賃を払っても、手に入るのは本当にせせこましい「住まい」ばかり。「住む」ということが、人間の生活の中でこれほど軽視されているということは、やはりこの国では個人というものが尊重されていない証拠ではないだろうか。ひとつ家の中で、それぞれの個人のプライバシーが守られている家庭が、果たしてどれ位あるだろうか。下じもは互にくっつき合ひもたれ合ひ、境界もおぼろげな曖昧な自分として暮らせよ、というお達しでも、今まだあるのだろうか。人間としての尊厳を持った暮らしをしたいのなら、露骨に上昇する外ないと暗に仄めかしているようなものだ。

下じも出身の私は高校生のころ、自分の部屋が欲しいと頑なに主張し、貧乏人の親を困らせた記憶がある。私の机の引き出しを開けた開けないで大喧嘩をし、親は苦勞して工面しただろう金で、木造の都営住宅に三畳の突き出しを造ってくれた。私はそこに机と布団を持ち込み、親や兄弟の視線、物音などから一応独立して自分だけの世界を築くことが出来た。

私は、その時の自分の「一人になりたい」欲求の激しさから推して、私の子供たちもいずれそんな風になるに違いないと思うし、

今、それ以上に私が子供たちから距離をおいて「一人になりたい」ものだから、少し広い「住まい」に移ることはいわば私の内的欲求そのものだった。静かに満ちるような、あるいは激しく波打つような音楽を聴きながらひとり居ることの言い難い充足感――。

常に心に留め気にかけて、その実現を願っていると、不思議なことにある日突然叶えられることがあるらしい。本当に偶然、今回の「住まい」が見つかり、内部の欲求がパチンと弾けるように直ちに契約、入居となった。お金はかかった。もう貯金もない。でも、こうした機を逃さないやり方に私は満足しているし、ひとつことに打ち込んでこそ、次がまた開けるものと確信している。

おかげで子供たちの姿が目に入らない時間が出来、お互いにとってより良い状態が準備されつつあるようだ。「早くおもちや片づけなさい」「布団敷くんだから本片づけなさい」……など私のイラついた声が少しは減って、子供たちはますます伸び伸びと元氣一杯暴れ回り始めている。

(2)

ところで、今回の引越はここ数年の間での三回目のそれに当たる。一回目は五階建の団地から「土の香り」のする辺鄙な一軒家への転居であり、二回目は畑付きのその一軒家からここ小金井のアパートへの引越である。単純に考えれば、「今こそ都市生活者も自らの生活を変え、生態系循環を尊重した土のある暮らしを」という考え方の全く逆を行くような転居のコースと言えるかもしれない。

しかし、いわば自分の外側を取り巻く「自然」とか「環境」を問題にしているエコロジカルな物の見方が、ともすれば「自然」や

《環境》や《社会》を生きる主体である《私》。個の問題をなおざりにし勝ちではないかという、私の全く私的な疑問からすると、畑付き一軒家から、都心より約一時間のこの地に引っ越したことは、充分納得の行くものなのである（もちろん人間も《自然》の一部である以上、《自然》と《私》の問題とが全く別物ということはないが）。

私は、小金井に引っ越し数ヵ月して離婚をした。当時八ヵ月、二歳、五歳の三人の子供を抱えた私を離婚に踏み切らせたものは、離婚の決意の固さであることは言うに及ばないが、それを支えた大きな現実的裏付けは、私の賃労働者としての経済力であった。

この時ほど、私がずっと仕事を持っていること、ずっと働き続けて来たことをありがたく思ったことはなかった。母乳を与え続けた我がために仕事をやめ夫の経済力に依存したり、「三歳までは母親の手で家庭保育を」というしのびよる声に屈したりしないで本当に良かった。もっとも私の場合、夫には頼れるほどの経済力はなく、私がむしろ寄食を許して来たようなものだから、離婚によって食いちが減ったというわけだった。

さて、畑付きの一軒家で私はどんな風に暮らしていたか。辺鄙な所のため毎日の通勤に車が不可欠となった。保育園に預ける子供も乗せ、私は来る日も来る日も嫌いな車を運転せねばならなかった。家の回りに畑があっても、畑に出られるのは結局仕事の休みの日しかなく、近所との付き合いもなかった。何しろ近所と言ってもかなり離れているので、日々忙しい身では強いてつながりを持つという気さえ起きない。かくて賃労働者である私は、まるで陸の孤島から通動している感じとなった。

私は夫に言ったものだ。「畑のある暮らしを続けたいのなら、あ

なたが自分で自活に足る現金収入を稼ぎ、その上でやって欲しい。今の私には賃労働者であることと、辺鄙な一軒家で暮らすことは両立出来ないで引っ越します」。私は保育園の入園申し込みギリギリの暮れもどんじりの大晦日、妊娠九ヵ月の大きなお腹を抱えてこ小金井へ引っ越した。三年前のことであった。狭く小さな庭があり、土との触れ合いはそれで私には充分であった。いさかいの中、間もなく第三子の男の子が産声をあげた。

(8)

皮肉なことに私と地域とのつながりが強くなったのは、《理想の暮らし》を地で行く土の香りのするいかにも牧歌的な所ではなく、緑が残っているが家々が建ち並びかなり都市化されている所であった。ここでは離婚を契機として、夫婦共通の友人から個人の友人へと友人との関係の持ち方も変化し、自転車で行き来出来る距離の所に、種々な話が出来、女の問題、障害者の問題などで共に運動を作って行ける友人たちに恵まれた。

離婚後、三人の幼い子供を育てながら働く私は、どんなに彼女たちによって支えられ力づけられたらうか。私が高熱で倒れた時、子供たちの面倒をみてくれ、寝込んでいる私に心のこもったおにぎりを届けてくれた友人たち、私がグループワークに行く時子守りに来てくれた友達、私が大事な集会に参加したいと言えば、三人連れて行くのは大変だからと嫌な顔ひとつせず小さい方の子供たちを預かってくれる友達——私はこうした女友達に支えられ《暮らし》を作って来た。今回の引っ越しだって、彼女たちの助力があったから出来たようなものだ。当日は私より彼女たちがテキパキと動き回ってくれた。

私にとって「地域」の中に住むということは、何よりもこうした想像力に裏打ちされた行為の積み重ねの中に生きるという事である。〈自然・生態系・いのち・暮らし・エコロジー〉と唱えながら、女の無償労働を当て込んでその上で物言う男たち、あるいは「フェミニズム」を支持していると講演しながら、原稿の清書を妻にやらせて泰然としている自称フェミニストの少しはましな男たち——私はもうこんな欺瞞に耐えられないのだ。「僕はやはり楽をして自分のために使える時間が何としても欲しい、そのために女たちの手が必要」——これが本音だということは、見る目さえあれば簡単に見抜けるもの。しかも得てして、こうした男たちの作った論理が世間でもてはやされ勝ちということが、世間は男社会だという事を物語っている。

男が夕ぐれを見るように／女も夕ぐれを見たかった。／けれど長い間夕ぐれを見る女はいなかった。／女は夕飯のしたくにいそがしく手を拭き／あがりがまちを上り降りしていた。／やっと炊飯器や冷蔵庫や洗濯機が助けてくれて／女もはじめて詩を書きだした。／空気が象徴もはじめて女の手にさわるようになった。

「女波男波」より。「ラ・メール」創刊号

とうとう永瀬清子さんの詩は、また私たちの詩でもあろう。

さてしかし、男たちの生活の具体性、直接性を捨象したような論理が、果たして現実を変革し得るだろうか。少なくとも、常に男の生活の面倒をみることを強いられて来た女たちの怒りは包摂し切れないだろうし、また女たちの暗いうずきを置き去りにした変革が、変革の名たり得るかどうかが問われなければならないと思う。

地域で生活し闘うということも、そうした視点で見ると、抽象的な〈暮らし〉ではなく、日日働き、飯を食い、オムツを替え、食事を作り、遅刻しまいと必死に自転車をとばし、病気の時に助け合い、会合の記録のコピーを配り、輪転機を回し、顔を合わせるたびに近況を話し合い、力づけ合って行く、そんな具体的な、相手を誰と特定出来、顔の見える範囲での〈暮らし〉の中からこそ、実践的な闘いの武器が生まれ、大地に根を張った変革が可能となるのではないだろうか。

私たちの武器は、私たちの直接性・具体性そのものである。

私と仲間たちは、昨年来、優生保護法改悪阻止のための運動を継続し、その運動を作る中で、就学時健診拒否、学童保育所でのユニホーム問題、防災訓練の真の狙いを探ろうと山川暁夫さんを招いての講演会など、少しづつその輪を広げて来ている。山川さんの話をもっと多くの人に知ってもらおうと一冊のパンフレットにした。題して「防災訓練ってなあに」。

山川さんの話にもあったが、今着々と権力による地域の囲い込みが行われている現実には恐ろしい。私たちも、地域が常に風通し良く私たちの目標や願いを実現し得る場ではなく、むしろ「地域住民」が養護学校や福祉作業所の建設を拒んだり、学校から障害児を締め出そうとしたり、子供たちに制服を強制したりという暴挙を行っていることをきちんと見る必要があるだろう。

地域が私たちの具体的な〈暮らし〉の場である以上、どちらにしろそこは、権力と私たち草の根との戦場であることに変わりはない。それだけに、試練と困難に耐え、しかもそれを乗り越える力量を持った私たちのつながりを、何としても作り出したいものである。

◇ 住むということ ◇

未来へのかけ橋としての住教育

山 崎 古都子



未来へのかけ橋としての住教育

私は琵琶湖から流れ出る瀬田川を下り、紫式部が住んだと言われる石山寺の山門前を通って通勤している。この通勤路は瀬田川の水面に頭を出すユーモラスな起伏に笑いを誘われ、秋には比類ない見事な紅葉を対岸に眺めることが出来、私の大好きな道である。この道路沿いで近年急速に住宅開発が進んできている。折角の景観がこわれていくのを心淋しく思い、授業の冒頭にそんなことを学生に言ってみるがのってこない。景観を愛でるという習慣がなくなったのだろうか。

ところで、この通勤路の途中に名神高速道路と、東海道新幹線が50m程の距離をつかず離れずして平行して走っている所があるが、この、世にもすさまじい交通騒音地域にも住宅地開発の波が押し寄せてきている。そして、二つの幹線の間にはさまれた騒音孤島ともいえる地帯にも、大小の住宅が高密度に建設されている。これらの住宅が建てられた時期は圧倒的に一九六五年以降である（新幹線は一

九六四年、名神は一九六三年の開通である）から、住宅地に騒音が飛び込んで来たというよりは（もちろんそういう地域もある）、騒音地域にあえて移って来た人々が住んでいる地域である。

騒音が大阪空港や各地の高速道路、そして新幹線沿線の住民の健康を蝕み、生活を破壊していることは周知の社会問題である。又、私たちは優れた住宅地を「閑静な住まい」と表現することにも慣れてきているように、静けさは住宅地の備える基本的条件の一つであろう。にもかかわらず、あえて「飛んで火にいる夏の虫」のような行動が進行している。このような実態は私の通勤途上、瀬田川の景観のすばらしさに反比例して、放置しておけぬものを感じさせるに十分である。

これらの問題は、もちろん統一した環境政策がとられていないことと、「割安」にかりたてられて求めねばならぬ住宅需要者の追い詰められかたを、如実にもの語る住宅問題そのものである。

騒音被害が当然予測される地帯の住宅建設は、もっと制限される

べきであるし、騒音が広がる地域を緑地帯などにする環境計画と一体になった幹線計画でなければならぬ。にもかかわらず、今日いづれの方策もとられていないことが、騒音・振動・ほこり等の公害被害地を拡大し、そこに住む居住者の健康を破壊している根本の原因になっている。

そのことを十分承知した上で、しかしながらやはり、なぜ？ 自分及び家族の健康と生活を破壊されるような住宅地を求めて（多くが持ち家である）、移住してくるのかという疑問が残る。

私はこの現実を見るにつけ、住宅政策の貧しさからくる住宅問題の重圧に抗しきれない住宅需要者のために、住教育の武器がいるのではないかと思う。つまり、この地域について言うならば、交通騒音と生活破壊の因果関係がもっと皆に徹底していたらと残念でない。生活のための欠落条件と生活破壊との因果関係が、住宅需要者の周知の事実になっていること、この因果関係に目をつぶって（例えば騒音は慣れるはずだと思つて）持家を持つことは、自己の尊厳を否定することなのであるという信念を培つておく必要がある。この営みこそ、人格形成時の親の家庭教育が果たす役割であるし、自己の尊厳を傷つけるか否かの判断力を養うことは学校教育の役割であらう。

住宅の需要という具体的な高度な判断力を必要とする場面に直面して、過去に培われた豊かな生活能力が開花するような、そんな生活教育であつてほしい。

ところで、私の研究室では、昨年度からこの地域の住宅需要者特性を見るために調査研究を始めた。ところが、初年度の卒論生が前述の問題を理解してくれなくて困った。私はとてもわかりやすいテ

ーマだと思つたのだが、予測がはずれた。彼は「たいしたこと（騒音の程度）がない」とか、「自分で買ったのだから、とやかく言うことではない」というのである。彼自身が観光道路に直面した下宿に住んでいて、それとくらべたらだというのが、私から見れば、生活経験が生きてこないのががゆい。幸にも今年度の学生たちはよく理解してとりかかった。学生たち自ら、「持家主義の弊害だ」などと勇ましいことを言つて、「持家意識」から切り込み、いかなる「住教育」をすることが解決につながるかを見たいと張り切っている。

この調査を現在の三回生にも手伝つてもらつた。この手伝い経験を使つて、「住生活で騒音被害を出さないためには、高速交通幹線とその周辺住宅地の関係はどうあつたらよいか」という課題でゼミを行った。

学生は、騒音や振動の被害の大きさについては、調査対象者から聞いたり、調査中の受け応えが聞きとれなかった経験を通してよく知つている。従つて「調査こぼれ話」はよくはずんだ。しかし、「さて、それならどうしたらよいか」という質問には全然答えが返つてこない。そこで次に、「新幹線にグリーンベルトを、北九州市楠橋の人たちの戦い」（『暮らしの手帖』80号）を読み合わせてもう一度尋ねた。

今度は一つの解決策が提示されているから話としてはわかるが、問題は一体国鉄がそんなことをどこでもしてくれるのかという話題になった。このことは、裏返せば加害責任を認めていないことであり、学生たちは加害者のない被害現象として受けとめていることを意味している。

又、解決方法が緑地帯づくりだけではないことをほのめかした
が、一人を除いてわかってもらえず、結局私がしびれを切らして
「スピードダウンをすればいいじゃない」と言ってみたのだが、こ
の後のゼミはまさに惨憺たるものになってしまった。

その時の雰囲気をかいつまんで述べると以下のごとくになる。

まず、新幹線・高速道路における高速性は必要悪であるという前
提はくずさない。

『速いことは良いことだ』という価値観を一度見なおしてもいい
ではないか。もちろん、速いことはいいいこともある。しかし、速い
ことで失うことも大きいよ。速く走ったら、格子戸の街並みの美し
さは見られないし、四季折々の草花だって見られないよ』

「だけど、新幹線ができたおかげで日本の豊かさは実現した」

「そうよ、私も速いことはいいいことだと思って、かつては随分新幹
線を利用したよ。でも、今になって思えば、あんなに東京へ行く必
要があったのかなあ。新幹線に乗っている人のなにも行かなくて
も済む用事も沢山あるのではないのかしら。又、そんなに速く走ら
なければならぬのかしら。『狭い日本、そんなに急いで何処へ行
く』というじゃない！ 速い新幹線に乗って外の景色を見ないで通
るよりも、ゆっくり車外の四季の景色を見て行った方がずっと旅は
楽しくなるよ」

「しかし、うちの父は東京へ単身赴任していていたが、新幹線が
あるおかげで毎週末に帰って来てくれた」

「そうかなあ、新幹線がなかったらあなたのお父さんは単身赴任し
なくてもよかったかもしれないよ。そしたら週末だけでなく、毎日
家族そろった生活が出来たじゃない」

「……」

「新幹線ができて得をしたのは国鉄だけでないのに、国鉄だけ悪く
言うのはおかしい」

「そうよ。多くの企業も得をしたし、私たち利用者も便利さを享受
した。早いのがどうしてもいいのなら、周辺の人々の犠牲の上にス
ピードを手に入れたのだから、それによって得られた利益を還元し
てはどうか。周辺百mまで緑地帯にすればそうとう被害地域が減る
のだから、その費用を出すために税金を高くする」

「……」

「税金のとり方は不合理なんですよ」

「そうだ、しかし、税金の不合理が是正されたとして、尚、税金を
あげてみたかどうか？ でも、仮に利益還元してもすっかり騒音が
なくなるわけではないことを考えたら、後仕末にお金を使うより、
犠牲者の被害の上のついたような利益追求は始めからやめた方が得
策じゃないか」。

ちよっと乱暴に書きなぐったが、実際は学生との受けこたえの中
で、もっといいねいにやった。しかしながらやりとりを抜き書きす
ると、学生はほとんどが現状肯定的であり、私だけがスピードダウ
ンだの、皆も加害者なのだから、利益還元だとかとしやべっている
ことになる。

私たちの生活で他人から妨害されることなく、心の安定が得られ
ることは当然の条件である。従って、我々にはなんびとの生活を妨
害する権利もないことも当然の社会関係だということが、学生に理
解してもらえない。

更に、このような基本的な人間の権利を侵してまでも経済的に豊

かになることが果たしていいことなのか、少なくとも生活学を学ぶ者は生活者の論理を作らねばならないのだという私の意図は、学生によって見事に吹き飛ばされてしまった。この原因がどこにあるのか今考えているところである（余談だが、学生は戦争によって科学技術は進歩したとか、戦争を経験したおかげで人類は反戦の思想を持つまでに賢くなったと信じている）。

子供たちが小学校から大学まで通ってどのような知識を吸収するのかが、今後社会人になっていくに当たって、どのような能力が身についたのかを考えると、しばしば不安になるが、ゼミや卒論の指導が年々やりにくくなっていく中で（これでは、私はアジっているのではない）、ますます教育効果への疑問が大きくなってきている。

話を主題にもどさねばならない。

住教育ではどのような能力をつけるのか。逆に住教育でついた能力は何に役に立つのか。又、騒音地帯の住宅地を求めないという生活上の選択能力を住教育でつけることができるのか。前述のように大学での教育実践の失敗でうちのめされている我が心にこれらの疑問がズキズキと迫ってくる。

場・間^アは哲学である。決してわかりやすいものではない。住教育はこの「間」を、生活手段としてとりこむための手続きを教育化する営みである。しかし、過密な飼育箱で飼われた実験用ネズミが仲間を殺すような問題行動を起こすことはよく知られている。これ以外にも空間と原初的な問題行動との相関事例は数多く報告されている。にもかかわらず、食と違って住の影響は、直接の飢餓感や満腹感を現さないために見逃しがちになる。

ところで日本人は古来より「間」の理解を得意としてきた。今日

まで集積された日本文化の中に幾多の「間」の文化が見られるだろう。適度な「間」は文化を創り、逆に「間」を無視することが生命の破壊をひき起こす。横浜の中学生が野宿者をひきまわして殺した事件などは、事件を誘発した場、人間と人間の間という「間」の凶器そのものである。

このように「間」は生命を維持するための原初的条件である点から、一方、極めて人間・文化的条件に至るまで含む高度な生活手段である。

住居はこの「間」を生活手段としてとりこむ関係を追求する学問であり、住教育は、生活を向上させるために自らの体内に「間」という生活手段を生活化する能力をつけるためのものである。

生活に哲学を構築することとは、とりもなおさず、生活の論理を築くことにほかならない。住居学教育は、生活の主体者が各自の生活の論理を築くための能力を育成するための教育である。これはとりもなおさず、商品を通して、「消費者」という従属性に甘んじさせられてきた過去の家庭科教育に対して、「消費者」ではない、「生活主体者」の姿を展望するものにほかならない。「家族の住要求を実現するための生活行動が未来の主体的な生活を築く」ことを教える住教育は、まさに未来へのかけ橋ではないだろうか。

（滋賀大学）

◇ 住むということ ◇

私のしている住教育

黒 沢 悦 子



一、住教育の現状

家庭科の研究会や講習会でも、家庭科教師の仲間が集まっても、住生活に関する指導法がとりあげられることは少ないし、また、話題にのぼることさえ少ない。せいぜい

①食物や被服や保育でね、いっぱい時間がとられるでしょう。だから住居は時間がなくなってしまうって、結局、教科書を読むだけで終わることが多いわ。生徒の関心も低いし、生徒で解決する問題でもないからね。

②住居はどう教えていいか、わからないから簡単にとばすの。四・五時間くらいね。

③平面図なんか書かせてみたり、自分の部屋のデザインなんかさせてみると、生徒も喜ぶけれど。

④住居は生徒のプライバシーにふれることが多いでしょう。だから、なかなかとりくみにくいわね。

と、やる気のないことばが単発的に出てくるぐらいのものである。ひとつひとつのことばの中に、住教育に対する教師側の態度が見えてくる。そして、それを誰もが当たり前という感覚でうけとめてい

る様子なのである。

昨年県教委の現職教育講座で、住分野の内容をとりあげたことがあったが、それは「住まいの洗剤」に関するもので、換気扇やガスレンジの受け皿の汚れおとしとカーテンの洗濯をして終わったということであつた。このように住教育の現状はきわめて低調である。表面的には、住教育のむずかしさということと敬遠されているようにみえるが、実際にとりくまれていないということは住教育の軽視である。むしろ、無視しているというところであろうか。

二、高校家庭一般の住居の内容

学習指導要領の改訂に伴って、県・家庭部会では、家庭一般の指導手引きを作成した。住生活の設計・住居の管理については、年間配当十五時間。目標とその内容は次の通りである。

〈目標〉

- (Ⅰ) 家庭生活を営む場としての住居の機能を理解させる。
- (Ⅱ) 住生活を機能的・美的に営む能力を養う。
- (Ⅲ) 住生活を充実向上させる意欲と実践的態度を育てる。

〈内容〉

指導事項・	指導内容	実験・実習
ア 住居の機能と住生活の設計	・住居の機能 ・家庭生活の変化と住居の変遷	住宅問題の事例調査
(1) 住居の機能	・住宅問題と対策	
(2) 住生活の設計	・各室の機能と配置 ・居住様式と能率 ・施設・設備と能率 ・設計	動線の測定 住居の設計
イ 住居の維持管理	・住居の衛生 ・住居の安全 ・保全・修理 ・維持管理と住居費	教室の不快指数の測定 住居の安全点検 清掃（家具の手入れまたは床の清掃）
(1) 住居の衛生と安全		
(2) 住居の管理計画	・各室の使用目的と室内整備 ・室内の美化 ・室内装飾の種類と活用	収納のくふう 市販の室内装飾品の種類の価格調査
ウ 室内の整備と美化		
(1) 室内整備の計画と美化		
(2) 室内装飾	・室内の配色 ・室内装飾の試み	居間の室内装飾実習 簡単な室内装飾品の製作実習

配当時間のうち八時間を実験実習にあてるといのだが、ひとつ

ひとつの実習が断片的なので、生徒の力として何が残るように配慮されているのだろうか、判然としない。内容全体としても、マイホーム中心の限られた住生活空間のやりくりに終始するような小手先の実習の中に安易におぼれこんでいるのではないかと懸念される。衣も食も、保育、家族もすべての暮らしは住居を基盤として営まれていることや住居のあり方が人間形成に大きくかわることなど、住に対する認識と、住生活にかかわる切実な問題とに直接ふれることなく、現実から目をそらしているのではないか。

こういう内容で、生徒の興味や関心をひきだしながら授業を構成していくのは、とても大変なことである。生徒の実態にみあった、もっと直接的な現実認識をふまえて、住居の学習をくみたてなければならぬと試行錯誤をくり返している。

三、住教育にこだわる私

一般的に、家庭科教育の中では関心がもたれていない住教育を、衣・食・保育・家族・経済と同等に扱い、また、各分野すべてにわたる総合的な内容として住教育を位置づけるようにとりくんでいるのだが、それにはいくつかの動機がある。

とうとう満足できる住生活を経験できないままに大人になってしまったわが住居歴。心身の豊かな成長に欠くことのできない住居の影響を強く感じている。一九四五年六月、日立市を襲ったB29は、わが家にも直撃弾を落として行った。家は道路に面した表の部分をもぎとられて、舞台装置のように、外部からまる見えになってしまったのである。半壊の家に住みながら、「恥ずかしさ」を感じたことが忘れられない。幼さの中で住居を意識した最初の感覚のように思う。その家も七月には再び戦火を受けて、すっかり焼けてしまっ

た。衣も食も、たとえようもなく貧しかった時代であるが、住においても個人の責任をはるかにこえた戦争という巨大な力が、罹災者とそうでない者との間に格差を生みだした。その後、長く続いた住居の貧しさは、住問題への関心を高めざるをえなかった。

次に、高校時代の家庭科の授業。うす暗くて、床下からあがつてくるすき間風に身をふるわせるようなバラック建築の教室の中で、恩師E先生の熱心な住教育。特に主婦の座をとりあげて、女性問題とのかかわりから、住居を見る授業を受けたことによつて、マイホーム、マイルーム中心の幼さから抜け出せたようである。「住居」と「女性史」の関連が私の中に根づいた。住居が、時代を表現し、生活を表現するものとして見えてきた。

第三は、やはり住居と住環境の現状。家出をくり返す生徒の家庭訪問をしてきた友人が、「あの住居（狭すぎて小さすぎる）では、家を出る気持もよくわかる」と述べていたが、子どもたちの発達を精神的にも身体的にも阻害している状況を、住居の観点からも強く指摘していかなければならないと思う。一方、マイホームブームがひきおこした数々の家庭崩壊・人間破壊の悲劇。毎日のように新聞にみられるこれらの記事を読みながら、夫も妻も、親も子も、もっと冷静に住居を意識してほしい。生活基盤としての住居を、個人的視野にとどめず、社会・経済・政治問題として認識できる力を持つてほしいと願わずにはいられなかったのである。人間が人間として生きるための住居、生命にかかわる住居と住環境について、家庭科以外のどの教科が指導内容としてとりあげているであろうか。家庭科が担当する責任は大きいと思っっている。

(→) 生徒たちの意識

住居に対する生徒たちの学習要求は低い。

「今度の授業からは住居に入ります」と聞いた時、「ウエー！ 何で住居なんかやらなくちゃならないの……料理さえできればお嫁に行けるじゃない！」なんて、みんなでぶつぶつ……いつてました。事実、私も「住居なんてつまらないものやっているなら、男子といっしょに柔道でもサッカーでもやった方がましだ！」なんて思ってもいました。」

「最初に先生が、「住居はつまらないと思う人は手をあげて」と私たちにお尋ねになった。私は、ぱっと手をあげたのを覚えていた。住居ってどんなことを勉強するところだろう？」と思つたが、やはり最初に頭に浮かんだイメージは住居に適する材木のかたさとかだろうと思つた。」

このように、次から次へとあげたらきりがないほど、生徒たちは、住学習に対する強い抵抗を示す。よほどしつかり覚悟して授業にとりくまねば、生徒たちの心にくいこんでいくことはできない。いかにして、住教育を成立させたらよいのだろうか。

少ない授業時数なのだから、教師の講義でまんべんなく教えた方がよいと言う人もいるが、それとて、「一応、教えた」と言つて満足しているのは教師側だけで、生徒たちが深く学習に集中したかどうかによつて結果は左右される。学習内容を生徒の自主研究にまかせる方法も、生徒のとりくみ方によつては内容がそれてしまう心配もあるし、生徒の熱意によつて左右されることも、同じ危険があり勇気のいることであるが、生徒を信頼して学習計画を立てた。

四、私のしている住教育

(一) 単元設定の理由

自然破壊、公共施設の不備、立地条件の不良、住宅費の負担過重、過密・過疎・狭小等住生活にかかわる問題は、生徒自身に直結しているにもかかわらず、大半の生徒は無関心である。気づいていない。それだからこそ、「貧しい住居は人格・品性に多大の影響を与えると同時に住意識自体をも貧困化させ、人間らしい住宅への要求を萎えさせる。さらに、住生活の確保を個人の責任とする現在の持家主義中心の住宅政策のもとで、人々は個々ばらばらの、はかない穴掘りに向かわせられ、やがては逃れられぬ住宅難を己れの甲斐性のなさに帰する諦観の世界へと追いこまれている。」「わたしたちは、人間の尊厳を傷つける住居に住まわされているという現実をもっと認識すべきではないか。そのためにも居住空間の貧困が人間として生きる権利を奪っている事実をみんなが認識していかなければならない。そして新しい住宅政策と都市計画の再構築を、そこから出発させていかねばならない、と私は思う。」

と、早川和男氏が『住宅貧乏物語』で指摘されたような視点、視野の拡大を願わずにはいられない。「健康で文化的な住宅生活」を営む権利を有する者としての自覚と、問題解決へのはっきりした展望や要求を持ち、地域や国の住生活の実態に目を向け、問題点や矛盾点を自覚し、すべての国民に快適な住生活を保障していく方向を考えさせるようなとりくみをしたい。

(二) ねらい

- (1) 日本人の住居観、住生活の現状と問題点をつかませる。
- (2) 住宅政策、土地政策の実態はどうなっているかを知らせる。
- (3) 今後の住生活、住宅政策はどうあるべきかを考えさせる。

(四) 指導内容と配当時間

- | | | | | |
|---|--------------------|----------------|--------|------|
| (1) 日本人の住居観 | 一時間 | | | |
| ・日本人の住居観 | ・住居の実態 | ・憲法二五条と国民の住む権利 | ・持ち家主義 | |
| (2) 住居の型 | 二時間 | | | |
| ・各時代と住居の特徴 | ・家族関係と生活様式(女性のくらし) | ・住居の機能 | | |
| (3) 住居の条件 | 二時間 | | | |
| ・住宅の条件 | ・居住環境 | ・自然条件 | ・社会条件 | ・安全性 |
| (4) 住宅問題・住宅政策 | 五、十時間 | | | |
| (自主研究・一クラスの生徒数の差とグループの構成差により、レポートの発表時間に差が生じる) | | | | |
| ・住宅取得の実際 | ・住宅・土地政策 | | | |
| (5) まとめ | 一時間 | | | |
| ・今後の住生活のあり方 | | | | |

(五) 授業の展開

- (4)の自主学習へとすすめる体制をつくる。
- 自主学習のテーマは自由選択にまかせる方法をとっているので、クラスにより研究分野の偏りや重視が見られるので、より工夫をせねばならないのだが、現在までは、生徒の選択から抜けた内容は、発表のあい間に教師が補充する。テーマが決定した後の研究は、放課後や休日を利用して。研究方法は、実地調査、アンケート調査、訪問ききとり調査、市役所・下水処理場へ出向く。図書館利用

など、あらゆる方法をとり入れている。テーマによる発表順にしたがって、プリントを作成して発表（これが生き生きとして楽しく見事である）。討論の時間がほとんどれない点は、今後の課題である。全発表終了後に、プリントを編集して、本として完成させ、必ず男子に感想をきいてくるように指示している。

(6) 生徒の選択テーマの一例―目次から―

▼現在の住居をみつめよう！▼

◎住宅の現状／◎住宅の条件／◎中郷ニュータウンを知る／◎公営住宅・民間住宅調査／◎経営別アパートの比較／◎台原団地は住みよいか？

▼どんな家が住みよいのか▼

◎年齢別の最低住居

▼とにかく、家をつくってみよう！▼

◎ニュー・ハウス／◎夢のおうち／◎住まいの実現

その他「私の家の十七年の歴史」「私の家の長所・短所」や、「日立市の過疎・過密」「日立の団地の開発と環境」「日立市の日照権闘争」「日立市の公害」から「首都圏の地価」「日本と外国のアパートの違い」「公庫融資とその対策」など、さまざまなとりくみがなされている。生徒の感想文から紹介したい。

「楽しい楽しい調理実習の次の学習は……」「住居」と知って私はがっかりした。中学では学習しなかったのですけれど、「住居」って聞くと家を見取り図を見たり、なんかとても難しそうな気がしていました。でも先生は私のそんな先入感を払いのけてくれました。先生の授業は私たちが調べ学習するものでした。実際自分たちでやると、教室で机に向かって学習するよりもおもしろく、また理解できまし

た。他の人たちの発表を聞くのもどれも興味をひかれとても役立ったと思います。もし、これが机に向かって先生のお話を聞いてノートに書いてという授業だったら、私は今までと同じく「住居」には先入感が残っていたことでしょう。”

“……はじめに学習したのは間取りだった。農家や公団住宅とか、それ独特の工夫のこらされている間取りだった。たとえば、農家だったら土間、客を重んじるような家はトイレが二つあったり客間が大きく台所が小さかったり、公団住宅で食寝分離が行われたとか、私は想像していたのと違うのでびっくりした。

また先生は「みんなは机をおくとしたらこの間取りのどこにおきますか」とおききになると、けっこうみんな同じようなところにおくことや、公営や公団住宅の入れるように入れないこと（注・入居基準等をさす）など、とても興味深い授業になった。食物の学習の場合、食べられるから一番好きだと思っていたが、住居のように「へー、そんなこともあるのか」という驚きがないので、現在は住居の方が好きになった。

そんなことを考えているうちに、「研究をしなさい」ということになったわけだが、何をしてよいかわからない。こりやむずかしいなと思ったが湯中さんと二人、知恵をしぼって「物の占める割合」をやるうということになった。やっていくとおもしろいもので、数字上と目で見える感じはちがうものだなあと考えた。

このようないろいろのことがわかり、プリントをつくる。そして、みんなのプリントが本になる。なんて画期的な試みだ、と思った。自分の手で一冊をつくり、感激して絵まで書いてしまった。私たちのプリントは一番印刷が汚いが、これは印刷が夕方おそくなっ

たので、自分の手で一枚一枚ローラーをおして作ったものだ。だから手づくりのプリントだ。内容は他のみんなほど幅広くできなかったと思うが、いろいろなことがわかった。自分でどんな研究をするかきめて、自主的にやれたということにうれしさを感じる。”

”さすが高校だ。「視点」が違う。いま、住居学習を終えて持った感想はこれである。住居とはこの複雑な現代社会の中で、単にわが家についてのことだけではすまされなくなってきた。もちろん家の環境をよくすることについて考えるのも大切である。しかし、そのわが家のことばかりにとらわれていて、もっと他のことについて、私たちは見落としていたのではないだろうか。

最後に住居のみならず家庭科について、今まで家庭科というところ「お料理にお裁縫に保育に家族」という家事的なイメージがあったがそれだけではなく、自分たちの生活をよくし、ひいては社会をくらしやすくするものではないだろうか（それとも、今ごろ気づいた私が遅すぎたのかしら？）。やっぱりこれは、女性だけでやればいいというものではない。男性が家庭科をバカにするというか、軽視するのは、中学時代まで私が持っていたようなイメージを彼らもまた持っているからではないか。

とにかく、家庭科というものは単なる家事的ではない。”

次に男子の感想を二人紹介しよう。

”へー！ 家庭科って、こんなことやってんの？
十五分で読み終わるから……という口車にのせられて感想書くの引き受けたのはいいけれど……。何、これ？ これ本当に家庭科なの？”と思わずあつげにとられてしまった。

でもって「おなベグツグツ、まな板トントン、今夜のおかずは何

でしょね？”といったような一連の路線を予想していた俺の高校家庭科教育に対する認識が、まったく的はずれなものであったことも痛感してしまった。

で、この際、その辺のことを徹底的に把握しちやおうと思つて、本腰いれて読みだしたら、これがなかなかよく書けている。この調査結果をどこぞかのマスメディアにでも売りつけたら、けっこういい値がつくんじゃないだろうか？ なんてくだらないことを考えながらやっと読み終わったら、とうに三十分以上かかっていた。”

”この本をみて、家庭科という教科は「すごいことをやるな」と思いました。ぼくの母は、高校の家庭科の先生をやっていますが、食物のことばかり話しているの、このようなことがおこなわれていると知って、びっくりしました。家、住居について考えるのは、普通、男のような感じもしました。しかしこの本をみて、女性の権力がつよくなつたなあと思います。内容としてなかなかおもしろく感じました。特にアパートについてのプリントにとっても興味をもちました。これから将来にかけて、もしお金がたまつて、家をたてるようなことがあつたら、女性が重要になってくると思います”。

生徒たちが、目で、耳で、足でたしかめながら学習していく中で、住居に対する関心は高まってきた。住居は人権として保障されねばならないという注意意識を把握できたか。まだまだ不十分であり、指導力の不足を嘆いているが、未来に生きる子どもたちに、より広い視野で住問題を改善し、解決する方向への姿勢を育ていきたいと願っている。

（茨城県立日立第一高等学校）

新しい家庭科を創るために

* 小学校では *

福田三津夫

石けんと合成洗剤

(一) 二きぶりのピラミッド
夏休み明け、久し振りに楽しい家庭科通信を発行できた。見出しが見出しだけにかなり熱心に読まれたのではないかと思う。

二きぶりのピラミッド——二、三日前の清掃の時間でした。六年の石川君が家庭科室に一番近い二年二組の教室に駆け込んで来ました。『センセー、ちよっと来て！ なんでもいいからちよっと来てよ！』かなり真剣な表情です。私はこの日、補教ということで二年二組の子を見ていたのです。給食が終わり、ほとんどの子が帰りかけていました。

石川君の勢いにおされて家庭科室にとび込んだ私は、示された流しの下『洗剤』と書かれた戸棚を見て、さすがにギョッとしました。六年生が二学期に学習しようと思っていた、合成洗剤（ザブ）、石けん（ビーズ）、無リン洗剤（ニュービーズ）

を入れておいたビーカーのどれにもごきぶりがいっぱい入っていたのです。

ここで問題です。考えてください。

〔問1〕一番たくさんごきぶりが入っていたのはどれでしょう。

ア、合成洗剤 イ、石けん ウ、無リン洗剤

〔問2〕中のごきぶりがほとんど死んでいたのはどれでしょう。

ア、合成洗剤 イ、石けん ウ、無リン洗剤

? ? ? ? ?

〔問1〕も〔問2〕も正解はアです。

ごきぶりの嫌いな方は、これから先は読まないでください。同じビーカーだったのですが、どういうわけでしょうか、合成洗剤にはいっぱいごきぶりが入っていました、というより重なっていたのです。六年生の清掃の子たちはそれを『ごきぶりのピラミッドだ』と言ったのです。さらに不思議なことに、大きなごきぶりばかりなのです。十数匹のうち生きていたのは一匹だけ、もうほとんど動かうとしませんでした。

無リン洗剤と石けんの方は、子どものごきぶりです。ほとんど生きていました。どんなものでも子どもというのはいかかわいものです。特にピラミッドと見比べると、特別のかわいらしさ

が増します。でもごきぶりは『いやなおいを出し、でんせ〜病をつたえる』（『新学習国語辞典』教育同人社）悪い昆虫ですから、かわいそうですが殺すことにしました。殺虫剤がないのでどうしようかと思っていましたら、近くに『マレモン』がわずか残っていました。そこでこれを数滴ずつごきぶりにたらしめたのです。そしたらとたんにごきぶりの子どもたちは元氣よく走り回ったのです。でも、それも約一分で動きがぶくなくなっていました。息たえるまでにどれくらい時間が経ったのでしょうか。しばらくして来て見ますと、全く動かなくなっていました。

さて、ここで私は考えてみました。なぜ合成洗剤には大きなごきぶりがいっぱい入っていて、しかも死んでいたかということです。おまけに頭まで並べて。これはむずかしい問題なので私にはわかりません。わかる方教えてください。

ある日、家庭科室を訪問してください。村上先生にも見てもらいましたらびっくりして、あぶなく貴重な資料『ごきぶりのピラミッド』を落とすところでした。写真にとっておこうと。

（「パン」、五三号、八三・九・二二）

二百ccビーカーなので、大きなごきぶりであれば、楽に乗り越えられる高さである。なのにどうして逃げなかったのか。

私の推理はこうである。逃げなかったのではなく逃げ出せなかったのである。あのザブの強烈な臭いに誘われてビーカーに一歩足を踏み入れた途端、強力な毒が体中に回り始めたのである。

無リン洗剤の場合、ザブに比較してそれほど毒性が強くないので

あるうか。大人のごきぶりは入っても、もがいて逃げてしまった。そして逃げる馬力のあまりない小さいごきぶりが残された。

石けんにはごきぶりを殺す力はない。むしろ小さなごきぶりは自分たちのすまいにしようとしていたのだろうか。

この事件があつてから、家庭科の授業の一時間は「ごきぶりのピラミッド」にあてられた。普段「元氣いっぱいの子が意外と極端にごきぶり嫌いだったりして、けっこうおもしろい発見があつた。」

写真どころか、ばっちりスライドにして教材として残してある。来年の五年生にはごきぶりのピラミッドを拡大して見せてあげるつもりである。

この話をいろいろのところでしたら、ゴキブリホイホイはいらないね、という話が出された。そうです、福田式ゴキブリホイホイは古い合成洗剤（ABS）をビーカーに二センチも入れれば良いのだ。家庭科室には使われないハード型合成洗剤がけっこう残っている。前任者が購入したもので、処分に困っていたが、こういう使い道があるとは全く気付かなかった。

（イ）教科書の中の合成洗剤

合成洗剤の生体への影響は、皮膚障害、内臓障害、ガン・遺伝毒性などが報告されているが、石けんでは全くないと言える。毎日使う洗剤についてしっかりとした知識がなければ、今後とも大変危険な状況が生じてくることは目に見えていると思う。

こうした問題を中心に据えて、きちんと取り上げるのが家庭科教育の大きな目標であろうが、教科書ではごく簡単におさえているに過ぎない。教科書の記述に注目してみよう。

『開隆堂（小学校、五年）』「りんは、せんさいのよこれをおとす力

を増すために使われるが、湖などの水をよごす原因の一つといわれ、せっけんやりんをふくまない合成せっさいの使用がすすめられている」。(二六、七頁)

■東京書籍(小学校、五年)「合成洗剤は、せっけんよりたくさん出まわっている。しかし、中にふくまれている成分がからだに害をあたえたり、川や湖の水をよごしたりするのではないかと心配されているので、せっけんを使う人もふえてきた」。(二四頁)

これらの記述では、生体と環境への影響について十分理解できるものになっているとはいえないのだが、実は改訂前の教科書はもっとお粗末であった。改訂要旨を示したパンフレットに、「すでに、現行の教科書で『せっさいの公害』を取り上げていますが、今回はこれを引きつぎ、さらに教育効果の上がるような内容構成へと発展させました」。(開隆堂)「合成洗剤の問題点に加えて、せっけん使用にもふれました」。(東京書籍)とある。八〇年度から三年使われた教科書の記述は次の通りである。

■開隆堂「せっさいの公害について調べ、せんたくをするとき、川の水のよごれを少なくするには、どんなことに注意すればよいか、話し合ってみよう」。(二九頁)

■東京書籍「合成洗剤は、よごれがよくおちる、ねだんが安いなどの理由で、せっけんよりたくさん使われている。しかし、中にふくまれている成分が、からだに害をあたえたり、川の水をよごしたりするのではないかと心配されているので、品質表示をよく読んで、使う量や使い方などに注意する」。(二四頁)

開隆堂のは「研究」としてわずかに書かれたものであるし、東京書籍のは合成洗剤の方が石けんより汚れが落ちやすかったり、安か

ったりという疑問の残る書き方がされている。

いずれにしても小学校では十分な扱いがされていないので、中学校では多少でも問題の核心が記述されているかと「技術・家庭」を開いてみた。

■開隆堂(上)「合成洗剤は河川や湖の水をよごして、公害をおこす一原因とされているが、せっけんも合成洗剤との特徴を考えて使い、また、必要以上に使わないようにしよう」。(二〇頁)

■東京書籍(上)「最近、洗たく用剤や電気洗たく機などの改良と普及によって、衣類の手入れは便利で能率よくでき、仕上りの効果も高められている。しかし、洗剤や仕上げ剤などで手があれたり、皮膚がかぶれたりすることもおこっている。また、多量に使われている合成洗剤は、河川などの水をよごす原因のひとつにもなっている。わたしたちは、便利だけでなく、安全や環境への影響なども考えて用具や用剤を選び、使おう」。(二五〇頁)

かつては、合成洗剤で野菜、果物を洗えば寄生虫卵、農薬のすべてが落ちるという錯覚におとし入れるような書き方をしていたり、キャベツをきざんでから合成洗剤につけなさい、というものであったようだ(後述「洗剤を洗う」)。

もはや教科書には期待できない、と言ったら過言であらうか。

②「洗剤を洗う」から「もう。毎日が洗たく日!」

私が五年前に家庭科専科になった時、我が家ではいっさいの合成洗剤を追放していた。合成洗剤という洗濯用や食器洗い用を思い出せる人は多いが、シャンプーや住居用、歯磨用まで指摘できる者は少ない。ましてや、化粧品や農薬にまで混入されているとは、かなり関心の高い人でないと知らない事実であらう。

合成洗剤に囲まれてあやうく暮していることを子どもたちに知らせる必要がある。その時手にしたのが授業書「洗剤を洗う」であった。『仮説実験授業研究』第四集（仮説実験授業研究会編、仮説社）に授業書全文と作者城雄二氏の解説、更に小野田三男氏が家庭科で実践した記録が載っている。

城氏自身はこれを大学内の小グループで使ったり、教師やお母さんの集まりで授業をしたという。四十六ページもあるこの授業書を一生懸命ファックスにとつては印刷していた時、若い同僚がこれのをぞき込んで、「福田さん、これ授業でやるの?」と言った。私も多少難しいので子どもよりお母さん方にちよいどいい教材かな、とも思った。でも過去三回、六年の三学期じつくりこれに取り組んでみた。子どもたちは異口同音に、「難しかったけどとても役に立つ内容だった」と言ってくれた。内容の骨組みは次の通りである。

○はじめに……あなたきれいき?

1 石けんと合成洗剤……白さと香りの……

2 洗剤の歴史……昔の人は何であらったの

3 洗剤の働き……界面活性剤はどんな役をするか

4 洗剤の害……加害者は罰せられない

安心して暮せる『合成洗剤のない生活』

石けんの使い方……あれこれ

この授業書のプランが初めて発表されたのが七三年頃のように。もう十年も前のことなので今の実状と多少ズレがある。一番ひっかかるのが「石けんと合成洗剤の洗浄力」の項で、A B Sの方が粉石けんより洗浄力があることになっている。ここ数年の各地での研究で、実は石けんの方が洗浄力に秀れていることがほぼ実証されてい

る。そして、前述したように、七三年度の家庭科教科書はまさに企業側に立った信じ難いような記述をしているのである。現在の教科書を見ても、遅々とはしているが、確実に合成洗剤追放の市民運動が広がってきていることを、この一事が如実に示していると思う。

この授業書ではだいたいいつも「2洗剤の歴史」あたりから子どもたちは生き生きと発言しだすのだった。ところがほとんど読み物の「4洗剤の害」から難しい言葉もとび出してきたりして集中できないことが多かった。

考えあぐねていたら、この授業書の改訂版が出たという話を吉村七郎さんからうかがった。早速手に入れたのが『もう。毎日が洗たく日!』(実験しながら考える、朝子・夕太郎の洗剤教室)である。(編集・発行/電気通信産業労働組合連合会全電通広島地方支部、広島市中区基町6-77電ビル内、TEL (0832) 26-3381) 読み物としてもおもしろいが、問題を取り出して授業書にもできる便利な本である。

1 洗剤の役割と使われ方

(1) 洗剤の働き (2) 洗剤探し

2 石けんの洗浄力と使い方

(1) 石けんと合成洗剤の比較 (2) 石けんの使い方の工夫

3 石けんとくらし

《特別資料》《参考資料》

1と2の問題を抜き出して十ページの授業書を作ってみた。お話しは一つも入れずに、必要な場合は説明を加えて授業を進めている。

二回目の実践になる。今回は六年の二学期、クロスステッチで疲れた体と心を柔かくするのにちようど良い。

たまたま今年は二学級、父母の授業参観にあたっていた。人が見ているとうれしくなる私、お母さんや担任の教師も子どもと一緒に授業を受けた。仮説実験授業の場合はだいたいいつもそうであるが、問題や質問を全員で考えるということで、とても集中してくる。お母さんの予想が見事にはずれて、子どもが正解ということも頻繁に起こり得るのだから楽しい。その組の担任に指名したりすると、慌てて頓珍漢な回答をする。だから校長はあまり家庭科室には見回って来ない。いつ、何をやらされるかわからないからだと言う。〔問題5〕色水と合成洗剤入り色水を用意して、きゅうりの丸太に切ったものを入れ、しばらく放っておくと、どちらがよく色が浸み込んでいるでしょうか。

ア 洗剤入り色水のきゅうりの方が色がよく浸み込む。

イ ただの色水のきゅうりの方が色がよく浸み込む。

この実験は、きゅうりを取り出してみるとただの色水の方がどきつい色をしているので、イが正解と思っていたら大間違いである。包丁で切ってみると一目瞭然、アが正解。

さてこの問題で予想を立てただけで終わってしまった組があった。一週間後に実験をしようと思って驚いた。もちろん、色水から取り出すのは子どもたちである。

「さてこの実験、手伝ってくれる人は誰かな。はい、じゃあ出て来て」

この種の実験にすぐ乗って来るのは、組のいたずら坊主が多い。「では中からきゅうりを取り出して！」

一週間も経つと異臭を放って、色も異様である。「ウエー」などと言っているが、かまわずやらせる。毎回自分の手を汚していたら

たまったものではない。

どういうわけか、色水の方は子どもがつかもうとしても崩れてつかめない。洗剤入りの方はほとんど腐っていなかった。そこで、あとと気付いたことがあった。八百屋さんでもやしの中に合成洗剤を溶かしておくといつまでもシャキツとしているという話を思い出したからだ。本当だったのだ。今、ようやく確かめることができた。この授業のハイライトはなんといっても、メチレンブルー法による合成洗剤の検出である。

試験管の中に希硫酸とクロロホルムを入れると、クロロホルムは下に沈殿してしまう。さらにメチレンブルー液（金魚屋で売っている。金魚の病気を治すのに使われる）を二、三滴たらし、希硫酸の層だけ青色になる。ところがこれに合成洗剤を数つぶ入れるとメチレンブルーの青がクロロホルム層に移ってしまうのだ。それは鮮やかである。

洗濯用だけでなく、洗髪用、住居用、食器洗い用、歯磨用洗剤まで、ほとんど市販されているものはブルーの層を逆転させてしまうのは、子どもたちにとって大変なショックのようである。私の家から持って来た石けんを使った製品を見せると、それはどこで売っているのかと多くの子が聞きに来た。

「洗剤を洗う」と最も違ったところは、石けんと合成洗剤の洗浄力の比較である。なるほど日本石けん洗剤工業会の資料では合成洗剤の洗浄力の方が秀れているとなっているが、これは怪しいと言う。兵庫県立生活科学研究所、神奈川県県民部商品テスト室、静岡大学の実験では、全く違った逆の結果が出ている。

こうなってくると話はまるで違ってくる。合成洗剤は多少の害は

あつても、安くて洗浄力に秀れているのでやめられない、と多くの人が思っていた根拠がまるで崩れてしまう。そういうば、ほとんどのクリーニング屋さんは石けんを使っていると聞いた。汚れが落ちるから専門家もそれを使うのだろう。

こうした実験だけではなかなか子どもたちにアピールしないものである。そこで二組の写真集を紹介する。

一つは青い地球の会の星野正夫さんの人体実験である。「台所用合成洗剤、ニューマレモン原液を、手首3×4cmの楕円形に流れない程度に塗り三週間これを続け、その間の表皮及び体調の変化」を写真と文にしたものである。二週間目には、「肝臓がやられていたため血液中のアルコールが分解されず、ビール一本半で翌日もそのまま酔っている」という。三週間目になると、「体じゅうがだるく、とにかく体を動かしたくない。少し体を動かすと肩でゼーゼー息をする様になり階段もやっと昇っていた」——貴重な報告である。

もう一つは、赤ちゃんのおむつかぶれのカラー写真である。ひどい湿疹やかぶれだった赤ちゃんが、おむつ洗いを合成洗剤から石けんに変えてしばらくしたらきれいに治ってしまったというのである。急所の写真を見せられて、いろんな意味でギアアギア子どもたちは言っているのだが……。

十六ミリの何本か見せたことがあるが、フィルムを都消費者センター（有楽町）まで取りに行くのが大変だし、映写機も借りなくてはいけないので、厳しいことではある。しかし、映像を有効に活用したいと願う。

昨年の子どもの感想を読んでいたがこう。

●合成洗剤がこんなにわるいものだと知らなかった。母にノート

とプリントを見せて、毎週日曜日に説明しながら教えてあげた。とてもびっくりしていた。だから私はこのまへの土曜日に石けんをぬるま湯でかして、洗たくしてみたら、とてもきれいに落ちていて、黄ばみもなかった。とてもいい勉強になったので、これからも続けようと思う。

（女子）

●ぼくは、この授業はたいへんためになったと思う。ぼくのうちは、合成洗剤をつかっていた。だからぼくはこの授業を聞いて、もう合成洗剤は使いたくなくなってしまった。そして家に帰って母に、「これから粉石けんにして」と言った。またシャンプーにも合成洗剤が入っていると聞いて、今は石けんで洗っている。ぼくは、この授業は、ほんとうにためになり、よかったと思う。

（男子）

この授業の一つの成果として、学芸会での学級劇「黒い水」がある。完全な創作ではないようだが、家庭科の授業をまさに十分生かした素晴らしい舞台であった。昨年の学芸会で最も話題になり、かつ最も秀れた劇であったと言つてよい。子どもの劇で珍しく感動させられた。

なんと十回の連載を終えることができましたのは、授業に参加している子どもたちがいろいろ私を刺激してくれたからでした。妻にも二回ピンチヒッターで助けてもらいました。息子や娘にも活躍してもらいました。そして拙い実践、文章を読んでくださった皆様ありがとうございます。

（清瀬市立清瀬第七小学校）

新しい家庭科を創るために

* 中学校では *

大森 嘉子

子どもたちの環境

(三年保育学習の中から)

保育学習をどうみるか

教科書通り保育学習を進めた場合、生徒たちの生活の実情からあまりにもかけ離れているためか、興味を持ち、問題意識が出てくる学習にはならなかった。また、教科書の記述のしかたは、まさに育児書であり、保育が、家庭内の母親の問題として矮小化される危険性を感じずにはおれない。

保育は教育とともに国民の権利であり、子どもが健やかに育つ権利とともに、母親が人間らしく、自由に生きる権利をも同時に保障することができる社会であってほしいと願う。親としての責任を果たしながらも、社会的な支えや保障や協力がなければ、子どもは健康に育ち得ない。親も子ども健やかに生きていくために、保育はどうあるべきか考えたいのである。一方、生命の誕生の尊さを認識せるとともに、性の問題を正しく考えさせたい。

このような視点にたった学習として、「今、子どもたちがどうな

っているのか。どんな環境におかれているのか」という現実を目を向けさせることから出発することにした。

学習計画

1、子どもたちの環境はどうなっているか

①テーマ設定の動機づけ↓②テーマ設定↓③研究活動↓④発表

2、生命の誕生

①女と男の体の違いを知る

②生命の尊さ

3、私の生いたち

ここでは「子どもたちの環境」の班別学習を報告する。食品研究と同じくテーマ設定から発表まで、自分たちの力で考えて追求していくことにした。自分の頭、目、耳、手、足を使つての学習である。

学習の展開

(テーマ設定の動機づけ)

まず、生まれてきた子どもたちを守るために、日本では児童憲章が定められていることを話し、その内容を見ることにした。プリントを配り読んでいくと、「現実と全然ちがうじゃないか？」と声があがった。そこで現実とかけ離れていると思われる項はどれか、また、なぜそれをあげるのか、班別に話し合わせるところ、多くの班が次のものを選んだ。

一、すべての児童は心身ともに健やかに生まれ、育てられ、その生

活を保障される。

九、すべての児童は、よい遊び場と文化財を用意され、わるい環境からまもられる。

今の話し合いの中で、でてきたこと、疑問に思っていることを、教科書も参考にして、班別にテーマを設定する。

(テーマ設定から班別学習へ)

大テーマを「子どもたちの環境はどうなっているか」、サブテーマを「遊びを知っているかな? からだも心も健康かな」とした。

三年生の班別学習ということで、どの程度進んで学習するか心配だったが、二年生で食品研究をしているので、わりにスムーズに進んだ。六月下旬から七月はじめにテーマを決定し、七月から夏休みにかけて、班別に研究を進め、九月にまとめをして発表させた。

幼稚園、小中学校の実態調査、デパートやおもちゃ屋での調査、

遊園地の調査、保育園の見学、保健所、消費者センターへと、各班自分たちの考えた方法で、かなり精力的に取り組んだ。

—主な班別テーマ—

- ・子どもと遊び
- ・今の遊び、昔の遊び
- ・子どもの遊び場と遊び
- ・子どもの遊びと玩具
- ・子どもとテレビ
- ・テレビが子どもに与える影響 (CMを中心に)
- ・子どもとおもちゃ
- ・手作り遊び
- ・子どもの死亡について

・子どもの病気と原因

・子どもと安全な食品

・子どもとおやつ

・お菓子の成分と食品添加物

・保育園について

・交通事故について

・子どもの自殺

〈班研究から〉

★テーマ(テレビが子どもに与える影響)

★テーマ設定の動機

最近の子どもたちは、ひどく言葉遣いが悪いと言われている(私たち中学生も)。まだ幼稚園にも行っていない小さな子どもが、「バツカヤロー」「うるせえ」などきたない言葉を使っている。この原因、覚えさせられている源はテレビ(コマーシャルを含む)にあるのではないか? という疑問、また、言葉だけでなく、遊びや、欲しくなるものも、テレビに大きく左右されているように思われるので、テレビが子どもに、どのような影響を与えているか、調べてみることにした。

★実態調査

この班は近隣の幼稚園、小学校にたのんで実態調査をすることから行動した。

★レポートの中から

小さいときからテレビをよく見ている実態を改めて知った。ある母親の話では一歳半の子どもを泣きやませ、おとなしくさせるために、テレビの前に座らせるといふ。また幼稚園の先生の話の中に、

次のようなのがあった。

①小さい時から、一人でテレビを見る時間が多く、外で元気に遊ぶことが少ないためか、友達が少なく、なかなかみんなと遊べない子どもが増えている。また遊び方がわからない子どもも多い。

②テレビを見ながら食事をする家が多いので、弁当の時間だらだと時間がかかる。食事に集中できない。

③子どもたちが好きなテレビ番組は、魔法を使うものをはじめ非現実的なものが多い。人気スターやキャラクターの出る番組、アニメ、マンガに人気がある。動作などよくまねをする。

④コマーシャルも影響が大きい。コマーシャルに出てくるお菓子や、おもちゃを親によくねだるようだ。

このようにテレビが子どもたちに与える影響はやはり大きく、言葉、遊び方はもちろん、食べものやおもちやなどを左右していると考えられる。

テレビは、子ども向けの良い番組もあるので、いちがいに悪いとは言えないが、見る時間や番組を選ぶ必要があるように思う。小さな子は、自分で選ぶことができないので、親がよく考えてほしい。

一番影響の多いのはCMだと思う。驚くことに子どもたちがよく見る時間帯の中で一時間に50本から60本、時間にして13分～15分のCMが入っている。その中で多いのが菓子と飲料水のCMである。そこでCMを見て欲しくなったものを調べてみたところ、やはり、菓子類をはじめ、飲料水、ハム、インスタントラーメンなど食品が多く、その次に小さい子はおもちや、小学高学年・中学生は時計やカメラである。CMが子どもたちにたいへん影響していることが実際によくわかった。CMにのせられて、私たちは商品を買わされて

いるのだ。

二年生の食品研究からわかったように、CMに出てくるスナック類のように塩分や糖分の多いものや、リン酸塩や着色料を多く含む飲料水などは、子どもたちの体によくない。また高価なおもちやも問題である。

CMは、あまり商品の内容を正確に伝えているとは言えない。キャラクターやスターがでてくるCMが多く、商品の名前だけを覚えさせるため、大きな音で何回も流している。また食品のCMで「添加物の入っていない」というものがあったも、「どんな添加物が入っているか」というものはない。本当はCMで正しく商品を伝えるべきだが、それもあてにならないようだ。そこで私たちは自分で判断して良い商品を選ばなければならない。CMにのせられて必要ないものまで買ってしまわないように気をつけなければならない。また小さな子どもたちには、親が責任をもって考えるべきである。

そしてこの班は、CMに対して大人たちがどのように働きかけをしているか調べた、市民団体や消費者が「子どものためのCM連絡会」を作って、CMの問題点を調べたり、民放に対して、CM規準への要望書を出したりしていることを知った(資料1)。そして発表の最後をこうしめくくった。

「誇大広告、景品でつるCM、人気マンガや人気スターでつるCMなど、スポンサーは、子どもたちを宣伝のマトとしか見ていない。私たち中学生は勉強をして商品を選ぶ目や力を持つことはできません。でも幼児や小学生は自分で選ぶ力はまだありません。だから、親に責任があるのだと思います。このごろはお菓子にしても、おもちやにしても、できた物を買って与えていることが多いように

資料1

●件数と商品

(1978年10月13日午後5時～6時)

テレビ局名 項目	日本 テレ ビ	東 京 放 送	フ ジ テ レ ビ	テ レ ビ 朝 日	東 京 12 チ ャ ン ネ ル	計
ガム、チョコ、飲料 スナックなどの食品	40	32	39	49	31	191
スポーツ用品、おも ちゃ、遊具などの子 どもの身廻り品	7	8	9	7	14	45
原子力、競馬、競艇、 道徳など意見広告、 酒、くすりなどの大 人の商品	10	17	16	20	31	94
計	57	57	64	76	76	330

民放連CM規準への要望書(抜粋)

(マスコミ・広告のための連絡会)
(日本消費者連盟・他 1974年11月)

1. CMの音量は、番組の音量以内にすること。
3. CMによる番組の中断はやめること。
6. 子どもの射撃心をあおるような懸賞やおまけつき
商品販売の宣伝広告はやめること。
7. 判断力の乏しい子どもを対象にした番組について
は、番組の前後に「〇〇会社提供」程度はよいが、
子どもに向かって商品のCMやスポンサー名を直
接訴求しないこと。
9. CMに中学生以下の出演はやめさせること。
14. 子ども番組の主人公の商品化をやめること。
17. 合成洗剤・タバコ・酒など、環境汚染や健康上害
のあるものについては、CMにそのデメリットも必
ず加えること。
18. 健康・保健・美容を売りものにする広告について
は、局側が視聴者からの要望に応じて、その模範の
データを直ちに提供できるもの以外はやめること。
22. 企業姿勢と裏腹な会社の公共広告(空きカンの仕
末をしない会社が「資源を大切に」)はやめること。

(FCT子どものテレビの会編

『テレビCMと子ども消費者の権利』より)

(35)

す。もう一度手作りの良さを大切にしてほしいと思います。」
協力して楽しく取りくんだ班の一つに、テーマ「手作り遊び」が
あった。

この班は、近所のお年寄りや、祖母、祖父、教師といろいろな年
代の人たちに、どんな遊びをしていたか話を聞いたのである。近所
のおじいさんに竹とんぼや、竹の鉄砲など、竹細工の作り方を教え
てもらってきた。

昔は、竹や木など自然にある材料や、着物の残り布などで、作っ
たことを実際に聞いて、自分たちでも作ってみたくなった。手作り
おもちゃの本を見たり、祖母に教えてもらったりして、竹とんぼ、

おてだま、割ばし鉄砲など作ったり、折り紙や、あやとりをやっ
てみた。中学生自身あまり手作りの遊びをやってきていないので、夢
中になった。保育園を訪問して、自分たちの作った人形で、簡単
な人形劇をやって、楽しく子どもたちと遊んできたのである。
また真剣に受けとめざるを得なかった発表に「子どもの死亡原
因」があった。

昭和45年から、新生児の死亡原因のトップが先天異常であり、先
天異常の発生率が20年前にくらべて20倍に増加している。その発生
原因が生活環境による遺伝子の傷害や破壊が大きな要因になってい
ること。そして、『有害な子ども食品』(郡司篤孝著)に載っている

アメリカの子ども向けCM規制運動
——それは憲法違反か?——

1978年4月、F T C (連邦取引委) パーチェット委員長は、8歳以下の子ども対象のテレビCM全面禁止、糖分を含み虫歯の原因になるとみられる食品については12歳以下の学童対象CMを禁止するなどの規制案を発表……A C T (子どものテレビのための行動委員会) もすでに同様の訴えを出しており、直ちに全面支持を表明しました。

これに対して、広告主・放送事業者は一致して規制反対運動を展開、6月、F C C (連邦通信委) の意見聴取の席で、規制案が通れば「子ども番組の経済的基盤と制作動機を失なわせ、放送局の子ども番組向上への努力すら放棄させる」ときめつけています。さらに10月に入って、米上下両院合同協議会は、F T C の規制案は表現の自由に反し、憲法違反の疑いもあると厳しい警告を出しました。

(『子ども白書』1979年度版より)

先天異常児の写真をまわしての発表に、みんなショックを受けたのである。

〈感想文から〉

★子どもの事故について

0歳から6歳まで死因を調べてみると、不慮の事故、交通事故が圧倒的に多かった。0歳から2歳までは不慮の事故の方が多かったけれど、4歳から6歳となると、交通事故が群をぬいている。原因で一番多いのは、とび出し、これは半分を占めている。家から事故現場までの距離はかなり近い。親の不注意によるものも多く、とて

3 D 奥秋

も無責任だと思う。交通ルールをきちんと教えていない親に責任がある。私たちの年頃でも充分交通ルールを知っているはずなのに、斜め横断や、信号無視で事故を起こしたりする人もいるのだから。一人一人が気をつけて、少しでも事故を減らすようにしなければならぬ。また自動車やバイクを運転する方にも充分注意をしてほしいものだ。

★保育園について

3 H 高野

年々、保育園が必要とされてきており、その理由として、女性結婚後も仕事を続けたいこと、核家族化などがあげられる。保育園が社会と大きなかわりがあることがわかった。保育園は年齢別に方針をたて、家庭よりもより内容豊富な保育をしていること、母親さんの仕事の重大さ、保育に関する知識も多少得ることができた。私は保育園を訪問し、六年間も通う子を見て、ちょっとかわいそうな気がした。でも保育園児の方が、身の回りのことはきちんとつけられていて、よいところもあるし、女性が働くためには、どうしても必要だし、まだまだ不足しているというので増やしてもらいたいと思う。

だけど、親から離れて保育園に通う子どもが増え、その上、おもちゃも昔のように、お手玉、お人形のように、母親がまごころをこめて作ったものは少なくなり、できあがったおもちゃや、ゲームを買い与えている状態、又テレビが今の子どものおもり役となり、その影響は大きく、お菓子、おもちゃ、遊びにも現れている。私はこのようなことを知り、親と子のつながりがうすくなったなあと思ひ悲しくもなった。

私は生徒たちの発表を聞いて、子どもたちは、外部のさまざまな影響（生まれる前の母体を受ける影響も含む）を受けながら育っていくこと。子どもたちの発達にとって、最良で最適な環境を用意することは、社会の共同責任であり、親を先頭にした大人たちが、自分たちの生活の中から創り出す責任があることを、痛烈に突き付けられた思いがした。

私たちは「生きる権利」をきちんと主張できる人間になりたい。そのためには学習を続けなければならない。この学習が、その入口になるように、保育学習を、生命の尊さをふまえた上で、自分の生き方を求めていく教材と考えたい。

私の実践で性の問題は、生命の誕生で、男女の体のしくみや出産を、保健の学習に少し肉づけするぐらいに終わっていて、不十分な点が多い。男女共学で、「お互いの性を理解しよう」という題材を設定するなど、性の問題をどう扱うか、いろいろな実践を参考に検討することが、今後の課題である。

おわりに

この連載により、今までの私なりに作ってきた実践の主な部分をまとめることができうれしく思っている。私は、生徒自らがテーマを設定し、調べ、学ぶという研究学習に大きな期待をしている。それも、個人研究ではなく班別研究に力を入れている。学習過程の中で、意見が合わなかったり、かってな行動をとって、仲間割れをしたり、また話しあって協力体制ができたり、この四苦八苦が大事である。また放課後の自由研究ということで、クラブなどとの時間調整や、みんなで時間を生み出す苦勞など、時間はかかってその中

で精力的に学習を進める力、行動する力こそ大切で、今必要であると思う。

年々、このような学習に積極的に参加できない生徒が増えていく。今年など、発表まで持っていくのに一苦勞だった。他教科では、あまり研究学習をしていないことや、学級活動や生徒会活動で自立的な創造活動が少なくなっていることにも、原因があるのだらう。だからこそ、班別研究学習に、こだわり続けているのである。

書いていて私自身の力不足を痛感した。独断の部分が多く、これでいいのかという不安を感じながらの実践であった。「実感ある生き方、主体的な生き方」を探る教科として、「何をどう教材化するか」ますます求めなければならない。

最後になりましたが、毎回読んでくださった読者の皆様に、いつも遅れて原稿を出したため迷惑をかけた編集者の方々に、そして、半田先生の暖かいご指導に、心から感謝申し上げます。

（東京都町田市立町用第三中学校）

☆お知らせ☆

藤沢市立村岡小学校の家庭科教師、名取弘文さんの公開授業が、二月十七日（金）（十時～五時）に行われます。詳しくは左記へお問い合わせ下さい。

251 藤沢市弥勒寺一の十六の一 村岡小学校
電話 〇四六六・二六・三二九〇（名取）

新しい家庭科を創るために

＊ 高等学校では ＊

入江一恵
西本和代・町田道子

子どもの発達を考える

はじめに

「これから、先生の授業受けたくないんです。いいでしょうか」。
十二月に入ったある日の放課後、二年生のA子が職員室の私の席にきて切り口上に言った。一瞬、彼女の言おうとしている意味がわからなかった。「どういうこと？」私は問い返した。三十年近く教師生活をしているが授業拒否にあったのは初めてである。実は、保育の授業を受けていたら涙が出てしかたがなかった。じつとがまんしていたが終わったとたんに泣き伏してしまったという。友達も変に思ったみたいだし、次の授業を平静に受ける自信がありませんという。ハッとした。私は彼女の心を傷つける発言をしたのだろうか。そんな問いが頭の中を駆けめぐった。「プライベートなことではないたくなのですが……」というものの何か訴えるような目が気になり、ここでは落着かないからとストープのある別室に誘った。
暖をとりながら、彼女がボツボツしゃべり出したことは、先生の授業の母と子の話は強烈すぎる。私にはたまらない。私はあの人の

ことをおかあさんとよんだことはない。もの心ついた時からあの人は私を憎み、私も憎んでいるという。私たち姉妹は結婚もしたくないし、子供も産みたくないと言っているという。――私には、どんな事情でそうなったかわからないが、あなた位の年齢になれば自分を客観視できるのではないか。そのことによってむしろあなたはおかあさんを今までと違った目で見ることができるとはならないか。勇気を出して次の時間も受けてごらん。そして、あなたの感じたことを卒直に話しにきてちょうだいと約束した。それでも二回目彼女は朝から欠席して授業を受けなかった。そして三回目、「私の生育歴」をもってきた。そこからふつきたように授業を受け、三月には、白い角封筒が私の机上にあった。「先生、大変ご心配かけました。でももう大丈夫です。」一年たった数日前、廊下で「先生」と肩を叩く彼女の明るい声にホッとした。

こんな話は特例かも知れない。しかし、保育とか家族とか人間を対象とする領域では、生徒の現実の生活をゆさぶる波立たせる。それをこちらからねらっているわけだが、対象の生徒は多様である。時にはその対応に戸惑うことがある。私の保育の授業はこれでよかったのだろうかと反省させられる。その反省の気持ちをこめて最終回は茸合高校から家庭一般保育領域と選択保育の実践の一部を報告する。

発達を考える視点

本校では、家庭一般の学習の最後を保育とし、発達からはじめて愛と性でしめくくことにしている。どの領域でも導入の部は大事にしているつもりであるが、特に人とかかわりを主題にする家族とか保育では導入の部に私のエネルギーの半分は注ぎこむ。

先ず発達の節目をおさえ、発達観をもとう。かつて「家庭科教育」誌に掲載された大分県の重石美代子氏の実践報告よりヒントを得て、次の二つの詩を導入に利用させていただいている。

ぼくは六つになった

アレキサンダー・ミルン

一つのときは、なんにもかもはじめてだった。

二つのときは、ぼくはまるつきり、しんまいだった。

三つのときは、ぼくはようやくぼくになった。

四つのとき、ぼくは大きくなりたかった。

五つのときは、なにからなまでおもしろかった。

いま、六つで、ぼくはありったけ、おりこうです。

あなたの子どもは あなたの子どもではない

ライト女史

あなたの子どもは、あなたの子どもではない。

かれらは人生の希望そのもののむすこでありむすめである。

かれらは、あなたを通じてくるが、あなたから来たものではない。

そしてかれらは、あなたと共にいても、あなたに属してはいない。

あなたはかれらの体を家に入れてもいいがかれらの心をそこに閉

じこめてはいけない。

かれらの心は、親の夢想だもできない明日の家に住んでいるのだから。

あなたは、かれらのようになろうとするのはいいがかれらをあなたと同じ人間に仕立てようなどとしてはいけない。時は決して後帰りはしないし、足踏みさえもしてはいないからである。

あなたは弓であり、あなたの子は、それから送り出される生きた矢である。

あなたは噴射ガスであり、あなたの子どもはジェット機として送り出される。

あなたを忘れて飛行機はとぶことはできない。

ヒトから人への生物としての発達には、歴史、文化の強い働きかけがある。ミルンの詩は、発達の節目をさりげなくおさえ、何度読んでもいい詩である。児童観の流れを話したあと、ライト女史の詩は素直に生徒の心に響く。この詩から連想する自分のイメージをふくらませ、絵に表現させたこともある。

次に発達に否定的な影響を与えているものを考える。

材料はいっぱいある。NHKテレビドラマ「素直な戦士」の中の兄と弟の話題を投げかける。また、アメリカのケンプ報告によって話題となり、日本でも問題になっている被害待児症候群の問題にもふれる。子供が親から虐待を受けている場合、その親自身も救われない悲観的状况にあることなど話し、失われつつある家族と地域の育児機能の回復について問題提起する。次に環境問題としての奇形猿に入っていく。

兵庫県には、淡路島のモンキーセンターがあり、奇形猿の問題は身近な問題であるにもかかわらず案外知らない生徒も多い。特に一

九六〇年代の後半に先天性四肢退化異常が異常なまでに集中して現れている。大谷英之氏の写真展を見てショックを受けた私は、猿の問題だといって私たちが見過ごしていいのだろうかと訴える。写真集中の次の文章を読む。――昭和五十年八月の蒸し暑い日、私は大分県高崎山で一組の母子ザルに出会った。いつも何か訴えるような目をしたひ弱な子ザルとそれを労わり、かばい続けるユンデと呼ばれる母ザルの姿には何か強く心を惹きつけられるものがあつた。……ユンデは子ザルをしつかりと抱いたり背負ったりして、少しずつサルとして生存するための知識をわが子に教えようとしていた。

……ところが子ザルは母の背中から離れ崖下に叩きつけられたのである。ユンデは動かなくなつたわが子を抱きしめ自分の乳房をふくませたのである。しかし息絶えていた子ザルには、乳を吸う術はない。すると、ユンデは口うつしで子ザルに乳をのませようとした。白い筋を引いて乳が流れた。私はこの光景を目撃し、胸があつくなつたが、これでユンデもわが子の死を確認するだろうと思つたのである。ところがユンデは、いつまでもあきらめなかつた。……人間たちは彼女から子ザルを取りあげようとしたが、ユンデは決して離そうとしなかつた。哀しげなまなざしをミイラのわが子に注ぎ続け、両手でゆさぶり、そして抱きあげ、何とかして蘇生させようと必死で行動する彼女の姿は凄絶であつた。私は夢中でシャッターを押し続けた。――

シーンとなつて涙ぐむ生徒さえいる。あとの話し合いで餌付けの問題が人間の食品公害につながる恐ろさが話されると共に、猿の母性愛が話題になつた。

次に子どもの情緒と要求について調べる。

ここでは考える材料として『狼にそだてられた子』の抜粋プリントを用意する。図書室にも何冊か備えてもらつて動機づけのあと読むようにすすめている。シング夫人のマッサージがあつて、カマラは体を人間らしく使えるようになったこと、子供と文化との結びつきの中で、最も根本的なものは子どもが抱く安定感である。それは触知できる運動感覚と身体を支えられる快感とに左右される。――この所を『ぼくは12歳』出版以後の高氏のことばとも合わせながら強調する。スキンシップは、時間・量の問題でなく密度と質の問題であることを。

次にハーローの赤毛ザルを使った実験での布製と針金製の代理母の比較をプリントによつて説明することにより、母性的接触やスキンシップの重要性の認識が更に深まる。

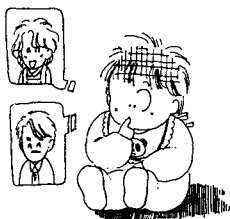
導入の部二時間―三時間扱いの授業報告で終わってしまったが、A子のことがあつてから、この授業の流れでよいのだろうか、生徒に提供する資料についても再考している。

「一つの家族論」まずのきよしを

テキストにはじめる選択保育

かつて「家庭教育」誌に連載されたますのきよし氏の「一つの家族論」に、私はハツとするような新鮮な驚きを覚えた。現代の家族問題、子育てに関する記事は毎日の新聞に事欠かないし、数々の論評は、これらの問題点を明快につき、方向をさし示している。しかし、それに振り回され、袋小路に入ったような気持ちにさせられることもある。氏自身の子育てを通じて、生活の匂いと、とらわれぬ発想に感動した。「これだ!」と思つた。幸い、講座は十五名という小人数(男子二名を含む)。氏には無断で申しわけなかったが、

子供とのななめり合いを通して自分の中に眠っていた優しさ思いやりなどの感性が呼びさまされる



我か子と意識するのは
助産婦を信頼
固りの人を信頼
動物は出産直後いふに似ること

子育て行動を引き出すもの
H) ヒナの泣き声
ヒナの南い口口の刺激

人間 { 赤ん坊、乳児、幼児、児童、少年、青年、成人、老人、高齢者 }

誰を愛する女

我が子育

両刃の剣

我子死んでおはすや
↓戦争反対の
声の高まり
我が子だけは大学にパスしてほしい
↓受験戦争へかりたて不正入学も
おこり傳える

必ずしも絶対的
なものではない

M
•
T

「わたくしたちが、あるひとつのことを考えるにあたつて、今ま
でと全く違つた視点から見ていくと、案外、何気なく見過ごして
いたことが生き生きとして映し出され、視野が開けてくるもので
す。現代の子育ては、あまりにも問題が多いとされています。ゆ
きづまり、果ては育児ノイローゼになっていくケースも見られま
す。動物たちのすさまじい、また、ほほえましい習性から、『ヒ
ト』として何か学ぶことはないでしょうか。」

文集の中から二点ほど紹介する。

なかったことが見えてくる。読み終わって提出された感想文には動物たちの様々な子育てに対する驚きがのべられている。おもしろい文集を出そうということになる。私も表紙裏に次のようなよびかけを書いた。

一つのドラマだと思いました。そういう中で子殺しという一つの悲劇は私の心を傷めました。例えば、リカオンという動物は、子供のために涙ぐましい働きをするにもかかわらず、平気で殺してしまうのです。人殺しや憎み合いは人間だけでなくさんだと言いたい気がしますが、これも動物たちにとっては生死にかかわることなのでしょうが。

I・A

私がもの心ついた時には、もうすでに両親はいませんでしたので、家族のことってわかつているようであまりわからないんです。でも、最近では母子家庭型が多くなっていると思います。つまり、男は仕事、子育ては女の仕事という分業です。だから、ヒトが属している一夫一婦型のコモナーモセットというサルが授乳と出産以外は、でも当然子育てができますよというのには感心しました。

また、最近の核家族化の中で、孤独に子育てをしている人間社会に対して、皇帝ペンギンの場合、ヒナからある程度成長すると残っている大人に見守られながら生活していきます。他人の子も自分の子と同じように見守っている——子供にとってしあわせな——こんな社会を人間も取りもどせないかと思いました。

ふれあいを求めて手づくりの玩具

ゆがめられた子育て——いま、子供たちが失っているものは——を考え、話し合う中で、「たべもの」と「遊び」がでてきた。家族論について「たべもの」を学習し、次に「遊び」の問題をとりあげた。

。いま、子どもたちはどんな遊びをしているのだろうか。

。子どもたちの遊びを阻害しているものは？

。私たちの子どものころは？

。両親やおばあさんにも聞いてみよう。

そのⅠ 伝承玩具

両親が離婚して母親と祖母と三人ぐらしのA子が、「おばあちゃんがこのごろ盛んに私に教えたがるの」という話から、親が子に伝える伝承玩具をテーマにした。お手玉、お手玉入れの袋、あやとり、ごてんまり、とおばあちゃんが毎晩一つずつ教えますからねと大張り切り、他の生徒はそれを伝授してもらうわけだが、他に竹とんぼやかん下駄など子どもが子どもに教えるものを調べるグループ、わらべ歌を調べるグループなど、興にのってやることができた。

そのⅡ 自然物を利用したおもちゃ

本校には、緑と紅葉の美しい木立の多い庭がある。通称、哲学の道の紅葉は実にすばらしい。十月ともなれば楓の間のザクロが実ってくる。「最近の生徒はザクロをとらなくなったな。食べられることを知らないのではないか」など教師の中で話題になる。校庭のはずれに大きなかがやが夕陽に映えて金色に光って見事である。自然物を利用したおもちゃ、今年のテーマはこれになった。ドングリゴマ、笹舟、木の葉ぞうり、貝の絵合わせ、ピーナツにわとり、すずきのみみずくなど……。文化祭に展示したら「おしんだおしんだ」とすずきのみみずくが好評で「おしん」をみていない私はびっくり。

そのⅢ 手づくり絵本

この夏、S短大保育科に進んだS子から手紙がきた。「……先生、保育の時間にみんなドワイワイ言いながら、ほんとに一所懸命に作

った私の絵本『ボタンのゆくえ』は、私だけの絵本だとその後も大切にしていました。しかし、先日教育実習に行っている幼稚園に持っていった子どもと読みました。次の日、ある子が私にすりよってきて、『ボタンのゆくえ』の話をするので。感激してしまいました。私の絵本は、私だけのものではなくっていたのです。』

手づくりの玩具のメインは何といっても絵本づくりである。一学期の終わりに図書室に入り、幼いころの印象に残っている絵本について発表したり、先輩の作品の写真集や絵本の実物を数多く用意する。絵をかくことは苦手だから絵本づくりはどうもときめている者も二、三名いるが、大抵は手近な所で自分の家の犬が主人公になったりしてストーリーができあがる。ストーリーをきめ、構想をたてた所で夏休みに入る。製作のほとんどは夏休みを利用する。休み中に学校で会々と、絵本の進行、苦しみが話題になる。九月、一せいに製本に入る。手しおにかけ、産みの苦しみを味わった絵本は文化祭にも展示され、毎年、楽しみに待たれている。

これらの玩具づくりは、子どもの世界を深く理解しなければむづかしい。そして製作のひとつひとつが刺激となって、生徒に子どもとのふれあいとは——子どもと感覚や情緒の面で深くかわり合うことである——を考えさせるようである。

おわりに

長かったようで短かった一年間、いつも締切りに間に合わず編集部に迷惑をかけてしまいました。底の浅い実践が悔やまれたものの、書くことによって問題意識が更に深まり、自らの授業のいい面と悪い面が浮き彫りにされたことは、今後に何らかの形で活かされるように思います。

(神戸市立葺合高等学校・入江)

目の手術という最悪の事態になり、思うばかりで十分な実践報告ができなかったことが残念です。三人の打ち合わせ交流には刺激され、楽しい時間でした。

(兵庫県立西宮今津高等学校・町田)

教育の中に「農」をとり入れている学校を知らない？ と知人に尋ね、教えてもらったのが土の香りのする福知山淑徳高校。十月二十三日の収穫祭、十一月二十日の文化祭に寄せていただき、見ることに聞くこと全てが感激のしつ放しです。いろいろな困難をかかえながらも、教育に対する夢をもち討議をたかかわせながら歩む淑徳の先生方の中に「教育」を見ました。校長先生の出された月よう通信の中に、「物とじかに触れ合っていくという教育を回復させていくこと、知識と経験を結びつけていくこと、生きていく力になる学力とはそういうものではないか。自ら畠を耕し種をまき、実をとり、糸に紡ぐという具体的行為の教育的営みをもう一度考え直してみたいのです。……」という文章がありました。私が土からもとから考え直したいとぼんやり考えていたこと——そのものを、淑徳の教育に見出したのです。それも家庭科の教師だけでなく、校長先生をはじめ教師集団で考え取り組まれている所に感動し、今その渦の中にいます。うらやましがってばかりもいられないこの感激を原動力として、生きる力につながる家庭科に少しでも近づけていけたらと思っています。今後とも情報交換、ご指導をよろしく願います。

(兵庫県立長田高等学校・西本)

尚 糸紡機問合せ先—京都府綾部市並松町上溝口 芦谷光倫

TEL 〇七七三—四二—八一—

『会津娘』、フィルム等に関する問合せ先—尼崎市武庫町一—五四三—一〇二 西本和代 TEL 〇六—四三一—一四七四

新しい家庭科を創るために

* 大学では *

阿部 祥子

家庭科教育の中での住教育

—住教育をとりまく条件を通して—

一、はじめに

人の生活は、家族を構成していきようが、住居を基地として成り立っています。そうした生活の拠点である住居の現状はどうでしょう。住居は、本来「生命・健康・財産の保護をはかり、もって公共の福祉の増進に資す」（建築基準法第一章第一条）ものであり、「健康で文化的な生活を営む権利」を実現する場となっていないければならないはずです。しかし、現実には「ウサギ小屋」と称されたように、我が国の住居の状態は、GNPに比べて世界に誇る状態ではありません。

住宅問題は、量から質の時代となり、「一世帯一住宅」を実現して久しいのですが、住生活に満足している人の割合を、十三ヶ国で比較した結果によると、我が国は韓国（三三％）に次いで下から二番目（四四％）という低さであり、住居とそこでの生活が、持家率

が六割となった現在なお、充たされていないと言えましょう。

いっぽう、耐久消費財については、その多くが高い普及率に達し、自動車や家電メーカー、あるいは商社は別会社をつくり、満たされない分だけふくらんだ住居に対する人々の欲望に目をつけ、耐久消費財に代わる販路を求めて、いわゆる「住宅産業」に進出しています。そのため売り手側からの住宅に関する情報は、新聞折込みや電話などを通して過剰とも言える状態で送られてきます。

しかし、これらの魅力的な装いで送られてくる情報を、適格な判断を持って選択する力は、私たちにあるのでしょうか。つまり、生活の見通しに基づいた住居観や住要求を根底に据えた判断力を持たないままに、私たちは、情報に流されているのではないかと思うのです。最近の住宅会社、団体の子ども部屋に関する調査結果のラジオ・テレビ・新聞を通した報道を、一人一人がどのように受けとめたかを考えれば、情報を選びながら受けとめることが、いかに困難で、また必要なことかわかりただけだと思います。

また、住居を取得する力は、所得に応じますが、「男子一生の事業」である家を持つということは、我が国の住宅政策である持家主義と合致し、望ましい住居像を描いても、まず持家を得ることが第一となり、「遠高狭」の質の悪い住居を手にし、「住宅産業とは？」の間に、直ちに「クレーム産業」という答が返ってくる事態を生み出しています。

更に、多くの人々はローンを借りて持家を購入しますが、時には無理な借金のため家計を圧迫し、重ねて借金をし、一家離散や一心中事件など、「家を得て家庭を失う」という悲劇すらみられます。

こうした事態や状態を改善する、あるいはのり越える道すじには、色々な方法が考えられます。住居に関する知識や教養を高めることが必須ですが、成人してからの突然の学習で多少は身につけることも出来るものの、幼い時からの学習の結果として、現れるのが効果的なのではないかと考えられます。こう考える時、学校教育を通して住居に対する考え方や意識・知識を形成していくことも、大切な国民の課題だと言えましょう。学校教育は、次の世代を担う人々を育て大切な仕事であり、現在の住教育が将来の住居のあり方を、大きく左右するといえるからです。

二、家庭科の中の住教育

学校教育の中で住居に関する教育を担っている教科は、間接的には社会科、保健・体育、図工・美術などですが、直接的には家庭科です。しかし、家庭科という点、現在は「料理・裁縫」は思いうかべても、「住居」にかかわる教科であるとイメージする人は少なく、衣食領域は家庭科の中で身近な感を持たれているものの、住領域には距離感があるのが現状でしょう。そして、住に関して、どこでその教養を身につけてきたかと考えても、余り明確にここで身につけた、という答が見い出せずにいるのが実際なのではないでしょうか。この実感からみる限り、食や衣にかかわる国民的運動はこれまでもあっても、国民的な住に関する運動が生まれようもなかったというふうなことがうなづけます。

いっぽう、家庭科の中の住居領域は、衣食住と同一レベルで扱

ことは出来ず、学習する上で次のような困難があることを、田中恒子²氏は指摘しておられます。すなわち、

① 複雑な機能を有する住空間を認識することの困難性

② 今日の日本の家庭生活においては、衣食にくらべて住居の状態は生活の矛盾が集中的にあらわれていることからくる困難性

③ 理解（認識）したことを実習で確認（検証）するという手だてが学習指導要領では全く遊離していることにも見られるように、学習方法上の困難性

④ 学習して獲得した理解を現実の住生活の改善に向けていくことの困難性

田中氏の指摘するような住居領域の持つ学習上の困難性は、そのまま家庭科教員が住居領域を教える上での困難性となっていると言えます。そのため、住居領域に当てる時間は他の領域に比べて少なく、また極端な場合には子どもが興味を持たないとして省略するなどの状態もみられます。こうした住居領域の軽視に対しては、家庭科教員の責はまぬがれないものの、家庭科教員が住居領域を他領域と同じように扱う力が、教員になるまでの間に育てられてこなかったことにも大きな原因があるのではないかと思います。つまり、家庭科教員をとりまく条件が整えられていなかった結果が、こうした住居領域の軽視を生み出している一因と考えるのです。

三、標準的な授業時数と家庭科

家庭科は、小学校五年生から始められ、五・六年ともに七〇時間が標準的な授業時間として当てられています。小学校を通じた総授業時間数の中では、二・四％を占めています。中学校では、一・二

年は七〇時間、三年で一〇五時間の授業を受け、中学校の総時間数の内七・八％が家庭科の授業ということになります。小学校の一時間を四五分、中学校は五〇分として計算しますと、義務教育期間を通じた家庭科は、全教科あわせた授業時間数の内四・四％ということになります。

ところで、家庭科の学習領域を、住居・食物・被服・その他の四領域に分け、それらの時間配分のめやすをみますと、図1（四九頁参照）のようになります。家庭科の中での食物・被服領域の学習が、標準的に比重が重く、住居領域が軽く扱われていることが一目瞭然です。住居領域は、小学校では二五・七％、中学校では十二・二％であり、義務教育期間を通じては、十六・八％が標準的には当てられる訳です。また、現行では女子のみに必修の高等学校の「家庭一般」では、十四・三％が、住居領域の標準的な授業時間の配分のめやすとなっています。

以上みるように、衣食領域に比較して住居領域が軽く扱われているのは、衣食住の順位を示し、衣食が足りて初めて住に関心が向うことを現していると言えましょう。しかし、成人してからの住居に対する関心の深さや現実の問題の多さを考える時、こうした授業時間の配分のめやすは、疑義のある所です。

四、担当科目からみた領域

最もポピュラーに家庭科の教員になる方法は、大学や短期大学で、必要な勉強をすることです。図2は、家庭科教育に関連があると思われる大学・短期大学について、専任講師以上の担当科目の領域をみたものです。

国立大学の教育系学部は、全教科にわたる教員を養成する機関で

あり、特に国立大学ということもあり、文部省の指導要領にみあって教員配置がされることが当然と思われます。全教員の中で、家政系教員の占める割合は、五・九％であり、先にみた義務教育期間の家庭科の授業時間のめやすが、全体の四・四％であったことを考えあわせると、適切に教員が配置されていると言えましょう。

しかし、担当科目別の領域を見ますと、住居領域は、わずかに一・二％でした。明らかに住居領域を専門としている教員でも、担当科目が「家庭管理」と記してあれば、その他の領域ということになります。こうした教員を加えれば、多少住居領域の教員は増えますが、十人を越えることはありませんでした。

大学の家政系学部や学科は、家庭科教員養成を主たる目的として設置されている訳ではありませんが、そこから多くの家庭科教員が巣立っていることを考える時、家庭科教育を考える上では、重要と思われます。

国立大学の家政系学部は、全国で二校に設置されているのみで、住居領域の担当科目教員は、十二・七％と、教育系学部に比し高率です。これは、奈良女子大学に住居学科があることによります。また公立大学の家政系学部での住居領域の担当者は、十・一％であり、大半は大阪市立大学と京都府立大学の生活科学部住居科の十九人のスタッフで占めています。

私立大学にあつては、住居領域の担当教員は、わずかに三・一％（二四人）で、この内日本女子大学と岐阜女子大学住居学科の十四人のスタッフをさしひく十人が、三十校に所属していることになりました。

大学の家政系学部全体では、住居領域担当者は、五％に満たず、

第一に食物領域（三九・二％）、第二に被服領域（二五・四％）が多いことが明らかです。なお、住居学科を除いて家政系学部在住居領域の担当教員をみると、残るは十二人であり、二五校では住居領域の担当者がいず、非常勤講師によって住居に関する科目が開講されているものと思われまゝ。

短期大学の家政系学部をみると、公立・私立を問わず、食物領域が五割強、被服領域が約三分の一で、両者を合わせると八六％強となり、衣食の比重が極度に重い状態です。住居領域は、全体でわずか一・八％であり、約四分の三の短期大学には、住居領域の教員が配置されていません。短期大学では、衣食以外の領域が、いかに軽んじられてきたかが明らかでしょう。

五、研究者の研究領域

大学や短期大学は、教育の場としてばかりではなく、研究の場としても機能しています。学術上家政学を専門としている研究者の領域別割合も、家庭科と家政学の関連を考える時、重要な柱とされます。なお、家政学分野の研究をしても、主な活躍の場が他分野にある場合には、その他の領域と考えて領域を分けています。

大学の場合、被服領域の研究者が約三分の一と最も多く、次は食物領域の三割強であり、短期大学では被服領域が約四四％と、大学のそれより高く、食物領域は約三分の一と、大学とほぼ同じ割合でした。

担当科目の領域別割合と比較しますと、大学・短期大学ともに、被服領域の研究者の割合が高く、食物領域は研究者の割合より担当科目数の割合の方が、大幅に高率でした。

住居領域の研究者の割合は、大学では約四％、短期大学では一％

と、担当科目からみた住居領域の割合より、更に低い状態でした。明らかに住居領域の研究者であり、他分野を主な活動の場としている研究者を合わせても、全研究者の四・六％にすぎず、家庭科の領域別授業時間数のめやすとは、大きくかけ離れた数値でした。

六、教員採用試験問題の領域

こうした担当科目や研究分野で構成されている大学や短期大学で勉強した学生は、家庭科の教員採用試験に合格して、始めて家庭科の教員となる資格を得ます。図4は、昭和五五年・五十六年度の二年間の採用試験問題を、領域別にみたものです。採用試験の問題は、非公開で受験生の協力により復元されたものであるという限界はありますが、傾向は見る事ができます。

中学校家庭科教員採用試験問題の場合、二年とも食物・被服の両領域で約六割を占め、先にみた領域別の授業時間の配分のみやすとはほぼあっています。また国立大学教育学部家政学関係教員の食物・被服領域の教員配置や学術上家政学の内食物・被服領域を研究の専門領域としている研究者の割合とも、大幅に異なることはありませんでした。

しかし、住居領域についてみますと、両年とも一割を欠き、住居領域の授業時間のめやすが約十七％であることを考え合せますと、出題率が極度に低いと言えましよう。また、住居領域の出題がない県もみられ、領域別授業時間のめやすに応じて家庭科の授業を展開しにくい状況が、教員採用試験問題の出題のしかたの中にも原因がある、と言えましよう。

高等学校の場合、「家庭一般」以外の専門領域を教えることもあり、一率には言えないのですが、住居領域の出題は五％前後と少な

く、また出題のない県すらみられ、中学校同様に授業時間の配分のめやすに従って授業を行うことが困難な背景をつくり出していると思われました。

七、教科書の領域

ところで、教科書のページ数は、授業を展開する上で、時間配分のめやすとなると思われますが、領域別にはどのような配分になっているかをみると、図5の通りでした。

中学校の場合、住居領域は、文部省検定済家庭科教科書の中でも、一割弱の紙数であり、二冊とも被服・食物の両領域で、七割弱を占めていました。領域別の授業時間の配分のめやすである六一・二%より多く、また担当科目や研究者の領域別割合と同様、家庭科の教科書でも、被服・食物の領域が重んじられていることが明らかにわかります。

高等学校「家庭一般」での被服領域は、授業時間のめやす(二五・七%)と比し、二社を除き少なかったものの、食物領域は、授業時間のめやす二八・六%より、いずれの教科書も、紙数を多くさいていました。

それに対し住居領域は、授業時間のめやすである一四・三%より低く、多いものでも一一・二%、少ないものではわずか六・二%と、約二分の一にも満たない紙数のさきかたでした。

八、研究発表論文の領域

こうした状態で成立している家庭科ですが、現場の家庭科教員や家庭科に関心の深い研究者の研究発表論文を通して、領域別の割合を見たものが、図6です。「日本家庭科教育学会誌」の創刊号から昭和五十七年五月号までの三〇冊に掲載された論文についてみたので

すが、食物領域の九三論文(二四・六%)が最も多く、次いで被服領域の八三論文(二二・〇%)でした。研究者の層の厚さ、授業時間の領域別配分のめやす、教科書の紙数のとり方などを考えあわせると、当然の結果と思われるす。

住居領域は、それに対し十一論文(二・九%)のみであり、家庭科教育を日々担っている教員や家庭科に関心の深い研究者の間でも、住居領域の取り組みは、非常に少ないと思われました。

九、おわりに

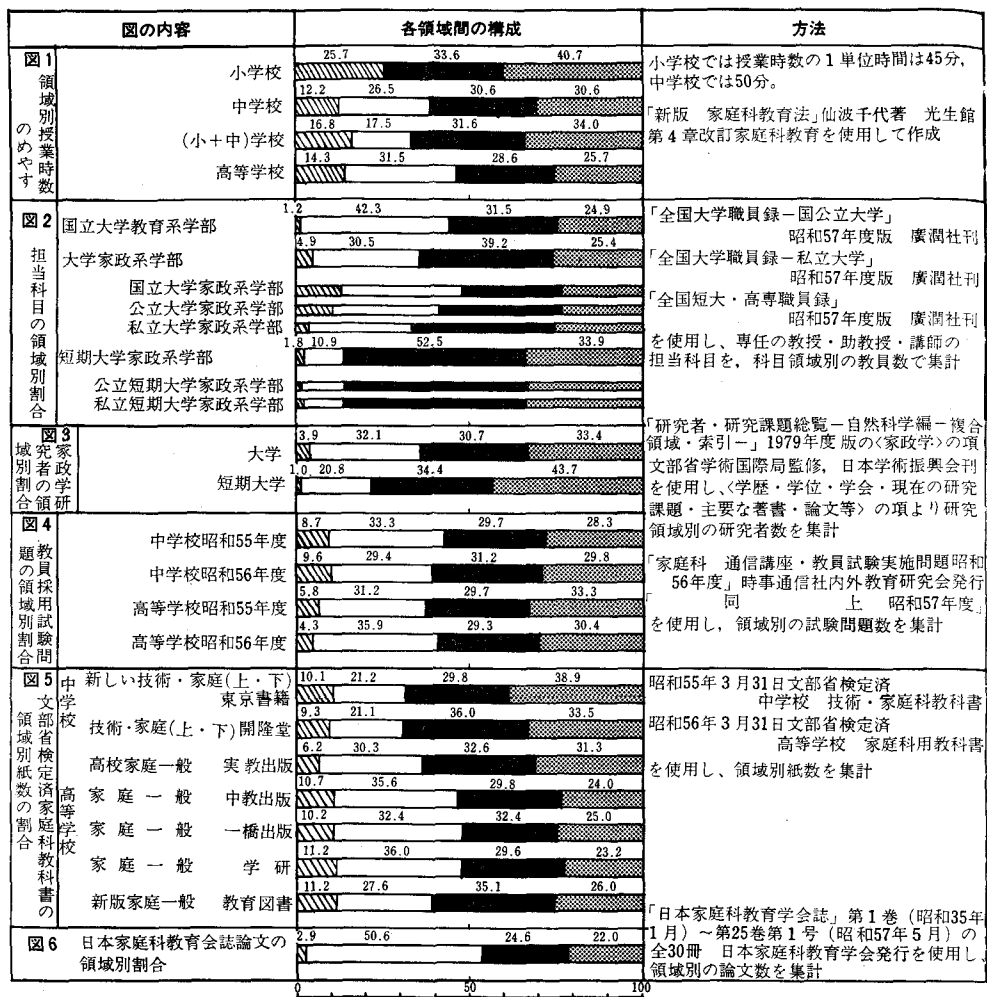
以上、家庭科教育の内容面ではなく、とりまぐ外的条件を、図2から6のように領域の間の差を通してみてきました。

これらの結果を通して、次の諸点が明らかに指摘出来ます。

まず第一に、担当科目、研究者の研究、教員採用試験問題、教科書、学会誌いずれの面でも被服・食物領域の比重は、授業時間配分のめやす以上に重かったことです。従って、家庭科に対する「料理・裁縫」というイメージは、家庭教育をとりまぐ外的な条件からみる限り、現状を正確に反映した結果と言えましよう。

特に短期大学では、担当科目で教員の配置をみると、被服・食物領域で九割近くを占めており、また研究者の領域をみても八割近くが、被服と食物領域であり、住居を初め他領域は欠如しているといっても過言でない状態でした。家政系学部が、即家庭科教育に直結する訳ではないものの、衣食ばかりではなく、住や他の様々の領域もあわせて総合的に教育を行うことが、生活者を育むという点からはもとより、家庭科教員の資質にも不可欠であり、もつと様々な領域をとり入れていくことが必要と思われます。

第二に、家庭科教員採用試験問題の出題が、各領域の間で balan



住居領域
 その他領域
 食物領域
 被服領域

ス良くなされることが、家庭科
 教員の質を確保する上で必須条
 件とするなら、出題は、少なく
 とも教科書や授業時間の配分の
 めやすにみあってなされるべき
 でしょう。また住居や保育領域
 の出題がみられない果もありま
 すが、家庭科教育が学習指導要
 領を充たす条件すら整っていない
 と言え、必ずこうした領域の
 出題を加えることが必要と思わ
 れました。

第三に、住居領域の場合、教
 育者の担当科目、研究者の研究
 領域、教員採用試験問題の出
 題、教科書、家庭科教育関係論
 文のいずれの面からも、家庭科
 の中での領域間授業時間の配分
 めやすより低く扱われていまし
 た。従って、家庭科の教員が、
 個人的努力のもとに、住居領域
 の授業を展開していても、それ
 を支える外的な条件は整ってい
 ないことが明らかでした。

以上にみたように住居領域

は、学習する上での困難性がある上に、家庭科の教員にとり、酷とも言える条件の下で授業が行われていると言えます。

西山卯三氏は、昭和五七年に発足した日本住宅会議のよびかけ人として、「日本の大方の住居が、経済大国といわれながら、歪んだ都市化の中できわめて粗悪、狭小であることは、誰れの目にも明らかである。しかし私は、日本人の住居が貧しいということよりも、その貧しさの意味を国民が理解していないことに、よりいっそうの

危機感をもつ」と述べておられますが、こうした発言が笑い話になる時代を、早急に実現したいものです。
(日本女子大学)

*1 一九八〇年国際価値会議事務局『十三ヶ国価値観調査データブック』

*2 田中恒子「学校教育における『住』教育の現状と課題」『住居学ノート』西山卯三編著 勁草書房（一九七七年）

- ウィ書房より
三つのお願い
1. ひき続き、Weのご購読を
 2. 増刊号のご注文を
 3. '84年4月号から一冊30円の値上げを

読者の皆様、どうぞよろしくお願いいたします。

Weもいよいよ3年目を迎えようとしています。

12月号のアンケート結果にもありますように、Weを読まれるようになったきっかけは「友人・知人のすすめで」という方が最も多いのです。大資本に物言わせ、マスコミを利用しての大宣伝が人を動かす時代に、人間関係のネットワークを生かし、口コミで広がるWe——世にも不思議な、ありがたいことだと思います。心から感謝申し上げます。その上に、心苦しいのですが、お聞き届けいただきたいお願いがあります。

◆3年目のWeは、全体の半分を、創刊当時よりの懸案であった大きい活字とし、デザイン・体裁もセンスアップして、目にやさしい雑誌に一步近づけます。さらに8頁ふやして、内容も充実させてまいります。

◆ご期待の上、ぜひご購読をご継続下さいませ。今月号で契約切れの方が大勢いらっしゃいますので、巻末に振替用紙をとじ込みました。今すぐに3年目のご予約をお願い申し上げます。

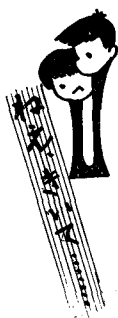
◆夏季フォーラムの評判をお聞きでしょうか？ 今も参加された方からの熱い便りが届きます。それほどに強烈な刺激だったということでしょう。ここで提起されたものを、私たちの共有財産にするためにも、ぜひ増刊号をご活用下さい。定価は、700円（含送料）。ご注文は、住所氏名明記の上、増刊号と一筆添えて、切手でお送り下されば結構です。

◆心苦しいけれども、どうしてもご了承いただきたいのが、3年目の誌代です。活字を大きくして増頁となると、現在の誌代では無理です。そこで'84年4月号から、一冊530円にさせていただきます。従って年間購読料は、例月号530円×10と、増刊号700円で年間6,000円となります。増刊号は今後毎年発行します。

◆ただし、このお知らせ以前に、誌代を振込み、小社から領収書を受取られた方には、領収書記載の通りに本誌をお送りします。たとえ、5年分でも10年分でもです（年間5,000円の誌代は、例月号10回分ですから、増刊号については、別途ご送金いただくこととなります）。

ご不明の点は小社にお問い合わせ下さい。

Tel. 03・326・1380



「戸塚」では私は直らなかつた

宮 淑 子

「ねえ、きいて。私のお母さんさあ、まだ戸塚ヨットスクールのやり方は正しかったっていつてんだヨ。戸塚裁判はきつと戸塚校長の方が勝つてサ」

——へえーッ。三人も訓練生がなくなっていることが明るみに出たいまでも？

「そう。アナタを直すところはあそこしかないって信じてるの。アソコから帰ってきたときのアナタは、とても素直でいい子だったといつて。『戸塚』が閉鎖されなきあ、お母さん、またわたしを入れるつもりよ」

Y子。十五歳。名古屋市内の公立中学の三年生。一六四センチのジャンボなからだを毛皮のコートに包み、髪を茶色に染め、タバコを口に食わえて喫茶店に陣取ると、ひと目でツッパリだとわかる。かつあげ（恐喝）、アンパン（シンナー遊び）、対教師暴力……と性にからむこと以外のツッパリのすることはすべてやって、ただいま保護監察つきの身。昨夏、みかねた母親に戸塚ヨットスクールへ入れられ、三カ月の「地獄の特訓」を受けた

元訓練生のひとりでもある。

——「戸塚」へは、親の一方的な意思で入れられたの？

「そう。それもお母さんのね。お父さんは反対だったんだけど、ウチはお父さんよりお母さんの方が気性が激しいからね。お母さん、地元の新聞に連載された『スパルタの海』に感動してサ、私を直すにはアソコしかないと思つたらしいよ。学校の教師でさえ、『戸塚』のやり方は半信半疑だったのにサ」

——入校して驚いたでしょ？

「驚いたなんてモンじゃないよ。もう地獄だよ。『なんだ、その反抗的な目つきは』といつては殴る。口答えすると殴る。コーチたちは体格がいいからね。まともに殴られるとホント、目から火花が出たよ。女の子は、コーチの手足のツメを切らされたり、マッサージさせられたり、下着を洗わせられたり……まるで奴隷だったよ。噂では、十七歳の美人の子が強姦されたっていうし（真意はわからない）。ヤバイ。ここでは反抗しては生きて

帰れないと思つて、ずーっと猫をかぶっていたんだ。そしたら、校長が『ほう、ずいぶん隠やかな表情になったな。だいぶ直つて来たぞ。帰っていい』つていつてくれたんだ。直るつて一体どういうことをいうのか、いまでもわからないよ。だって家へ帰ったら、親へのウラムツラミで一層荒れて、家出を何回も繰り返したからさ」

——ツッパリようになったのはなぜ？

「うん。学校の一年センパイの番長が好きになつたからね。カッコイイんだよ、彼。で、ギンギンに目立つて彼好みの女の子になろうとしたんだ。そしたらサ、彼は『自分はツッパつていても、自分の女は、かわいらしくやさしい女が好きだ』つていうんだ。じゃあ、『戸塚』で生まれ変わるうつて、入校のときチヨッピリ自分を賭けたところもあるんだ。でも卒業して出てきたら、彼は新しい恋人つくつてたよ。失恋しちゃったんだ、ワタシ」

ツッパリの衣を一枚脱げば、自分のセクシヤルアイデンティティ（性の自己受容）も不確かな女の子の素顔がある。『戸塚』の荒療治で直るハズもないY子の『病い』は、次代の女の子の間に蔓延しつつあるのだ。

視 点

〈教育の源流〉

長谷川 孝



教育とくにご子どもの」ということについて、考えたり書いたり話したりして、いつも気になっていたことがある。私が〈親の教育〉について述べているとき、読んでくれている人たちは〈学校の教育〉と同じ位相でとらえてはしまいか、ということだ。私が息子や娘たちとかかわりのなかで教育にふれているときは、もちろん〈親の教育〉であって、そのまま〈学校の教育〉に横スベリさせられない、と思っているので、気になるのだ。現実には、多くの教育をめぐる問題において、責任のなすり合いなどのように、同じ位相（つまり学校教育と家庭教育）でとらえられている。

〈親の教育〉と〈学校の教育〉は、その依って立つ原理が異なっている、と私は考えている。そのちがいをまだ明確にいいきることができるのだが（一方が直接性で、他方が間接性、という程度にしかいえない）、ひとつはつきりしてきたと思うことは、一般的にいわれる「家庭教育」とは学校化された〈親の教育〉の謂（学校教育の領分のなかに位置づけられた〈親の教育〉）であるということだ。だからいま私たちは、家庭教育あって〈親の教育〉なし、の状態にあるのではないだろうか。

内申書裁判をささえる会で、最高裁に出した上告理由書の検討会を開いたとき、改めて確認し合ったことがある。いろいろな意味で

「教育権」ということがよく使われるけど、じつは日本の法制度のなかには、親の教育権しかなく、国の教育権はもちろんのこと、教師の教育権などもない、という事実だ。民法第四編第四章（親権）第八二〇条に《親権を行う者は、子の監護及び教育をする権利を有し、義務を負う》と定めてある。

民法の親権には問題点もあると思うが、これ以外に「教育する権利」はない、ということだ。憲法の規定は「教育を受ける権利」と「教育を受ける権利を充足する責務」であって、「教育をする」「権利などの根拠にはなりえない。戦後の教育制度の根幹は、親の教育権以外のすべての教育権を否定するところから出発したのである。

親のほかには、どこにもだれにも、子ども（人）を教育する権利などないことを、改めて確認しておきたい。大体、人になにかを強制したり、やらせたりする権利など、一般的にはありえないのだ。ところが、教育権とか教育権限とか（具体的には評価権とか評価権限など）が、濫歩している。このことでは、おもしろい図式に気がついた。子どもの教育を受ける権利（学習権）を守る（保障する）ための論理として教師の教育権が立てられ、教師の自由とほぼ同義の理念として使われてきた。その「権」（理念）が学校現場で具体的に行使されているうちに、権利（国家にたいする個人の自由）から権

限（行政のもつ権能といってよい）に移行してしまったため、いつの間にか教師の教育権＝教師の教育の自由＝教師の教育権限、という奇妙な等式が成り立ってしまったのではないか、ということだ。

どうも、学校教育をめぐっては、こうした「逆立ち」した論理や現実が多すぎはしまいか。そして、ひるがえって自分自身と子どもとの関係をみてみると、私が〈親の教育〉を模索しながらもがいている（つまり、「逆立ち」をやめて、足を生活という大地にしっかりとつけた、親としての教育を手探りしつつ、まだちゃんと立てないでいる）、という感じがしてならない。子どものほうは、平気なカオで生活に足をつけてかけ回っているのに、親は「逆立ち」して追いかけている、ような気がするのだ。この状態のことを「家庭教育育」と呼んだらいいのではないか。

教育の源流（原点）は、親の子どもとの関係のなかにある。その関係は、生活のなかの労働、遊び、まつり、食べることで、子育てなどのさまざまな行為の不可分の一部として、もともと埋めこまれて（内蔵されて）いたものだ。高橋悠治&水牛楽団という楽しい楽団といっしょに講演に行ったとき、竹でつくった楽器で奏でるソロモン諸島の音楽の説明をした高橋さんが、「音楽という名もつけられていない、生活そのものの一部なんです」と語っていた。私は、教育というものもほんらい、「教育という名もついていない、生活のさまざまな行為そのものの一部だった」と思うから、「あつ、音楽もそうだったのか」と思わず気づかされたのだった。

そして、こうした「生活そのものとしての教育」をとおして、なにを子どもに〈おしえ〉ていたのだろう。つまり、こうした教育が子どもたちのなかに育てた〈学力〉とはいったい、どのようなもの

なのだろうか。現代の教育を組み替えていくためにも、こうした問いから出発することが必要なだろう。庄司和晃さん（大東文化大学）による「全面教育学」や「世渡りの教育」という提起も、こうしたテーマをもっているような気がするのだが、家庭教育から〈親の教育〉があらためて自立するためには、このあたりのことをしっかりと再建しなければならないのだと思う。

ここで、教育を考えていくためのひとつの手掛かりとして、私なりの〈学力〉の「定義もどき」を提案しておきたい。

〈学力〉とは、知識（環境世界の認識）と自己とのあいだの関係のとおり方にたいするイニシアティブのちからである。つまり知識とどういう距離（間）をとるかという感覚であって、知識の量ではかることのできない人間的能力である。

こうした〈学力〉は、学校教育にまかせておいて育つはずもない。人間の一生涯のなかで、生きて暮らすさまざまな行為をとおして獲得していくものだろう。だから、親も子も、ともに「自分そでて」の途路にあるものとして、同じ人生の「旅人」なのだ（念のためにいえば、ここでいう親とは、けっして産みの親であつたり、両親がそろっていなければならない、というものではない。教育が親から社会に広がっていきうるのは、このためなのではなからうか）。だが、親たち（私自身もふくめて）はいま、子どもたちとどれだけ、人生を共に歩き、共に生活しているだろうか。〈親の教育〉が心もとなくなっているのは、そのせいであると思えてならない。〈親の教育〉とは、人生の途路にある「自分」をさらすなかで可能になることだろうが、そのための「大地」がやせてしまっている――。

（教育評論家）

霞 通 信

武 田 秀 夫

四羽の小鳥が水をのむ



私にとって一週間でいちばん忙しいのは土曜日です。朝十時の「漱石を読む」からはじまって夜の七時半まで五単位の授業をします。忙しいながらそれぞれに楽しい授業の中で、とりわけ楽しみにしているのが、ルリちゃんとルミちゃん、ユカちゃんとユミちゃんの姉妹二組、四名のグループ。いずれも小学校五年生と三年生の姉妹です。

市内の同じ小学校に通う仲良しの四人は、バスと電車を乗り継いで土曜日の午後、教室に通ってきます。直線距離ではそれほど離れていないのですが、交通の不便な青梅では、自動車やバイクを運転できない年寄りや子どもはなかなかめんどろです。四人の女の子たちは、小さな手提げにお菓子や飴玉を入れ、ピクニック気分です。着くとすぐ、「先生、お水のませてエ」とルミちゃんと言います。「私もオ」「私もオ」と他の三人も声をそろえ、やがて四人がコップの水をゴクゴクゴクとおいしそうにのみます。四羽の小鳥がのどをそらして水を含んでいるようなその姿をながめながら、私はいつも、子どもというのはほん

とによく水をのむのだと感心いたします。のみおわると、「ドッヂボール、貸してエ」ということになり、自分たちの時間になるまで近くの公園で遊びます。時にはユミちゃんが「ハイ、おみやげ」と笑いながら、道々摘んできた野の花をくれます。もちろん私は「どうもありがとう」といいながらすぐに小さなガラスの器に水を満たしてその花を投げ入れ、教室のテーブルの上に置きます。と、小さな部屋に野の匂いがかすかに漂って……。

そちらへ通うのが大変なので、子どもたちを募って何人かそろえますから出向いていただけないでしょうかと、ルリちゃんのお母さんから話があったのが一年ほど前の春。が、そのころすでに私の教室も子どもの数が増えはじめて時間に余裕がなく、それではということで、学年が離れていて一緒にやれるかどうか不安はあるが、別々の日に姉妹がばらばらに通ってくるよりはということ、おもしろい組合せのクラスができたのでした。もちろん案ずるより産むが易しで、姉が妹の字を見てやったり、時には妹が「お姉ちゃん、ちゃんとしなくちゃだめだよ」とたしなめたりしながら、学年の離れた姉妹がごく自然に同じ作品を読み合っていました。

私の教室にはそのほかに、中2と中3、小6と小5の子どもたちが一緒にいるクラスがあり、一時は、小6一名、中1二名、中2一名で一クラスを構成したこともありましたが、どのクラスでも、学年の上の子が下の子に「ねエ、ねエ、この字なんて読むの」と教えてもらったり、百人一首をキヤアキヤア大騒ぎしながら取り合ったりしながら仲良くやってきました。教師をしていたときはそれが当然と気にもしないできた年齢別クラスというものも、考えてみれば奇妙

なものであると思います。

さらにまた、私のところでは、たとえば「幼年伝記ものがたり・みなもとよしつね」(今西祐行)を小2から中3までのみんなが読みます。「平家物語」のかなり原作に忠実な再話ものを時には原文の朗読もしながら読んできた学年の上の子どもたちに、活字が大きくほとんど平仮名で書かれているこの本をサブ・リーダーとして与えますと、「ウワァ、字が大きい、なつかしい!」と叫んだり、「わたし、こういうのを見てるとなんだかしあわせな気持ちになるのよね」とにこにこしたり、とにかく人気があるのです。小さい子が読むものをと馬鹿にされたように感じていやがるかなと思ったりもしたのですが、全くそんな気配はありません。むしろいまの子は、中学生になっても意外なほど、たとえば義経の事蹟について知らないでいますから、内容的にも興味をもって読みます。そしてさらに、なによりもこの私が、箕田源二郎の絵によってかざられたこの「みなもとよしつね」という本が大好きなのです。

巻頭の《鞍馬山の天狗に切りかかる牛若丸》《弓流し》《雪をふみわけ、奥州へと逃げのびてゆく義経主従》の絵をながめ、それから「はじめに」という文章を読むうちに、私の胸はもうどきどきしてきます。

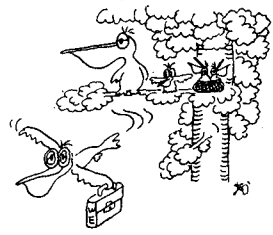
はじめに

みなもと・よしつねは、いまから、八百年ほどむかし、げんじとへいしが、はげしいくさを、くりかえしていたときにうまれました。じぶんも、げんじのために、いっしょうけんめいはたらき、たくさんてがらもたてました。

けれども、おしまいには、にいさんににくまれて、あわれなさいごを、とげなければなりませんでした。これは、いくさのなかにうまれ、いくさにしんでいった、かわいそうなよしつねの、いっしょうのものがたりです。

なんの変哲もないと思われるこの文章の、しかし清潔な美しさを私は愛します。それは幼い人たちの心を素直にゆすり、なんの留保も必要とせずそのまま大人の私たちの心に染み込んでくるように私には思われます。

しかし、ああ、私の教室で学年のちがいをこえて同じ本を読み自然に交わっているこの子どもたちも、学年バッジをつけ、制服を着て学校の内部に入っていくと、「中学生らしい服装を」「最上級生は最上級生らしく」という得体の知れない「――らしき」を押しつけられ、それに呪縛され、はては、「あの子、下級生のくせに生意気ね」「三年生がクラブから抜けたら、一年生をイビってやるんだ」などと貧しいことばを口走るようになってしまふ。あるいはまた、無垢な新入生を上級生による汚染から守らねばならぬと考える教師たちによって他学年の廊下の通行禁止を言いわたされ、一方で《タテ割り清掃班》などというものによって融和の対象とされ――、どうもいま学校でやっていることは、子どもたちをヨコに分断したが故に生じた問題を、根本には触れずにただ表面を彌縫(びほう)するための切ったり貼ったりと思われるしかありません。朝の光を浴びながら野の小鳥たちが、仲良しのどをそらして、一つの水たまりから水のをむ――、そんなふうにはいかないものでしょうか。



〈福生第七小学校六年〉

渡辺 直之

僕は、科学の最先たんをゆく、コンピューター・オートメーションハウスに住んでみたい。自動ドアで、暑ければ冷ほう、寒ければだんほうを、自動できに入れてくれる。そして、室は僕の家族4人分の室と、居間客間がほしい。

あと、何時になったらフロが自動できにわいて、コンピューターがわいたことをしらせてくれるというシステムもほしい。

贅沢を言えば、お手伝いロボットもほしいと思う。メニューで食べたいごはんをつくってくれる。

だけど、これだけの設備を造るには、ばく

* 学習の主人公たち *

こんな住まいならいいな

大なお金がかかるだろう。だけど、これだけの家に住んでみたい。

小野こずえ

私なら、木の家がいいな。自分で、作ったテーブル、いす、木のベッド、机も、全部、自分のインテリア。一人部屋も、ゆめ。友だちがあそびにきて、そーっと私の部屋をあけたとき、とっても、あかるい部屋、がいいな。ペンキで自分の好きな色で、かべや、テーブルをぬりたいな。にわは、あひるや、にわとりが、ちよこちよこあるいてて、犬が、そのあと、ついていて、とっても、明るいかぞくもいーと思う。おかあさんも、日本部屋。おとうさんは、歌がへたなのでカラオケの物を、かってあげて、もっと歌をじょうずに、なるように。みんなの前で、歌えるよう

に、したいですよ。おかあさんは、お料理がうまいので、台どころを、大きくしても、いいな、だけど、今の家は、そうゆうのは、すくないんだ。あまりみかけないな。とつても、広いにわで、広い部屋がいいですよ。それに、明るい、かぞくもいいです。

中田 信也

ぼくは、家が広くて庭もあって家の中に、からくりがある家がいいなと思う。

玄関から入って歩いて花びんを回すと、秘密のドアが開いたりおもしろい床をふむと地下への通り道があつて一けんふつうの家と思うがじつはからくりがあるとゆうのがよい所だ。

ぼくは、そうゆうアイデアがある家がいいなと思う。

山元 満里

私のうちは団地なのでせまいです。だから、大きい家に住みたい。自分の部屋を持ちたい。ある高木さんの家は白くて8つぐらい部屋もあつて、庭も広い。私はそういう家だつたらいいなと思う。ただ広いじゃなくて、きれいな家がいい。同じようなつくりの家がとなりという家は絶対イヤ。私は、8LDKの家があつたらいいと思う。洋室と和室と同

じくくらいあったら良いだろう。お客さんが来ても安心。母達は和室が好きで私と妹は洋室が好きです。だから同じくらいあればいいのです。そういう家じゃなかったら4LDKでも良いと思う。あまり広すぎるとなるとなくこわいし、行ったりするのがめんどくさくなる時がある。その点4LDKは呼ばれたらすぐ行けるのだ。でも、お客さんが来るんならやはり8LDKもいいな。その中間6LDKも良いでしょう。私は自分の部屋があれば広くてもせまくてもいい。ただ、団地・マンションはヤダ。ふつうの家がいい。一番いい家は6LDK。広くてきれいなうちだったらいなと思う。

丸山 剛

僕は今のままでいいと思う。けれど、できれば、対原水爆用避難シェルターみたいなのがあればいいと思う。その訳は、近々、第三次世界大戦が起きるかもしれないので、その時、原水爆とかが落とされるかもしれないのでそういうのがほしい。それは、常時は地下室というふうに使えからという事もある。けれど僕の家は団地なのでそういうのは作れないので、公共物として団地の地下にでも作ってほしい。

それと部屋があと一つほしい。たくさんあると、留守番の時、いやなので一つでいい。増えたら、もう少し部屋が広く使えるかもしれないし、本箱とか、買って置く所になるのでほしい。

僕はこの二つの内の両方かどちらかがかなえばいいと思うけどどちらもありだと思う。けどそれでもいいと思う。それは前に書いた通りこのままでいいのだから。

古賀真理江

こんな住まいなら。私だったら木の家がいい。机も、ドアも、たんすも、全部木なの。2階だてはもちろんのこと、2階のベランダは、私が10歩くらい歩ける。正方形なんだろうかしら。それから、屋根にもベランダがあるの。小さな木のテーブルといすがあるの。それから木の台もあって。そこに、今かっている、セキセイインコの美代子と亜衣を置くの。

部屋は、2階に3つ。1つは私の部屋。屋根の上のベランダと、2階のベランダの近くがいいな。1つはお姉ちゃん、もう1つは便所。

そして1階は、6コぐらい。お母さん達の部屋、台所、風呂、便所、テレビを見る部

屋。最後の1つ。それは、生の木があるの。池もあるといい。

庭には、ニワトリ、犬、牛がいて、畑があるの。そして、大きな登りやすい木。丘もあって、川もあって、魚がうようよ。

と、こんな家。住む場所、日本ならどこでも、自然破かいのない所。

これが私のゆめ。

今の住まいは、福生団地の7階。2DKです。私の机はおかてに。なぜならお姉ちゃんがじゅけんだから。この家でもいい。いいけど、犬が、かえないから面白くない。

でも 本当 あんな住まいならいいんだな？。

山崎 光毅

今の家は、100万という安さで買ったボロい一軒家です。部屋は、最初は五部屋。でも今では、八部屋の二階建てで、自分の部屋は、ありません。でも汗水たらして建ててくれた家なのでしかたなくがまんして、住んでいます。

だから、一度でも大きな家で自分の部屋で遊んだり勉強したりしたいと 思います

そして、庭は、広く、芝が植えてあり、大きな池がありいつでも、鯉やフナが居て、い

つでも釣りが出来るようになっていて、ゴルフ場のある別荘を持っている家に住んでみた
いと、思っています。

この文章は、悪夢でも夢で、実現しない夢
なのです。

高山 留美

私だったらこんな住まいがいいな。それは
家でいっぱい動物をかう、そして牧場を開く
の、馬をいっぱいかって北海道の動物王国、
ムツゴロウ先生みたいにクマ・キツネ・さる
・鳥・ネコ・イヌ・タヌキ、いろいろな動物
のせわをしたいて、お母さんに話したら、
「そうね いいことだけど、今の日本には、
そんな広い場所ないでしょ そんなことで
ないわよ」とちよっぴりさんねん。でも私は
負けずにがんばる。それはちよっと大変なこ
ともあるけど、たとえば動物のお産とか、動
物の病気など、あと牧草をつんだり、でも本
当にそんな家だったらいいな。土地がないか
ら。私ならそんな家だったらいいな。

高橋 俊行

僕が家が、ほしいとゆうと、めちやくちや
ぜいたくに、なると思う。

今、僕の住んでいる家は、団地です。

やはり僕は、団地より、ふつうの家の方が

いいと思います。だって、団地とゆうのは、
部屋は、2〜3こしかない。しかし、ふつう
の家だったら、2階建だし、自分の部屋に友
達をつれて、遊べる。家とゆうなら、やつぱ
り、2階より、3〜4階ぐらいあれば、口で
は言えないほど、うれしいと、思います。

建物については、やつぱり、広々としてい
た方が、いいです。芝生で出来ていて、ゴル
フ場、野球場なんて、あったら、最高にうれ
しいと思います。家の色は白、屋根は青、僕
のスキな色です。洋間には、テレビ、ソファ
ー、人形、テーブル。べらんだは、広々とし
て、ひるねができるぐらいの2倍の大きさ。
カーテンの色は、がらのついている白、まさ
に明るい部屋、僕の部屋は、2階の、左側、
太陽がよくあたるように、自分の部屋は、ス
テレオ、テレビ、ベッド、あとは勉強道具、
3階は、遊び場、あばれても、近所めえわく
にかからないよう、かべは、ぶあつく、さわ
いでも、さわいでも、うるさくないように、
どうです。やつぱり、考えるのは、だれと
も、おんなじだと思えます。やつぱり、団地
より、3〜4階建の、家の方がいいと思いま
す。

大城里江子

聞くところによると、ほとんどの人は、
「家は小さくても、庭が広ければ良い」
と言う。

けど私の理想としては、家も大きくて、庭
も広い方がいい。

でも、そんな大金持ちじゃなくて、動物
がたくさんいて、おむこさんは、働き者で、
動物好きで……。

それだけでたくさんです。

大きな家は、中で小動物を飼っていて、広
い庭では、大きな動物が飼える。

例えば私が編み物をしていると、猫が足に
よりそって来て、その後を、たくさん動物
がついて来て、そこで、おむこさんが
「ただいま。」

いいな、こんな住まいならいいな。

森田 達也

ぼくの家は根が暗い。だから、ぼくは、話
をかける。でもみんな話をあまり少ししかし
ない。でもぼくがあまりしゃべりたくない
きに、みんながしゃべる。だから、いつも話
していたい。なんでこう思うのか、それは家
が団地でせまいからだ。

団地はベランダしかない、犬はかえない、

もしちゃんとした家にすんでいれば犬などの

さんぽとができるからいい。わざわざ話をかけなくても、いろいろ仕事があるから、ぼくは、団地はよくない。

うちは暗い。もつともつと、みんなと、ひまのときは話しあいたい。もうこんな暗い家はやだ。明るい家がいい。

話しあう家がいい。そのためには、一人一人が。明るく明るくなくては、ぼくの理想する家はまだ遠いと思う。一日も早く明るい家になるといい。

夜久 弘美

まず、自然にかこまれた、にわのひろいおうちがいいな。

しばふをしきつめた ひろいにわにはいつも、犬が、はしりまわっていて。

そのにわをとおりにわほどに大きくない家のドアをあけると、ろうかとかいだんが目の前にあるんだ。それで、

「ただいま」

ってさけぶとすぐに、ろうかの向こうのひとへやから

「おかえり」

ってお母さんのやさしい声がひびいてくるの。そして、かいだんをかけあがって、自分

だけのへやへいくんだ。

夜になると、お父さんがかえってきて、家ぞく全員で、ごはんをたべにいく。

それで、たべおわってから、しばらくみんないっしょにいて、あそんだりはなしをしたりするの。しばらくすると、お母さんが、「もうねなさい」ていうの、そしたら、みんな各へやへかえっていく。

こんなおうちがいいな。
でもちよつとむりかな。
でも、本当にこんなおうちだったらな。

栗村 稔

只今のぼくの家は、とっても小型で二部屋しかありません。

ぼくの理想の住まいは、風呂は温泉並で広く、部屋は、とにかく広くて、五十人位いられるスペースのあるくらいで中にお菓子屋なんかある位がいい。

家の中にゲームセンターがあつて、ゲームなど、パソコン・ビデオなんかがあつて、エスカレーターがないぞうされていて、宿題ロボットなんて、夢のある物もほしい。

庭は、並たいていの物でいいが、ただ犬を一びき庭でさんぽできる位の庭がいい。ぼくの理想は、このくらいです。

山形香緒里

「わーめずらしい」

って言われるような家がいいな。昔ふうの家がいい。中也昔ふう。そしたら、遊びに来た人も、「わーすごい」とか言うもんな。

私の今住んでいる家は団地です。ちつとも変わった事もない。遊びにこられても何にも言われない。

昔の家は、今にとつてはとてもめずらしい。道具も不便なところもあるが、今とはちがつて勉強にもなるのではないか。でも全部昔だと困る事もある。例えばテレビ、昔はなかった。今はある。テレビがないとやっぱりやだな。だけど、昔はなかった。みんながまんしてるといっても、なかったからしかたない。昔の洗たく機手あらいだけど、何もかもたいへんでも、一度住んでみたい。何でも昔のように出来たら、道具もあり、みんなそろつてたら友達が、

「どうやるの」って聞かれ、「こうするんだよ」とやって見せ、「すごい」なんて言われたら、うれしい。せまくてもいいから、ちゃんとした昔ふうだったらい。昔の家に住んで、昔の道具使って料理して、ねて、昔の家へ住んでみたい。

〈竹鼻中学校一年〉

T・T男

ぼくの家は、はつきりいつてぼろっこい。

おじいちゃんのお寺にある方の家は、それほど古くないけど、今住んでいる家は、ぼろい。まず、家のまわりについては、へいがじやま、庭をもっと広く、きれいに、プールや、動物をはなしがいにしたい。家そのものについては、ドアを自動にして、めしつかいをつけて、ゲームコーナーを家の中に入れる。部屋の中は、エアコン（今はクーラーしかない）。テレビをもっと大きく（今は21型）、でんきを、シャンドリアにして、とけいはもっと大きい。ステレオを置いて、レコードをいっぱいおく。ソファアベッドを置いて、自分の部屋に電話を一つ、ポスターを天井にはり、プラモデルだけの部屋もつくる、そして、地下室を二階までつくる。なぜほしいかというとしずかになれる場所がほしいから。たとえば、考えごとをするときやべんきょうをする時などに使う。地下室にもステレオをおきたい。台所のれいぞう庫は今の二倍ぐらいで、たくさんのみ物をいれておく。庭には、SLもはしらせて、池に、コイをたくさん

んおよがせる。でも、一番ほしいのは、お兄さん。

K・H女

私の所は、勉強部屋が、三人ともいっしょ

なので、一人ずつの部屋がほしい。今の部屋はひろいけど、かたづけるのに、三人いても、だれが、どこをかたづけるか、けんかする。だから、一人ずつ、せまくていいので部屋がほしい。

二かいのベランダをもっとひろくして、かっこよくしたい。

庭をもっとひろくしてほしい。そしてテールとかをおきたい。テントをはって遊べるようにしたい。

となりの家とのすきまが50cmぐらいしかないので、もっとはなれてほしい。

ピアノをひいていると、となりの人が、うるさいというのでもっとかべをあつくしてほしい。

もっとげんかんをひろくしてほしい。自分だけの電話がほしい。

B・A男

スリッパをはかなくてもいいように、ローカにも全部じゅうたんをひいてほしい。

階段だの、のぼりおりがいやなので、エス

カレーターにしてほしい。二階で音楽を聞いても下にきこえないように、そう音そうちをつくってもらいたい。もっと部屋を広くしてほしい。とくに地下の家がいい。前の土地にパッティング用の場所をもうけてほしい。電話が二階にもほしい。場所がちよっと静かすぎるので、もうちよっとあかるくうるさくしてほしい。それから机のまわりが汚れていて、すぐに掃じがしてあるというかんきょうがいいと思っています。庭をしげにしてみはらしの良い風景にしてほしいです。

Y・N女

私は今自分のへやがせまいのでもっと広くしてほしい。自分のテレビはあるけれど、あと、自分のカセットがほしい。

それと家に、いろいろなどうぶつがかってみたい。どうぶつを、かうためには、もっと大きい家で大きいにわがないといけな。

そして大きなにわに動物ようの家をつくって、その中にいろいろなどうぶつのへやをつくって、ごはんは、じどうてきに、じかんになるとでてきたらいいと思う。

ほかに、少しおもしろいことを考えてみると家がひこうきや、車になって家がそのままうごく。それまたのしい。それとか、かいだ

んがエスカレーターだったり、食事がボタンをおすとでてくるとか、いろいろあったらたのしいだろうと思う。

W・K男

ぼくの家は、古いので、たてかえてほしいと、ぼくは、思っています。それに、自分のへやもほしいです。

今は、古い家ですが、ぼくとしては、かんしんをもっています。家はでかいし、あまりひろいとはいえませんが、庭もあります。

それは、べつにいいのですが……。自分のへやがないことです。

それに、もう一つ、庭がでかく、広い庭がほしいです。

それと、庭に、自転車をおくしやこが、あるといいなあとと思う。今では、げんかんの中に、じゅくがない日は、自転車をいれていきます。

いちいち、自転車を、入れるのが、めんどくさいから……。ぼくとしては、以上です。

K・Y女

自分のへやで勉強しているとすつごいぼつこ家なので、かべの間からスースーと風がはいってくる。夏にはいいけど冬はへやでやるとたまらない。けつちよくはTVのおいてあ

るへやにあって、こたつの中でやる。TVがおいなるもんで、勉強をほったらかしてTVにむちゅうになって、とうとう勉強ができなくなつて、8時〜10時ごろまでかかってしまう。

たまにへやでやっていれば、小さい弟がきて、私にへばりつく。おこつたら、わーんと鳴く。鳴けば当せんお父さんにおこられる。それに、だいて机の上のせてやると、勉強道具などをなげだす。もうめちやくちゃ頭にくる。（ここから現実にならないこと）にわに、プールがほしい。あつい時によい。

ひろーい家、その中に学校見たいになつていて、図書室と音楽室とかいろいろへやがくぎつてあって、ひろーいへやがほしい。庭は表とうらがちがつていて、ジャングル風の自然のままの方がいい。その中にライオンなどの動物がいつぱいいる方がいい。家用のヘリコプターがあつたらいい。スケート場がほしい。むじゅう力なへやがほしい。

T・M男

ぼくの家は古いし、ガタガタなので、早くとなり新しい家を建ててほしい。

それに、おかしが少なくて、一日ダンボール一ぱい分のおかしがほしいし、新幹線が

あるのはいいけど、リニアモーターカーにして、そして、駅をすぐ近くにつくってほしい。高速道路をなくして、その土地で野球場をつくってほしい。それでその野球場は、ぼくだけだでとくとうせきをつくってほしい。そして家に犬をかけてほしい。種類はできるならチャウチャウ犬がいい。

それに、家庭教師を一人つけてほしい。

それに、ネットをはってバツティングのウォーミングアップのできるところを作つてほしい。

それに、ぼくのサンヨーのラジカセよりソニーのオーディオがほしい。それだけ。

H・T女

私は、自分の部屋を大きくしてほしいし、かつてにはいらないようにしてほしいし、がんにように区切つてほしい。ふみきりの音とか、車の音とか雨の音で、周りがうるさいので、静かにできるようにしてほしい。家の中で暴れてもいいようにして、ほしい。もうちょっと、変わった家を建ててほしい。周りの家とちがつた家がいいし、のんびり、自由にできる広い部屋をつくってほしい。それから、庭を大きくして、夏には、プール、というふうに、庭にキャンプができたというふ

うに、公園見たいにのんびりできる所をつくってほしい。

ぼくの家は、大工です。

A・Y男

それで、おじいさんが、死ぬまでに、鉄きんで、三段だての、家を作ると言っているの
で、早く家をつくってほしい。

地面が、200つぼあるんだけど、もっと地面
をかって、庭のある家を、つくってほしい。

それから、いままで、あまり高い物を、ほ
とんど買ってくれなかったの、高い物を、
何でもいから、かってほしい。

それから、犬をかってほしい。例えば、コ
リイとかをかってほしい。なるべく、二ひき
はほしい。

それから、いつも、夕食が早い。早くて五
時ごろに夕食をするので、早いから、あまり
はらがへつていないのに、早くたべなさいと
いうから食べると、一〇時ぐらいになるとは
らがへつてしまつて、夜食を、食べていて、
どぐせのわるいやつやなあとと言われるので、
もっと、夕食を、おそくしてほしい。

W・R女

やつぱり、自分の部屋は、10じようぐらい
ほしいです。それや、かいだんは、エスカレ

ーターになつていたり、もっともつとにわが
ほしいです。そこに、プールやスケートがあ
つたり、体育館もあつて、たつきゅうだい
や、バレーボールのネットがはつてあつたり
して、それや、自分の部屋は、もつとあかる
くして、エレベーターで、ごはんがじどう
に、上へ、あがつてくるような、ほうがい
い。でも、おほかの近くの家は、ぜったい、
いやです。

それや、自分の部屋に、でんわをつけたり
して、このような、すまいが、いいです。

それとか、パソコンもほしいし、ふくもほ
しいし、いろいろなせつびがついていて、一
つのボタンをおすと、カーテンがしまるとか
もう一つのボタンは、勉強ロボットがいて、
宿題をやってくれるロボットがほしいです。
こんなのほんとーに、いいな――。

T・K男

望みというものは、実現させるためにあ
る。僕が大人になつて、家を建てるならば、
こんなふうにしたい。ドア自動式、玄関はシ
ヤンデリア、テレビ三台、ラジカセ七台、ス
テレオ二台に部屋一〇こ。ちよつとオーバー
なんです、これだけあると、便利じゃない
かなあと思います。階段はエスカレーターで

電気も部屋に入れば全自動でつくなんていう
のいいと思います。

僕は、自分の部屋が四じよう半しかありま
せん。せめて八じようぐらいはほしいなあと
思います。そうすれば、冷蔵庫などの製品ほ
とんどを部屋におかずに、一つぐらい広い部
屋がつくれるだろう。そこで、楽しいものを
行なつて遊べばよい。

とにかく、希望どおりにいけば、この世の
中楽しくてしょうがないが、だれかががまん
しているから、楽しいということを忘れない
ようにしよう。

Y・M女

工場をたてこわして、七、八階のりっぱな
工場にして、工場のすぐそばに、大きな庭を
作る。庭には、しばふと花だんを作る。そし
て、その横にとても大きな家を建てる。家は
五、六階だてにする。台所は、コックさんが
いて、レストランみたいにする。ピアノをひ
くへやと琴をひくへやと勉強するへやなどを
特別につくる。室内プールと室内テニスコー
トを作る。メイドがいて、いつもきれいに掃
除する。

父は、今のままでいい。母は、古くさい考
えをなおしてほしい。

〈生徒の声を読んで〉

（竹鼻中学校） 桜井昭子

住居の役割とか歴史、住居の条件、環境などは、誰でも手早く認識することが可能でし、学習にも組み入れます。しかし、その住居の中で何をしたいのか、何をこそ大切に営みたいのか、とつきつめたいと願います。

住居Ⅱ建物というところ方だけでなく、

住居Ⅲ住み方Ⅱ人間の生活にとらえることも大切だと思います。

そこで、私の担任するクラスの生徒に「こんな住まいならいいなあ」には、建物だけでなく、人間の生き方も考えてと言って書かせました。集めてみますと、本人の家庭環境などを知っているだけに、胸がきゅっと痛む文が幾つもあります。物に対する欲望の強い生徒が、実はどんな生活を背負わされているかを思いました。未知の子どもの言葉なら、そのまま素通りしていたかもしれないのに。これは、今度の体験で知ったびっくりするような発見でした。

先人は、不自由や不便さを乗り切り、生きるために主体的に動き、その結果として道具を作り、生活様式を生み出しました。それに

比べて、私たちはあまりに目先の物的要求に終始しているのではないでしょうか。心の貧しさと生き抜く姿勢の乏しさを感じます。

すれ違う生活をしている家族が、その穴埋めにおみやげをさし出したり、おこずかいをアップして愛情を示すのではなく、すれ違いだからこそ、意図的に価値ある生活を形づくらなければならぬと思います。

たとえば、新年には、せめて家族一同がそろってまるく座り、新年を迎えた気持ちを述べ、自分の願いを出し、励まし合う。

たとえば、家族そろって、おにぎりを持つて野山に草花を愛でに行く。自分にとってきれいな草花を摘む。家にもどってから、全部の花を集め、それぞれに花びんにいけてながめ合い、話し合う。

こんな生活を回復することができたら、と思うのです。今は、なけなしのお金を出して、夢に

原稿募集

① 研究論文・実践報告（図表を含めて五千字まで）

② 発言

▼ 学習の主人公たち——小・中・高生徒の率直な声を

▼ 市民として（二千八百字まで）

▼ 親もいたい（千三百字または二千八百字まで）

▼ 教師のつぶやき（千三百字まで）

③ Weに、なんでも言おう、なんでも聞こう（本誌の内容・体裁などについての建設的な意見）

④ わたくしからあなたに（読者・執筆者・編集者の交換室）③④は、はがきでお気軽に

まで見た家を見て、朝食はトーストとコーヒー、お休みはドライブ、子どもには有名高校——と、どの家もカッコよさだけを前面に出しています。子どもは、大人は虚構を見てしまいがち、興ざめているのではないのでしょうか。

住むことを人権として考える

神崎 房子

現代の日本人は、いったい本気で良好な環境の住宅を望んでいるのだろうか。良好な住宅などとても無理と初めから決めてかかって諦めてしまい、どんなものでもありさえすればよいと考えているのだろうか。

信じられないほどの高額な価格の住宅が次々と売られている事実を見ると、住宅はありさえすればよいというわけでもなさそう、国民の本音はこのいずれにもあるのではなからうか。選挙のとき、いっこうに住宅が政治の争点にならぬところを見ると、政治家自身はもちろんのこと、国民もまた「住宅は人間の権利なのだ」という意識が低く、本気で良好な住宅を得たいという気持ちを持つほど権利意識が成熟してないのではないだろうか。この国民の権利意識の未熟さを逆利用して、政府は本腰で国民のための住宅政策を打ち出そうとしない。

人が生きていく上で不可欠な衣食住のうち、衣と食は取得するのに比較的少額で入手できるが、住宅だけは極端に高額で、その上当人の生き方にまで制限を加え、誰でもどこでも入手できるというわけにいかない、天変地異や戦争や経済変動など、個人の努力の限界外で発生する社会変化による住宅の損失がある時、現在のような持ち家指向オンリーでは国民の住宅要求には応えられない。かりにそれができたとして

も、「古い」の期間が長くなっている現代では、住宅の補修や管理などに対し、はたして個人の力だけで対応できるかどうかあやしい。いわんや「老人の独居」となると問題は更に大きくなる。

政府は三世代同居を美化することによって住宅政策の責任を回避しようとしているが、労使関係の極端な不均衡による一方的転勤命令がまかり通っている今日、両世帯主の離死別はローンの支払いに支障をきたし、これもまた安心できる策とはいえない。

私は持ち家そのものを否定しようというものではないが、現在の持ち家はニセの持ち家だと思ふ。ミニ開発、不良材質、手抜き工事、公害、高価格、狭すぎなど、悪条件ばかり勢ぞろいしている現在の持ち家は、本来の持ち家からは程遠い。広大な敷地、静寂な環境、特別な材料や個性のある間取りや設備など、借家では望めぬ条件を備えた住宅なら持ち家と呼べるが、現在一般に販売されている住宅は持ち家というには悲しすぎる。こうした持ち家のみがかくも増えた最も大きい理由の一つは、政府の公的借家建設の絶対的不足にある。

(住主)
英国や西独では、全住宅の中に占める公的住宅の比率は三二%、四二%といわれているのに、日本は公団賃貸住宅を加えても八%に満たない。公営住宅の入居資格には「同居の親族があること」を条件にしているため、住宅金融公庫をはじめ、給与住宅の入居に至るまでひとり暮らし者は排除されている。近年、同法の一部に改正が

表1 単身世帯増の比率

世帯数 年	総 数		単身世帯を含め 普通世帯数		単身世帯数	
		%		%		%
昭和 30	17,383	100	16,782	96.54	601	3.46
" 35	19,678	100	18,655	94.80	1,023	5.20
" 40	23,085	100	21,222	91.93	1,863	8.10
" 45	26,856	100	23,968	89.25	2,888	10.75
" 50	31,271	100	27,035	86.45	4,236	13.55
" 55	34,083	100	28,700	84.21	5,383	15.79

1. 国勢調査による

2. 単位は千世帯

あったが、そこには人権の尊重を基本にすえた姿勢がないため、現在もひとり暮らし者に対する差別は消えていない。高齢化による老人独居、単身赴任、離婚、独身指向など、かつてなかった社会変化による意識の変革により、一九八〇年のひとり暮らし者は、一九五五年の十倍近くに増えている（表1）。ひとりで生きる生き方は人間扱いをされず、住宅は政府にとって管理しやすい婚姻者にしか供給しないため、現

在もひとり暮らし者は一般の住宅困窮者以上に難渋している。

政府が行う各種の住宅調査のうち、一人当たりはあっても一人の基準がいまだに見当たらないのはこうした差別のあらわれである。ひとり暮らしだから湯舟の湯量は四人家族の四分の一、腰湯の量でよいというわけにはいかない。一人だろうが五人だろうが、人間に対する尊厳の姿勢があれば、人数や年齢や性によってほんの少ししかない老朽住宅を提供して「差別をしていない」などとは言えないはずだ。

極端な持ち家偏向のため、住宅政策のひどいひずみによく気がつき、最近になって良質な借家が消費者にも建築関係者にも見直され出した。消費者には持ち家の持つ維持管理の負担増が（集合住宅では更にそのむずかしさが加わる）、企業には土地の高騰による不況が重くのしかかり、持ち家指向を考え直すにはおれない状況になってきた。特に企業の行う労働者への一方的転勤の氾濫により、いつでもどこでもそれぞれの好みや生活にあった住まいを求めたいと願うのは当然なのに、その都度、高額な住宅を購入するのは低賃金労働者にとって人生を歪めるほどの大きな負担となっている。家賃があまりに高すぎるため、同じ金を支払うなら、いっそ自己資産にした方が有利という考え方が一時はやった。しかしそれは購入時だけの経済的負担であって、借家になった一般庶民には家の維持管理が手にある重荷であり、自分が住む住宅以外の住宅なら資産を産むが、現在自分が居住している住宅は消費はあっても資産は産まず、売れば金になるといつても次に入居する住まいを確保しなければならぬことを考えれば、住宅購入は決して資産にならぬことに気付いていない見方である。

持ち家にしろ借家にしろ、家というものは本来金のかかるしるものだ。だからといって、宝石のように金のないものは不用というわけにはいかない。

欧州では差別を産まず世代を越えて誰にでも良質な住宅を提供しているばかりか、収入における家賃額の大きい人には一定の割合で家賃補助までしている。そこでは二百年ぐらい保つ家でない住宅とは呼ばず、良質な住宅を建設するために、民間家主にも国家補助をしてその質を高めている。一見、個人の資産に国庫補助をしているように見えるが、それ

は住宅の質は人間の質に直結しているからである。国民を良好な環境で育てることを願う彼らと、劣悪な住宅に慣れ、その不良性に気付く力を養っていない日本人との間には大きな差がある。限られた人生をより楽しく生きるために、自分の住まいのみならず、他人の住居にも心を配れるようになるためにはもう少し時間が必要だとしても、せめて選挙で為政者に怠惰のイメージぐらい与えるだけの力を養いたいものだと切に願っている。

(ひとり歩きの会) 会員)

注1 『すまいと人権』日本住宅会議、ドメス出版

団地に住んで思う

松本 法子

団地に住んで二年余り、地域としての団地生活というものが少しわかりかけてきたかなという感じのこのごろ。

生まれてから三十二の年まで、私は地べたに直接建っている家に住んできたから、「団地の人は」とか「団地の子は」という特別な言い方を差別する側から聞きもし、使つてもきた。そして今、団地に棲む人の口から被害者のような卑屈な意味合いでの「団地」という言葉をも聞くことがある。

以前暮らしていた家は、結婚のために、家出から出もどつた形で棲みついた親(私の)の家の離れで、庭も広く、登るのに恰好の木があつて、私はにわか植木職人になったり、にんじんやレタスを作つてみたり、息子と一緒に泥んこになつて遊び暮らしていた。

息子が幼稚園に入ると、子どもたちの集まる家になった。見ているとおもしろそうなので、私はその頃やつていた翻訳の仕事そつちのけで「仲間」に入つて遊んだ。おかげで、子どもたちは、私が買物をする時にもゾロゾロついてくるようになった。

でも、やはり私は「仲間」にはなりきれなかった。ひところ、皆で段ボール遊びに熱中して、次々と作品を作つていった。足りなくなると近くの店ににぎやかに繰り出した。出来上がったものは、たまに思い出して後日使うこともあつて、とつておいたのだが、それが六畳の部屋を埋めつくすようになった。私は仕事のメ切が近づいたことと、自分の机までたどりつけるようにという理由を作つて、段ボールを軒下に片付けた。次の日、堀から顔を出したK君、「捨てちゃつたの?」「違ふのよ。置く場所がなくなつちやつてね」。

K君は「フーン」と言って、その日はそのまま塀を乗り越えてこなかった。一番感受性の強かったK君。相談もなく捨てられたことに對して、おとなのやり方が納得出来なかったに違いない。あまり遊びに来なくなった。K君は息子とは相変わらず遊んではいたが、私の方は言い訳のできない負い目を感じるようになった。取り返すこともできただろうに、ひとりでイジイジして……。

K君、ごめんね。

そんな苦い想いも織り込んで過ごしたその家は、古い木造で、冬の朝など隙間風のため外の気温と同じ位まで下がり、身の縮む思いもしたが、家そのものに何とも言えない風情があった。遊びに来る友達も「ひと昔前にもどったみたい」と言うように、もらいもの、拾いもので出来上がった純和風庶民の生活が私たちは気に入っていた。

それでも、私たちには「飯のすまい」という意識が頭のすみにあった。普通に借りれば〇〇万円もする、私たちにはそれだけの金額はどうてい出せないということが頭から離れなかったのだ。結局、広さと値段で分相応の団地の空屋に入ることになったのだが、団地に對して偏見をもたない夫は、永井荷風の歩いた下町に住めると上機嫌。息子は息子で憧れの高層ビルに大はしゃぎ。ところが、意識の底に偏見を持っていた私は「分相応」になったことで、少しノイローゼ気味になった。表面的にはそんな偏見微ジンも出さず、「塀に囲まれて、ここまですごいモン！という住宅街より、この方がずっと平等で良いよ」とか、「住む人が家を変えるんだ

よ。どこに住んだっておんなじだよ」なんてこと言って、「アンタが一番心配だよ」と案じていた夫を喜ばせさへした。

一年、いや一年半位、そんな状態を続けるうちに、'82年の秋「We」を知って、私自身が何の働きかけもしてこなかったことを思いしらされた。仲間を作ろうともしないで、この地域に仲間のいないことだけをボヤいていた。

取りあえず、の思いで共同購入のグループに入れてもらった。私の言葉の通じる人がちゃんといえることを発見した。本音を言える人間は夫と息子、それに学生時代の仲間だけ、というのは私の決めつけにすぎなかった。

こちらが興味をもてばあちらも興味をもってくれる。あちらが興味をもってくればこちらも興味をもつ。興味をもてば首をつっこむ。というわけで人間関係も広がったが、身のまわりの出来事にも興味が広がっていった。

その一つがPTA。興味をもったものだから、この地域の新参者としてはスナナリ会計という役を引き受けてしまった。

このパケモノみたいな組織、何といっても完全なビラミッド型で、Pというのには役員12名、Tは校長、教頭。役員会はこのPとTでの話し合い。ここでは例年行事に必要な役割分担を主に話し合う。行事をやるかどうかという問題は常に抜けている。「そんなのやめちゃえは」と言ったら、「世間はそういったもんじゃない、すっぱり切れない部分がある」と姑・小姑の言葉。この世界でも嫁は生きにくい。それでも、会計を担当したお陰で、PTA全体を見ることができた。その費用項目を見ると、会則にある立派な目的とは完全にズレている。「会計さんは出すお金についていちいち文

市民として

句を言わなくていいの。請求する金額を出してくれば」という姑にはどんな力があるというのだろう。PTAって何だろう。何で皆我慢しちゃうのだろう。役員会で、現場の先生の意見を聞きたいと言ったことがあったが、「今の先生は時間外のことはやってくれなくて」という教頭。協力しなくてはならない親と教師を、間に入った管理職がしっかり引離しをする。これじゃあ本当の情報は入らない。

ワイーヤダ!

と思っていた所、自治会の役員をやっている友人が同じだと

言う。「私たちの間では常識とされていることが通らないで『世間知らず』になっちゃうんだよ。おとなの世界ってやだねえ」。

二人で暗い喫茶店の片隅で三時間、何か確実なもの、勉強会でも良いから団地の中で分散している力を集めようよ。という所まで話を進めたが、その先がまだ浮かばない。

でも、地域で動くこと、生活圏で何か始めて、それが大勢をじわじわと巻き込むことができれば、変えられる。目に見えない大きなもの……をと、私は今ドキドキしている。

K君、オバチャンがんばるからね!

ひと

「ねえ、きいて」の

宮 淑子さん

どうしてA君やBさんが宮さんには本音で語るの? 「いいですよ」と言ってくれたら原稿はもう出来たと同じですよ。だけどそこまでいくのが大変。約束は守らない。親が間に入ることもある。でも彼らの側にも、多くの他人に言いたいという気もあるわけ。中学生なんか言葉がない時代だけではないこととは持つてるのね。くそ! っていう。

それに私には「親性」が少ないんだろうね。普通の大人より子供の側にいるんだろうね」。

ほんとうのフリーになったのは83年の八月。「中学、高校から書いていて、高校時代、女の人生はどうしてこんなに窮屈なんだろう、女性議員になりたいとボーイフレンドに手紙書いたわ、でもすぐそれはスチュワードに訂正されるんだけど。二十代は主婦業。離婚して三十歳で始めて記者になって、すぐうれしかったの。その後『教育の森』に六年半、その間編集長が四代、初めての編集長が私には恩師みたいな人。テレビレポーターもやって、道行く人に、ねえ、ねえって声をかけたのも役に立っている」。今は教育の問題、女性の問題、性の問題を中心に講演、取材、執筆生活。「気分の変化が上手い、適応力がある、と思っている。アメリカに住む前

は英文科出身だけど会話はダメだったの。テレビで昼メロ見てるうちにブロークンだけどころなりね」。

「人間って生きているその時に、最高だと思ってる生きているでしょ」「ええっ、そんなことできるの?」「そうしてないの?」なんたる違い。

「だって限りある人生でしょ。妥協で自分を納得させるだけのために本音をどこかに置いて生きるというのはつまらないと思う」。

生き方に濃度差があるんですね。"よりよい"程度で満足していた私も"最高"を求める派になろう。また一人、目指す人に出会ってしまった!

(中野敬子)

We '84年春の公開セミナー

「管理教育を超えるには……」

'83年のWeは、春に公開セミナー「学校をよみがえらせよう—家庭科の窓から—」を、夏にフォーラム「学校はよみがえり得るか」を開催しました。熱い論議を交しながらも、まだ核心に迫ってはいません。

その間にも、学校の管理化・画一化はますます進み、テレビでも取り上げた深刻な実態が、お茶の間の目を奪いました。

昨年の問題をひきついで、今年のゼミナール、フォーラムに発展させたいと願います。まず、春の公開セミナーを、右記によって開催いたします。春休み中の土曜日の午後です。学校に関係のある方、ない方、Weの読者の方、まだ読者でない方、一切問いません。ぜひご参加下さい。

特に、公開授業では、生徒を募集しています。中・高・大学生、おとな、男女、どなたでも結構です。親子で生徒になるのも面白そう。ウイ書房にお申し出下さい。

*主催 ウイ書房、Weの会
*日時 3月31日(土) 2:00~6:00
*会場 婦選会館(渋谷区代々木2-21-11) 新宿駅南口より7分
Tel. 03-370-0238

*参加費 700円(高校生以下500円)
*プログラム はじめに 長谷川孝
実験授業

(21世紀の男と女の生き方、
ちよっと考えてみませんか)
中嶋里美

パネルディスカッション
(管理教育を超えるには)
佐々木賢 三井マリ子
(司会) 芦谷薫 山下文明
おわりに 半田たつ子

*問い合わせ先 ウイ書房
Tel. 03-326-1380



★住環境教育研究会編『住教育—未来へのかけ橋』

ドメス出版刊 価二〇〇〇円

★荒木兵一郎・田中恒子・広原盛明・松田誠『住まい再考—豊かな暮らしへの提言』
彰国社刊 価一四〇〇円

★田中恒子『新しい住生活—住み方と収納・整理』

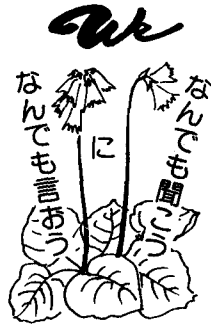
連合出版刊 価七八〇円

住まいは人間の暮らしの容れ物、暮らしによって、人間の心は培われ、暮らしぶりにその人の全人間性が現れる。しかし、衣食住と一口に称するものの、日本人の「住むこと」にかかわる意識は極めて低く、現実の住まいのレベルも低く、家庭教育の中に住教育の占める比率も低い。これらの相乗作用から住まいに関しては「お手上げ」の感すらある。

「住居は人権である」。こう高らかにうたい上げるためには、教育から取り組みを始めるより他ないのだ。

小中高の住教育のカリキュラムを具体的に構想した住環境教育研究会の労作『住教育—未来へのかけ橋』、朝日新聞連載記事を再検討、加筆・編集した『住まい再考—豊かな暮らしへの提言』、生き方の表現として住居をとらえた『新しい住生活』。三著ともに、食や衣に比し、著しく立ち遅れている住を、どう考えどう語るか、適切なアドバイスを得ることができよう。三著ともに人間の尊厳が貫かれていることがうれしい。

(半田)



いった編集者の姿勢こそ、一番大切なことだと思うのです。

① カット絵・イラスト

表紙絵と目次のイラストは、とてもよくマッチして美しいと思います。ただ特集欄のカット絵、何名かの方々のが、いつもみな同じで、それも、その時々の特集のテーマに関係のないことが多く、気になります。小さなカット絵ですが、特集のテーマに関連したものを、少しずつでも変えてのせられたほうがすてきなように思うのですが。

② 読けてほしいもの

巻頭絵と文、野の花がまずいい。素朴でそれでいて強い。それがこの本の冒頭に美しく上品にあってそれだけをながめてもすばらしいと思います。

毎月のテーマとそれに関した文これは様々の分野の人の考えが読めて、勉強になります。

その他連載ものの、霞通信・銀輪のうた・波、これらはとても読

みごたえがあります。

③ ふやしてほしいもの

「新しい家庭科を創るために」で、小中高大学と、実践報告が毎月掲載されていますが、もう一つほんとうの家庭での家族の様子、くらしを報告するコーナーを設けてみたらいかがでしょう。

具体的にある家族に登場してもいい、それぞれのプロフィールとその暮らしぶり、あるいはそれぞれの成長した面、迷い、喜びなど、そういった生の家庭を出して見るのも、とても大切だと思うのですが……。

④ Weの読者会について

読者会は全国にどの位あるのでしょうか。私が住んでいました山口でも、生協の読書会なるものがあったと思うのですが、生協の読書会に、このWeを紹介するという方法はいかがでしょう。

⑤ リクエストコーナー

私自身毎月Weを読んでいて、時々すばらしい文（いや生き方）に

出会えた時、再登場してほしく思うこと度々です。六月号の荒井利春氏の生き方、世代が近いだけに感銘を受けました。また森下計二氏その他、再登場してほしい方、たくさんいます。

（ワシントン州 的場みぎわ）

◆Weの増刊号が届きました。全体の出来上がり、構成をながめた後庄司先生の「子育ての習俗」をまず読み、その日のうちにほとんど全部に目を通しました。毎日バッグに入れて持ち歩き、空き時間や放課後など、折をみて、二度三度と、線を引いたり、自分のコメントを書き込んだりしながら、読んでいます。

まさに「フォーラム」再現。活字がどれもこれも生き生きと呼吸しています。生きた声として丸ごとび出してくるといった感じですが。多様な考え方が、さながら層雲状に渦巻いていて、それでいて確実にどれもが中心を求めている

る。実に読みごたえのある増刊号になっています。この増刊号を持ち寄って、合同のWeの会をやるのも面白そうですね。

感想の一つ一つについて認めたところですが、時間も許さないで、気のついた範囲での誤植もしくはテープ起こしの段階でもまちがいを左に記します。

60頁上段6行目 逃れにくい↓
出られにくい

(同)

人生とは階段
を↓人生と階段は

62頁上段13行目 柳田国男民俗

学↓柳田民俗学

81頁中段1行目 学んでいる↓

孕んでいる

112頁下段 較せました↓

載せました

又50頁下段の「科学だけがすばらしいというものの見方・考え方にキックする必要があると思うんです」は、どうも庄司先生のボキヤブラリーではないように思えてしかたがありませんでしたので、

尋ねてみましたら「意味は通じるからいいんじゃないですか。それより、よくここまでテープを起して活字にしてくださいました。冷や汗かきながらありがたく読ませてもらいました」とおっしゃっていました。

十二月号では、大森嘉子さんの「米の学習」の実践、そのスケールの大きさに感心しました。今、その全体について意見を言うゆとりがありませんが、疑問となる箇所がありましたので、簡略に記したいと思います。

「ブーム」といわれるほど、今、中世史研究が盛んですが、網野善彦『日本中世の民衆像』(岩波新書・一九八〇年)によると、「いままで、江戸時代の常識にひっぱられて、中世でも年貢は米だと、なんとなく考えていた」が、「年貢の品目が米だけでなく、きわめて多様である」事実を見ないと、「中世の平民の非常に多様な生活ぶり」が視えなくなってしまう。さらに「日

本人が米を常食とする稲作民族であるという常識的な日本人観のなかには、かなりの部分、権力者の作り出した「虚像」が入っている」という研究成果を提起されており

ます。この本は同氏の『無縁・公界・楽』(平凡選書)と並んで、一躍注目をあびたのですが、わたしたちの持っている歴史観がたいへん硬直したものであることを同時に指摘したのでもありました。

そこで「米の学習」36頁「奈良時代から明治維新まで、領主や政府に納める税金は米であった」とありますが、一考を要する大問題だとわたしは思いました。核心に迫る課題を授業化しようとすればするほど、同時に困難な問題をかかえてしまうというのは、熊本サークルの「アマラとカマラ」の授業化でも言えると思いますし、わたしも、心しているところです。

同月号「視点」で長谷川孝さんのおっしゃっている「認識の質」「教師自らの〈問い〉〈テーマ〉」というの、おそらくこの辺のことだと考えたりします。かといって、核心に迫る課題を授業化するということを放棄するというわけにもいきません。

大森さんの御健斗を願うと同時に、一度この本に目を通されたらいかかかと、老婆心ながら思いました。(横浜・植垣一彦)

◆今ジョン・ホルト『21世紀の教育よ、こんにちば』(学陽書房)を

読んでいます。訳がこなれていて、せいもあって、読みやすくて面白いです。私はフォーラムで佐々木賢さんの話をきくまで、イリイチの名前も知らなかったのですが、読みだすと「脱学校論」にすぐく惹かれてしまいます。ほんとうにWeやWeの皆さんとの出会いがあったから、自分の世界がどんどん広がってゆくのがうれしいです。

(東京・江東・稲邑恭子)



② よめどね あ そばがらもうな

藤田 健次

「嫁と猫あ、そばがら貰うな」。ととの愛情や性格などは二の次。嫁とは、「労働力」であり、「子孫を産んでくれるもの」以外のなにものでもなかった。

毎日一番に起きて、めし仕度をし、日中は野良へでて一人前の農作業をし、夜はかたづけ物をして一番おそく眠る。農家の嫁で、そのあまりのつらさに、家へもどりたいたいと思わない女性は一人としていなかった。

「まんず、嫁と猫あ、そばがらもらうもんでねって、本当だな。あれ、同じ町内がらもらった枉吉と嫁よ、何があったってへば、すぐ実家さ戻ってばいいで、ろぐに畑仕事もしねんだどよ」などを使う。

むかしから、農家の嫁とは耐えるものであった。夫となるひ

ところで、現代の嫁の地位はどうだろう。

私は変わった障害者？

栗原 実抄

私は自分のことを「変わった障害者」だとこのごろつくづく思うようになった。でもそのもう一方では「これが普通なんだ」と、自分に言い聞かせたりもするのだ。

はつきり言って私には、障害者であるという被害者意識がまるでない。中途障害者や障害を持たない人たちは、特に人に身の回りの世話をしてもらったりすることを大変負担に感じるらしい。そして、そのことが自分をみじめな気持ちにさせるようだ。ところが私はなんの抵抗もなく、トイレの介助や着替えなどを平気で見ず知らずの人に頼んでしまうのだ。

とにかく私の周りには、生まれた時から現在まで、頼めば身の回りのことをしてくれる人がいつもいたのだ。それも報酬を払って、仕事として世話をしてもらっているの

で、ある程度遠慮せずに頼んでしまう場合が多い。特に子どもたちは何もわからず、いろいろな無理を言ったこともあった。

障害者の知人が、外出の時は水分を取らずに、朝から夜まで我慢をするという話を聞いた時は、本当に驚いた。そして、生理の時は出かけないというのにも、私は言葉も失ってしまった。私はこの両方とも、ごく最近まで気をつけていなかったのだ。世話をしてくれているお手伝いさんが比較的若い人だったとしたのと、彼女たちがあまり文句を言わなかったの、私には分からなかった。ボランティアに対してもやはり同じで、障害者の介助をする以上はそういうことをするのは承知の上だろうと思っていた。しかし、そうではないことがわかった。

友達がある時、私のトイレ介助がいやだったと語ったことがあった。その友達とのつきあいはもう十年近くにもなるのだ。彼女はあまり遠慮してものを言う方ではない。その彼女が私に言えなかったということは、どういうことなのだろうかと考え込んでしまった。「水くさいじゃないの。そういうことは言わなければ分らないわ」と友達に抗議した。私はその言葉を言い終わってから、他の人た

ちもみな友達と同じように思っているのかも知れないと不安になった。そして、今私の世話をしてくれているお手伝いさんも、疲れた時や忙しい時などによく似たようなことを言っているのを思い出した。お手伝いさんはもう三年以上も勤めていて、六十歳を過ぎているにもかかわらずよくがんばって働いてくれている。三年以上も一緒に暮らしていれば、私の身体の状態も気持ちもすべて理解してもらっていると思ひ込んでしまっていた。このひとり合点ほど怖いものはない。

友達とは毎日会っていないけれども、ひとつのことをつつ込んで話したことが何度もあるのだ。彼女が軽度の障害者であるということがよけいに「私のことを他の人以上に理解してくれている」と思い込ませたのかもしれない。

障害を持っている人とか持っていない人とかにかかわらず、理解しあうことはなまかなことではない。親子や夫婦であってもそれは言えるのだから、つきあい方をいつも考えていなければならないと思う。私は今まで周りの人に対して、ただメチャクチャに自分を理解させようと焦りすぎたのだ。これからは相手の人を理解するように努めながら、自分を徐々に出していこうと思っている。

いま、私の住む町では、教師の組合活動について住民の側からこうこうたる批難の声があがり、町中がその話で色めきたっている。

事の発端は、市立中学での標準学力テスト実施をめぐって、教育委員会と教職員組合とが対立し、エスカレートの末処分が行われたことによるのだが、その混乱の様子が一部NHKテレビ（日本の条件・教育）で放映されるや、なりゆきを見守っていた親や住民の鬱積したものに火がついた。

「教育の正常化」のため、組合教師の人事刷新を求める署名運動を——というビラが地区全世帯に配布されるに及び、これはマズい！と、私は渦の中に足を踏み入れた。

保守的なこの町あげての組合排斥運動に問題がすりかわってしまったいま、なんとかこの事態に歯どめをかけた。ほんとうに大事なことは何なのか、おさえておくべきことは何か、お互いヒラ場で語り、考え合いたい。そんな場が徹底して足りなかったのではないか——と奔走している。

だが、自分の立場からのことばを繰り返すのみで、相手に語りかけようとせぬ姿勢や、陰影のない、皮相的なものの見方にぶつかるたび、思う。ひとの生き方や、世の中の仕組

は、もつと多面的で複雑なんじゃあないの？そこから出発しなきゃあ、何にも生まれてこないよ……。

それらアレコレを考えあぐね、眠れぬ夜に、鎌田慧さんの手になる一冊の本のことを思いおこした。それは、ルポライターとして活躍する著者が、社会を見る目をどのように

Weの読書室



日々を 生きる

—二つの世界の狭間で—

横山 雅子

して培ってきたかを、少年少女向けに平易な文章で語りかけたものだ。

二十数年前、青森の高校を出て上京し、小さな町工場に就職した著者の初任給は一時間23円、あんパン二個分。18歳から21歳までの三年間、よりましなところを求めて職を転々とし、そこでさまざまな人びとに出会った。

その後、著者は大学にすすみ、卒業後、業

界紙記者をへてフリーライターとなり、トヨタや新日鉄など日本有数の大企業の末端で働き、『自動車絶望工場』をはじめ、社会の断面を鋭くえぐりと、提示する仕事を続けている。

この本を読み返し、鎌田さんは、この国を一番下のところで支える労働現場の日常から「そのひとたちの眼をとおしてものをみ、そのひとたちのことばをとおしてものを考える」態度を学び、彼のものを書く方法を編み出したのだな、と再認識させられた。

そして、思う。若い人たちのみならず、学校を出てそのまま安定した職に就いている——たとえば、学校で教師をしている——人たちが、読んでみてほしいな、と。

なぜなら、そこ（学校）で語られていることは、そこだけでしか通じないものかもしれないから。

みんなが気づかないうちに、世の中の階層分化がどんどんすすみ、共通のことばが見失われがちないま、二つの世界に架け橋をかけるべく、鎌田慧の仕事に注目し、生きてゆきたい。

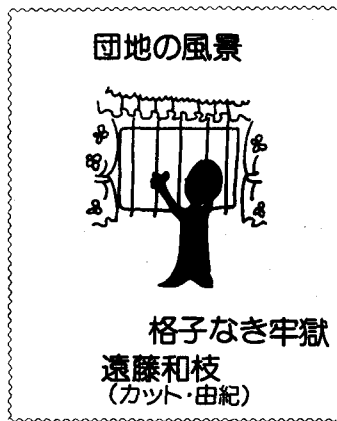
『ぼくが世の中に学んだこと』鎌田慧著・

筑摩書房・一、二〇〇円

多摩ニュータウンで公団の募集した造成地は、競争率が高くて、とても当たらないと思って応募したのに、なぜか当選して、82年の暮れに家を建ててしまった。

これから30年間の公庫融資の返済なんて、平均寿命を越えてしまいそうだが、コンクリートと鉄のドアから瓦屋根に引き戸の家に移って一年経った。政府の住宅政策にまんまと乗ってしまった感じで、ローンに縛られ、保守的にならざるを得ない今の生活を、間違ってしまったと思うことがある。家族が健康で、夫婦仲良くけんかをせずに暮らさない限り、30年のローンを背負った生活は成り立たないのに、あえてそれを選んでしまっ、生き方を狭めてしまったわけだが、あまり深刻に考えないようにして日々過ごしている。「かわら版団地のをんな」というミニコミ誌を発行して、女の問題を考えて行くことは、自分が保守的に小さく縮んで生きてしまいうな予感から、逃れる手段の一つである。いろいろなものから自由になりたいと願いながら、結婚生活を20数年続け、夫婦二人の生活すら男と女の自由を縛り合うものなのに、子供を二人産み、家を建て、親と一緒に住み、のら犬まで育てようとしているのだから、自由というのは私にとって「ことば」の遊びみたいなものである。

公団の賃貸住宅から、公団の分譲住宅に移り、次は公団の土地分譲を買って家を建てるというように、公団の住宅政策を忠実に一步一步進めているわが家は、公団の居住者のモ



デルケースとして表彰されてもいいほどである。ウーマンリブだの女性解放などと口でいっても、おいしいものが食べられて、きれいな服を着て、快適な家に住むという生活の中の欲を捨てることができないでいるから、女が

生きやすい世の中という未来図を、うまく描くことができないし、自分の生活をできるだけ自由にしておくこともできない。

家を建てようとしたとき、建築屋さんの持ってきた設計図を見ていたら、「はめ殺し窓」というのがあった。

「これはどういう窓なの？」

「開けることができない窓です」

ということ、その「はめ殺し窓」は二階に上る階段の上の方につけられた。明り通りのためにあるのだが、どこからも手の届かない位置にあるから、汚れてもガラスを拭くこともできない窓である。

アパート暮らしばかりだったので、四方に窓がついている家というのはめずらしくて、あちこちの窓を明けては、見える景色の違いに、最初は一人でうれしがっていた。

「はめ殺し窓」からは隣の家の二階の窓と空が見える。階段を降りながら、「はめ殺し窓から空を眺めている飼ひ殺しの女」という歌の文句にでもありそうなことが浮んでくる。「飼ひ殺し」「半殺し」「生殺し」、わが家の「はめ殺し窓」から連想される殺しのつくことばは、女の生きてる状況と似ている……いつも思う。

『ウィンター・ローズ』

半田たつ子

クリスマスも近い今、わが家のささやかな庭に、赤と白のバラが一輪ずつ花開き、赤が先に散った。

〈ウィンター・ローズ〉別名クリスマス・ローズ。ただ一輪真冬に咲く幻の名花。その花言葉は「追想」とか。散った赤い花びらは、私に、心の随まで、ロマンチックになれ、と言う。どんなに「甘い」とさげすまれようと、と。

人生には／ただ一つの義務しかない／それは／愛すること／学ぶことだ／人生には／ただ一つの幸福しかない／それは／愛することを知ることだ……ティヤール・ド・シャルダン愛することを学び、愛することを知るためには、知識も智恵も関係ない。大人も子供も関係ない。

「親友はパパです」と書き始めたのに、どうしても言葉が続かなかった少年アンドリュウの作文。それが象徴的に語っているように、大人も子供も、親も子も「愛することを学び・知る」営みに関しては、同列に位置する友達なのだ。

一家の愛の中心だった母親の死。残された家族は、戸まどい、苦しみ、傷つく。その中で生じた父と子の感情の齟齬。それは、母が生きていたとしてもやがて起こるものだし、もっと深刻な家庭はさらにある。だから私はこの映画を、父と子の葛藤とはとれない。うつろいゆく少年の日へのノスタルジアか……。

北アフリカで貿易会社を経営する父、ナイーブなアンドリュ

わたしのシネマガイドわたしのシネマガイドわたしのシネマガイドわたしのシネマガイドわたしのシ
テレビ残像テレビ残像テレビ残像テレビ残像テレビ残像テレビ残像テレビ残像テレビ残像テレビ残像

さようなら

野村 康子

私の小さいころ、親たちの目の敵はマンガだったのですが、現代の悪者はテレビのようです。家庭の団らんを奪った元凶はテレビ、少年少女の性非行、粗暴行為もテレビの影響、果ては自閉症の原因がテレビの見過ぎだという説が横行したこともありました。テレビを子どもに見せないのが、賢い親の条件というわけか、ひところ、新聞の投稿欄にテレビ追放の記がよく出ていましたね。

ところが、子どもに笑われながらTVドラマに涙を流してしまいう軽薄な私は、どうしてもテレビを断罪できないのです。それがこのコラムを書くきっかけになりました。

番組の選択、見方も全て自由に任せられていたのは大変ありがたかったのですが、反面枠がないことはシンドイことでもありました。すでに定評のある番組や有名な脚本家のドラマの時は気が楽なのですが、未知数のものあるいは連続ドラマを途中でとりあげるのは、中々勇気が要り、偏見と独断を貫くことの難しさを知りました。本屋にゾーツと行き、「×月のベストテン」などを見て、安心したり、ガックリしたり。

毎月の原稿ノ切が月初めだったので、その前月の半ばになってもこれと思う番組に出会わないと焦りだしました。テレビ欄を見てこれこそ思っても裏切られることが多かったでし。二五日すぎてもテーマがみつからないとこれは悲劇です(後半ほどそういうケースが多くなったのは私の要求水準が高くなっ

1、愛くるしい天使そのものの弟マイケル。美しい海を見はるかす白亜のすまい。アラブ人の市の賑わい……。映画はエキゾチックな舞台へ、観客をいざなう。

幼い弟には母の死を秘すよう父から言い渡された少年。父は「同じ悲しみに耐え得る者」として少年を扱った。しかし十歳のアンドリュースは、弟のように父に甘え、父にすがりたいのだ。さみしさをかかえ、弟の庇護者としてふるまうが、あどけない弟の無邪気な行動は、兄を次々に窮地に追い込む。兄は、父にうとまれることにも耐え、「悪い子」たちが行く寄宿学校に入れてくれと頼んだり、父の仕事上のパートナーである女性に、父と結婚してくれないかと詰め寄ったり、必死の才覚を働かせる。美しい母への思慕を募らせながら……。

父も父なりに努力した。しかし彼の愛は、自分の仕事場を見せたり、秘書として出張に連れていくと約束することだった。天にも昇る気持の少年。だがまたも弟の行為が原因で、父は彼を置き去りにする。少年は、さみしい時いつもそうしていたように、岸壁の木の枝にぶら下がる。兄の制止をきかず木に登ってきた弟の重みで、枝は折れ、少年は重傷を負う。

打ちひしがれて介抱する父に、少年は初めて十歳の子の気持ちをきれずに訴える。「許してくれ、パパは自分の悲しみにいっぱい、お前の心を汲みとれなかった」。

父の涙は、すべての大人のものだ。愛を学び、愛を知るのに、親も子も、大人も子供もないのだから。

憎しみとか嫉妬とか／が存在するわけではない／それは／愛が病気にかかっている状態なのである……………シャルダン

わたしのシネマガイドわたしのシネマガイドわたしのシネマガイドわたしのシネマガイドわたしのシ

テレビ残像テレビ残像テレビ残像テレビ残像テレビ残像テレビ残像テレビ残像テレビ残像テレビ残像

たせいかな?。そんな時に撮りおきのビデオを貸して下さった方、ありがとうございます。

問題にしてみたいと思いながら、果たせなかったのが、民間放送局の主婦向けワイドショウ。こればかりは休暇で余裕がある時でも見る気がせずパス。今評判の「おしん」は早い段階で、「少女小説」だと見限ったためこれもダメ。「女太閤記」「徳川家康」と二年連続の女性シナリオライターによる大河ドラマ。ここで追求されている「平和」の意味など、始終胸によぎったのですが、発火点には至らず。

心残りはたくさんあります。たとえば「訪問インタビュー」「日本語再発見」それに毎日の「ニュース」。読者の方から「歌番組」「野球中継」「オレたちひょうきん族」をというリクエストがあったのですが、力及ばず。

私が今注目しているのはNHKの「私の番組批評」。一回目は知名人でしたが二回目是一般の視聴者が参加し、一定期限内に放映されたNHKの特定の特写番組及び自分の見た番組のいくつかを批評する構成となっています。「独断的」「エリートの」「伝統的」女性観が強すぎる」などかなり直截な批判がされています。耳に痛い意見をNHKが本心に聞くつもりがあるのか今後を見守りたいと思います。

ここでついに紙数が尽きました。最後に、この秋人気のあった別れの曲の一節に、いくばくかの思いを託して筆をおきます。Love is over. 悲しいけれど／終りにしよう きりがないから Love is over, わけなどないよ／ただひとつだけ あなたのた



カッキーン コロコロ

半田 たつ子

アメリカの大学院で建築を学んでいた娘が昨日、一時帰国した。早朝成田に迎える。夫の会社の最寄駅で車を降り、私たちは地下鉄のラッシュにぶつかる。

「ああ、一年半ぶりのものすごさ」と汗をかいて降りてきた娘が、「私のいたフィラデルフィアには、大体人がいない。クリスマスが近づいたから、やっと町に人が出てきたけど」と言う。乗り換え駅のホームに貼られたアメリカの有名なデザイナーのポスターをつくづく見て、「日本って、ほんとおかしな国ね。アメリカの友達は、誰一人この人の名を知らないよ。でも、フィラデルフィアは東京よりずっと寒いけど、室温が20度より下がってはいけなくと決められていて、19度になると、カタンカタンとスチームが音を立て始めるの。朝はそれで目が覚めるのよ」と。

アメリカ人の友達に、日本は驚異と憧憬^{どろけい}的。「クリスマス休暇の計画は？」と尋ねられて「家に帰る」と答えると、みな目を丸くして「トーキョー、行ってみたい！」と叫んだのだと。

「日本的なもの」が、おみやげの注文なのだけど、とカレンダーを手にしていて、「うわあ！これなんて、みんながけんかを始めそう」と言う。それは表紙を「七つ面・江の島岩屋の場」の宝舟で飾り、「勸進帳」や「にぎりえ・菊の井の下屋敷」もある国立劇場のカレンダー。そして私も一緒にほればれとながめたのは「北野天満宮の雪の紅梅」「北嵯峨のやぶ椿と民家」「大原野金蔵寺の秋時雨」など、「あやにかなしき」としか言い表しよのない日本の四季を映したものだ。これこそが、世界中の人々の憧れにこたえ得る

「日本の美」なのかもしれない……と。

そして、四日前に観た「イーハトヴの演劇」、岩手ぶどう座の舞台と、作・演出を担当された川村光夫氏の講演を想った。川村氏があふれる思いをこめて繰り返された「カッキーン コロコロ」「カッキーン コロコロ」のリフレインが、胸のうちにかおった。

十月、野栗沢のすりばち荘で、押切郁さんから、寝物語に岩手ぶどう座の話を聞いた。それは、北上市から秋田県にぬける北上線の中ほど、県境に近い山間の湯田町に生まれ育った地域の演劇集団。もう三十三年に及ぶ息の長い活動を続けているということ。その劇団の代表は、押切さんのおつれあいのかつての教え子で、十二月には東京の前進座劇場で晴れの公演をするということ。その教え子——高橋富二さんたちと、押切さんやそのお友達とのほほえましいエピソード。スペースがなくて書けないのが残念だけれど、牧歌的であったかいつにうっとりし、ぜひ見せていただと約束したのだった。

その日、ぶどう座は、昼夜二回の興行を打った。前進座劇場はいっぱいの人、招待席には千田是也・長岡輝子両氏の姿も見える。私の後の席は、湯田町からマイカーでかけつけ

た人たち。真紅のシートに土の香りがただよう。舞台は洗練されているとはいえず、俳優も器用ではないけれど、役場や農協の職員、教師、大工さんたちがひたむきな演技で、手織木綿の味わい。何よりも方言の微妙な美しさ、観客を不思議な世界にひきずりこむ。

民話「うたよみざる」が何を意味しているのか、それはもうどうでもいい。人間の心の深いふかあい所にしまわれているものが、咄（はなし）と語り始めたようで、それをしっかり聴きとらなくては……、そんな気持ちに駆られるのだった。

ぶどう座の世界は、「地域と演劇」と題した川村光夫氏の講演で、私の中にいつそう輝きを増し、プログラム最後の前進座青少年劇場「鹿踊りのはじまり」との対比によって、輪郭をくつきりさせた。

「私たちが二日前、そこを発ったあと、早くも五〇センチの積雪があった、との電話が入りました」と川村氏は語り始められた。宮沢賢治の世界そのままのたずまいを見せる雪の湯田町を、スライドで映しながら、おだやかに、あたたかに語られる川村氏。それを私は、氏の子供のころの「おふくろが語る昔話」のように聞いた。

「文字のない時代、文化は語ることによって生み出され、伝えられた。従って『ことば』が大切にされた。今回の演し物『うたよみざる』も、おふくろから聞いた話が土台になっている。おふくろは、たくさんのお話をしてくれた。おふくろの話の中のきじは、『カッキーン コロコロ』『カッキーン コロコロ』と鳴くのだ、と信じ切っていた私。ある日、きじの鳴き声を聞いた。キーンと一声だけ。あてがはずれた。

思うに『キーン』をきわ立たせるために、『カッ』がつき、『コロコロ』は、キーンの余韻を表しているのではないか。

そして川村氏は、「おふくろのようにうまくはできないのですが、もう一度言わせて下さい。『カッキーン コロコロ、カッキーン コロコロ』。私がこの講演に酔わなかったからおかしい。

前進座の若い人たちによる「鹿踊り」は、プロのものだった。洗練されていて美しかった。ぶどう座の味を望むのは無理と知りながら、でも、私は物足りなかった。

その夜、木下律子著『王国の妻たち―企業城下町にて』（径書房）を読んだ。企業社会

が社宅に住む女たちをも管理し尽くすさま、そこで人間性をスポイルされていくさまが、克明にルポされている。ファッションモデルをしていたかと思うほど美しい女性が、婦人雑誌のグラビアそのままでのインテリアの室内でしゃれたティーパーティを開こうとも、それはまさに「人形の家」でしかない。うそ寒さに慄然とする。

「日本って、ほんとおかしい国ね」。

この言葉を、一月足らずの里帰り中に、娘は何度口にするのだろうか。

木下さんの本は、憲法を超えて、私たちを縛る掟が、日本社会に存在することを語る。封建制度や家制度のしがらみから解放された私たちを、管理社会が囲い込む。便利で快適で綺麗で、そんな餌をちらつかせて。その世界に住む私たちは、「カッキーン コロコロ」を忘れ果てた。

娘の友人たちの垂涎の的である日本のクルマ、それと縁続きの『王国の妻たち』。カッキーン コロコロやイーハトヴにつながる嵯峨野。どちらの日本が、彼らにとって、よりワンダフルなのだろう。私たちが大切に育てなければならないのは、どちらなのだろう。

あんでな

★中教審、審議経過報告★

中央教育審議会が11月15日発表した教育内容のあり方に関する審議経過報告は、学校教育の現状を「画一的で硬直にすぎる」ととらえ、その克服の視点を教育内容の改善の支柱にすえている。報告の特徴の第一は、いまの学校教育に対する切迫した危機意識。非行、校内暴力などの問題行動、過熱した受験競争、画一的な教育のあり方の三点を特に指摘。改善の視点として自己教育の育成、基礎・基本の徹底、知・徳・体の調和ある人間形成、特に徳育の充実、個性と創造性の伸長などをあげている。第二は、「一人一人の能力・適性・興味・関心に応じた教育」の重視。落ちこぼれ対策との関係で画一的な一斉指導だけでなく個別指導、習熟の程度に応じた指導などを提案。

具体的取り組みとして、徳性のかん養では、'84年春までに小学生の「生活能力」を文部省は調査する。例えば「正座はできるか」「リンゴの皮をむけるか」など約30項目を検討中。(朝日、11・16付)

★教員免許改正案を答申★

教育職員養成審議会は11月22日、教員免許制度('49年制定)の大幅改正案を瀬戸山文相に答申した。骨子は①大学院修士課程修了程度の「特修免許」を創設し、現行2本立ての中学校教諭以下の免許は特修と標準(現一級=大卒)、初級(現二級=短大卒程度)の三本立てとする②免許基準(各免許取得に必要な履修単位数)を4~26単位多くし、特に教育実習を重視③将来、教育実習さえとれば免許を与える証明制度(予備免許)導入④社会人への門戸開放など。

文部省は'84年2月の通常国会に教職員免許法改正案を提出、'86年4月入学者から適用の方針。私学の間では「国立教員養成系大学中心の制度。戦前の旧師範学校主導体制の復活を目指すもの」と反発が強い。

(毎日、11・23付)

★偏差値偏重を是正★

「偏差値公害」を改めるため、文部省は12月8日、業者テストによる偏差値を進路指導の主要な資料とはしないよう求める通知

を全国都道府県教委に通知。'83年4月以来、17年ぶりに見直し作業に入っている高校入試の改善策については12月14日に学識経験者らを加えた「高校入学者選抜方法の改善に関する検討会議」を正式発足させ、'85年度実施をめどに具体案をまとめる。

通知は12・18総選挙で中曽根首相が「学力より人柄。偏差値重視の選抜を変えたい」と入試改革を争点の一つに打ち出し、とりあえず通知を出すよう同省に指示、急ぎょ実現したもの。しかし、内容的には「直ちに学校での業者テストの使用禁止を打ち出すのは現実的ではない」という及び腰のもの。(朝日、12・9付)

★教育の中央集権排除を一「国民会議」★

教育問題国民会議(委員長、岩佐凱実・富士銀行相談役)は12月15日までに、①企業の求人「指定校」制の廃止②官庁の学歴主義改善③「教育神話」からの覚せいーなど7項目の教育改革中間報告をまとめた。

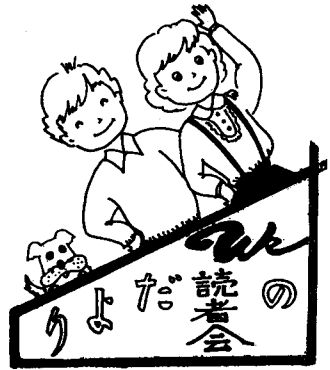
同会議は「活力ある福祉社会の建設」を掲げる社会経済国民会議の下部機関として'82年3月に発足、財界人や学者ら25人の委員で構成される。

報告は「多くの民主的、平等主義的制度とそれを支える理念も、常に補強されなければ、画一主義や過剰な管理主義に転化する」と指摘。この反省に立たない「制度いじり」に終始する教育論議は不毛と批判、行政に「各学校への干渉を排する」ことを求めた。(毎日、12・16付)

★拘禁精神障害者の人権擁護を★

精神科医、弁護士、患者家族などで組織する「精神医療をよくする会」(代表・藤沢敏雄・陽和病院長)など14団体は12月10日、日本弁護士連合会(山本忠義会長)の人権擁護委員会と全国の各弁護士合同委員会に拘禁された精神障害者の基本的人権を保障するための必要な措置を講ずるように申し立てる一斉行動を起こした。

申立書によると、わが国では約20数万人が精神衛生法により本人の意志に反して精神病院に強制収容されている。こうした患者たちは適切な治療を受けていない場合がほとんどで、行動はもとより、通信、面会の自由さえ奪われている。欧米では例外的にしか拘禁治療を行っておらず、精神病院在院者の80%が拘禁されているわが国の実情は異常で患者たちは偏見と人権侵害に苦悩している一。(毎日、12・11付)



〈We 城北の会〉

十一月十二日「自由席、当番希望制」などを「We」に書かれ、子どもの側に立った学級作りをしていらつしやる村田尚子さんを、念願かなってお迎えし、評価など学校に対する疑問を話し合いました。

村田さんは、学期末のランクづけは有害であり、目ごろの通信が大切であること。二学期から毎日子どもたちが、自由にクイズや悩みを記録し、みんなとても喜んで書き、またコミュニケーションにもなっていて、十二月にまとめる予定であることなどを話してくださいました。

討論の中で「教師から学級での位置を知りたいでしようと言われた」「通知表に対して疑問をもっているが、父母会の席で言いく

い」「教師とのコミュニケーションのとり方がむずかしい」その他、就学時健康診断や規則など、今ふき出している学校の問題が次から次に出され、あつという間に三時間が過ぎてしまいました。「自分の言いたいことは言うという姿勢は、くずしたくない」と最後に村田さんがまとめられた言葉が印象的でした。We 城北の会八回目は、村田さんの子ども中心の考え方やバイタリティに圧倒され、たくさんの収穫を得、課題をつきつけられたひとときでした。

〈We さがみの会〉

十一月の会では「教育と暴力」——少々テーマが大きいのですが、それを軸に、学校での教師の体罰と、家庭でのしつけの際に行う体罰、それらに関して、お互いの経験をもとにして話し合いました。

まず、ある中学校での教師の教育活動での生徒指導。つまり、どのような生徒の問題行動が生じ、どのように対処していくのかという現状が出されました。それから長谷川孝さんが、別のある中学校での現状を話して下さいました。それらの話に対する意見・感想を出し合う中で、なぜ冷静な時にぶてるのだからか、が、話題の中心になっていきました。

子供をもっていraftしやる方々から、家庭でのしつけの際に手を出したことがないか、あつとしたらどんな場面だろうかと具体的に話し合いました。その中で戸塚宏氏の「子供をよくするために、それを期待して生徒をなぐるんだ」という言葉と、教師の言う「子供によくなくてほしいからぶつんだ。だからそれは暴力ではなく教育だ」という言葉が、全く同じなのだ、という発言に、私は驚きをもって聞き入りました。

学校教育をになつてゐる者の一人として、改めて学校社会に染まつてゐる自分自身や、自分たちの行為がどんな教育なのか、何にながつていくのかを深く考えさせられ、反省させられた会でした。会に参加する人数は、少なかつたのですが、終始なごやかな中ですめられました。

(山村直子)

〈We 愛知の会〉は、次頁のような活動を行っています。

〈We の会カレンダー〉

1・6 兵庫

1・22 武蔵野 御殿山C・C 一時半

(0422・51・9461山田)

1・28 江東 江東区民総合センター夜七時

(682・6401 松本)

6月25日(土)	<p>“はたうことをめづって”(6月号特集)</p> <p>に「専任に仕事について、わが職業」</p> <p>い仕事をつたひた、人生の中で仕事は強い影響を与えらる。」</p>	<p>○戦後家庭科の発展について</p> <p>5月号ニュースの山下エミさんの論文の続きで、戦後の家庭科の発展を語った報告。中・高の家庭科と、和洋的の男が職業、如家庭という固定化と偏重する様子を採ってきたという指摘がありました。</p>	<p>○'83夏の家庭科関係の大会、集会の案内</p> <p>○左の戦後家庭科の発展、和洋の山下エミさんの論文の紹介</p>
7月23日(土)	<p>“コミュニケーション”(7月号特集)</p> <p>「解り難い事でもマスキのあり方から入る問題にされている今日、マスキの記事を向かい考えとして受け入れてしまいからで、何故か笑いの面を思わせることの難しさも感じました。(E.T.の感想より)</p>	<p>○Nさん「平和の職業」と語る</p> <p>大学の事務をいっているが、でわくいうと学科事務で、この仕事は女性ばかりで人事移動もなく、管理やキリアがあつてもぬるらぬらぬ……</p>	<p>○三重の父親は、中学校の部活動の指導、俗にいう祖直入れを47%賛成(三重大 来田さんへの調査)</p> <p>○名古屋の女性一男科仕事、女家庭という考え方に同意41%、同意しない14%(同市調査)</p>
8月27日(土)	<p>“老いを考える”(8月号特集)</p> <p>M:「老後とは汚物にまみれて生きること、そのための心構えが必要。健康とお金が必要なのではないの」</p>	<p>○各大会、集会に参加して</p> <p>ア. 第8回/全国高校女子教育問題研究会、入会に参加</p> <p>※協力分科会、家庭科分科会のお誘い</p> <p>※家庭科の教科書調査をしようとする</p>	<p>○家庭科の男女共修をすすめる会の会報より、本年度の活動の一つに、家庭科の教科書内容の検討がみえられてはいた。</p> <p>○現在の家庭科は教育の点に値しないと書かれている「反差別と教育活動」の紹介</p>
9月24日(土)	<p>“社会科学者の高橋道江さんをおいさん”</p> <p>の塾の校長の一つは、近い将来家庭科を大きな柱として、どこにいてもしたたかに生き抜いていく子どもたちを育てたいというところ、現在の後援の奨励をききおかしな感じがした。</p>	<p>エ. 第18回 家庭科教育研究看護連盟 夏季集会のようす</p> <p>※10月号教科書問題特集と分組に学習会をしようとする。</p>	<p>1. 家庭科の男女共修をすすめる全国交流集会「まだだいた男共修は中学校まで」のようす</p> <p>ウ. we 夏季フォーラムのようす</p>
10月29日(土)	<p>“今、教科書問題についてなに? 灰野亮典さん(教科書検定評議委員)を囲んで”(10月号特集ともかきねて)</p> <p>今なぜ教科書問題がクローズアップされているかをわかりやすく話してくださった。</p> <p>※次回の4人の発表会 11月26日(土) PM 2:00~4:30 名古屋市勤労婦人センター(地下鉄 四軒屋駅 徒歩5分)</p>		<p>○男女共修をすすめる会の男女共修家庭科の中・高の教育内容の紹介</p>

テーマ 特集の中の家庭科の教科書関係の学習に、教科書関係の各分野についておこなう。

◆私は大学四年生です。以前はがきを出した時、男性ですか、と書かれていました。女性です。男子学生がWeの読者になってくれるとうれしいのですが、社会問題・教育問題にある程度興味のある男友達に声をかけても、あまりWeには興味を示してくれません。家庭科Ⅱ料理・裁縫Ⅱ女子の教科といった考えが、男子の中に深く根づいていることに驚かされます（女子でもそう思っている人は多いのです）。

卒論の題は「家庭科教育の意義」に決まりました。家庭科について、教育について、ろくに知らない私が頭の中だけで「新しい家庭科のあり方」を考えようというのです。大それたことをすると自分でも驚き、テーマの深さにとまどいを感じ

ています。考えていくとすぐ脱線して、遅々として進んでいません。

就職は、生活クラブ生活協同組合に決まりました。生協は教師と同じくらいやりがいのあることだと思います。私が生協を選んだのもWeを読んだことが影響しています。それまで、環境・食品といった問題にはほとんど関心がなかったのですが、今はエコロジーについて、考えていきたいと思っています。

Weは薄い本ですが、たくさん問題提起をしています。短い文章に深い意味がこめられているので以前読み流した記事を、何か月も経って読み返してハツとすることがよくあります。そこがいいところだと思っています。

先日、生活クラブの班長さんにWe 11月号を紹介しました。食べるという特集に大変興味を示してくれて、購読しようかしらと言っていました。（帝京大学 浅尾貞美）

◆アメリカは今、十一月二十日のTV映画“The Day After”のことで騒然としています。アメリカのカンザスシティに核爆弾が落とされたらどうなるだろうか、というフィクションです。前々日に、子供の学校から、毎週発行される“Weekly Bulletin”に、家族そろって見る、こと、という注意書きが載ってまして、何かしらどんなものかしら、と思い、息子と一緒に見ました。今私はとても複雑な気持ちです。

映画そのものは三流という感じで、心に残ったものは「こわさ」だけ；グロテスクなお化け映画を見た時と同質の……です。しかし、その映画を作り、家庭に送りこんだABC放送局の存在は、さすがアメリカ、と思わされます。ただし私は「もう遅すぎたヨ」と言いたいです。ヒロシマ、ナガサキのドキュメンタリーを見てほしいと言いたいです。

今晚はPTAのmeeting「新し

い教育委員長と対話をしましょう」というのがあったのですが、男気がなくて（日本人であるということ、こういう映画の後などではとても大変なので）行きませんでした。（ニューヨーク大西麻里子）◆まず、ありがとうございました。気になっていたことが解決できました。それは「石けんづくり方」なのです。なあーんだとおっしゃらないでください。私にとつては宝物を見つけたようなものなのです。廃油から石けんができるということは知っていました。けれど作り方がわからなかったのです。郡内の他の家庭科の先生にお聞きしても、できることは知っています。でも、作り方は知らないという返事ばかり。もうこうなれば、Weにきいてみようと思っていたところでWeにきけば、必ず実践している方がいると確信していたのです。ところが、今日Weの方からブレイク、トクされてしまった。なぜ？

プレゼント？

(85)



新潟・働く女性にいがたの集い

「働く女性の明日に向かって——にいがたの女性性が職場で充実して働くには」をテーマに、'83働く女性にいがたの集いが八日開かれた。百余人が参加。

まず女性社員総合開発研究所の西村洋子研究主幹が「働く女性の果たす役割」と題し「信頼できる後輩を育てよう」と講演。後パネルディスカッション。(新潟日報、11・9)

・「教育10番」——市民会議が開設

新潟市教育をよくする市民会議はこれまで普通高校建設や四十人学級早期実現を訴え市民とともに運動してきた。十五日県下で初めて教育110番設置に踏み切った。毎週火・金曜の午後六時から九時。お気軽に(41) 9551番まで。(新潟日報、11・10)

・おしんタイプの女性——婦人問題アンケート

今年三月に内閣総理大臣官房審議室婦人問題担当室が「婦人問題に関する国際比較調査」と銘打って日本、アメリカ、スウェーデンなど六カ国で実施したのと同じ内容。これによると新潟の女性は「尽くし型」でも家庭

生活、社会慣習などで男性に比べ、深い差別感を持っている? 不満はあっても離婚せぬなどおしんタイプらしい。

(新潟日報、11・28 山口久子)

東京・紀伊国屋書店が文書で謝罪

「ブス、チビ、カッペは不可」など「マル秘文書」を作っていた「紀伊国屋書店」は二十九日までに、同書店労組や支援組織にあて謝罪文を渡した。マル秘文書は「メガネ」「法律に興味を持つ」「革新政党支持や父が大学教授」などは不採用。パート採用では「夫が教師や文筆家、下宿者、離婚歴ある者」は要注意。(毎日、11・30、三橋典子)

千葉・受験生への影響を心配

県立東総工業高校の不正入試が明るみに出た四日、県教育庁は同校大野校長とA教諭を呼び事情聴取を行う方針を決めた。採点方法自体に欠陥があったことがわかれれば見直しを検討したい考え。(毎日、11・5)

・下総基地問題で住民集会

「下総基地の米軍使用に反対する五市二町連絡協議会」は三日午後一時から、印旛郡白井町清水口の七次公園で住民集会を開く。レーガン大統領と中曽根首相との会談で、米空母ミッドウェー艦載機の夜間離着陸訓練場所に

決まるのではないかとの危機感から。

(朝日、11・3)

・自衛隊基地を調査

県職員労働組合が「危険な軍事基地をあはく」と題した調査報告(42頁)を作成した。伊藤章夫・前中央執行委員長を中心に二十人がマイクロスコープをチャーターして県内基地めぐりを行い、まとめたもの。陸自五、海自四、空自一の周辺を見て回っただけで、自衛隊の厳しい監視に出会いショックを受けた様子が見える。一部四百円。(毎日、11・26)

・解雇問題法廷へ——線のおばさん

「自分の身は自分で守る子供を育てるため」を理由に船橋市は七月末、交通整理員制度を廃止、二十七人を解雇した。これを不当として、秋山クニ子さんら五人が市教育委員会を相手に地位確認を求める訴えを千葉地裁に起こした。(毎日、11・17)

・「暫定復活もありうる」

船橋市の大橋和夫市長は十七日、同市のみどりのおばさん(交通整理員)廃止問題についてPTAなどの不安が予想以上に大きいとの理由で「児童の交通安全対策で新しい制度の採用も含め、市教育委員会などと意見調整したい。みどりのおばさんを暫定的に復活さ

せることもありうる」と明らかにした。

(毎日、11・18 木田直子)

岐阜・「原爆ノ一」折りツル20万羽

岐阜市芥見、藍川中学校一年九組の生徒四十四人は、文化祭の十五日、教室に二十万羽の折りヅル、B 29、原爆模型をつくり「二十万羽鶴―戦争について」のテーマで公開する。六月初旬「なんで二十万羽？」と尋ねた生徒も広島島の犠牲者の数と聞かされ、クラス

(朝日、11・15)

愛知・突つ張り生徒対象

春日井市勝川新町、中村犬猫病院長の中村志さん(52)は野生動物の「保護管理室」と突つ張り中学生を対象にした「友愛教室」を併設したユニークな塾をつくる。友愛教室は定員二百四十人。週三回月謝五千円。うち一回は入院中の野生動物やペットの世話、映画、スライド、講演などを通じ生命の尊さを教える。

(朝日、11・1)

・中国からの帰国者に無料バス

名古屋市の中国からの永住帰国市民に対して地下鉄、市バスの全線無料バスを支給する。日本語の勉強や日常生活に慣れでもらうため、自治体では初めての試み。

(朝日)

・管理教育よしな祭

愛知の教育はこれでいいのか! と題し、県民シンポジウムが11月27日、市南区役所ホールで開かれた。高校生を中心とした寸劇と発言やビデオもあった。

・「なこや女性会議'83」

「自立・平等・平和をもとめて」と題し女性を取り巻くさまざまな問題をみんな考えてえようと、名古屋市民局が開催した。出産はみんなのもの―家庭での男女平等教育、おんなが働くとは?―女子学生と語ろう、みんながいきいきと生きるまちづくり―女の視点で老後を考えるなどの分科会や活動紹介のコーナーもあった。11月23日 厚生年金会館にて。

(山田和枝)

熊本・熊本大学の軍学協同反対の声を!

熊本大学における現職自衛官受け入れ等の軍学協同に反対する運動が大学内だけでなく、労組、民主団体等の間にもひろがっているが、十月二十八日の安保破棄実行委員会と科学者会議熊大分会との懇談会について、十一月十日には科学者会議熊本支部のよびかけで、懇談会がひらかれた。そこでは、①昭和四十年以来、二十一名の現職自衛官を熊大が正式の大学院生として受け入れてきた②その「実績」を基礎として博士課程をつくろう

としている③テクノポリス建設構想と一体となった産学協同問題④このような重大な問題が大学の最高の議決機関である評議会にかけられず一部上層部ですすめられてきた非民主性が指摘され、それぞれへの対応の必要が報告された。今後「教育の機会均等論」が打ち出されることは必至で、これに対しては「自衛官は個人の意志で、資格で入学するのではない。自衛官個人には研究の自由もその成果を発表する自由もない。あくまで自衛隊の政策にもとづいて送り込まれてくるものである」と現職自衛官入学の本質が解明された。今後、連絡協議会的な組織づくりもする予定。

(熊本日報、11・20)

・父母と教師と話し合う会

教育問題を本音で話し合うというグループ「父母と教師と話し合う会」(代表世話人・松浦健一(64))が生まれて約五年、三十回目の会合を迎えた。学校やPTAではどうも話しにくいという母親たちが始めた。「教科書問題」「やる気を起こさせる法」「性教育」などさまざまなテーマ。「ほかの人たちと話して、自分の子を客観的にみつめられるようになった」の声もある。松浦さんの書43―3

(朝日、11・25 中山そみ)



◆これを読んでいただいて ◆増刊号の読者の方から、
 いる今は一月、書いている 裏表紙のウイ書房の広告に
 今はまだ十二月。とうとう ついてご指摘をいただきま
 今年も終わり。そして二巻 した。「人間らしい生活
 も終わり。先の見えぬまま いきいきした教育 差別の
 に「ひと」を引き受け、よ ない社会を 志す人の雑誌
 うやく一休みという感じ。 新しい家庭科We」となっ
 恥ずかしくて恥ずかしくて いるが、創刊時からの三本
 インタビュの最中はほと 柱の一つ「自立した男と女」
 んどなにも頭に入っていな が「いきいきした教育」に
 いんです。録音を全面的に とって変えられていると。
 信頼して、さてと聞いてみ 一瞬、そのご指摘に驚き
 ると話し方、要領の悪さ、 ました。あくまでも増刊号
 これが私？と自己嫌悪か「学校はよみがえり得るか」
 ら這い出すのにまた一苦の宣伝効果を考え「いきい
 労。ご登場の方々ありがと きした教育」を加えたま
 うございました。 で、発刊時の精神は当然変
 ◆Weの輪で会って下さった わりません。言葉の使い方
 みなさんありがとう。進歩 に考えさせられました。
 は目に見えませんが、な に ♣毎号美しい作品で頁を飾
 かしら来年はいいことがあ る大室君子さんの「野の花
 りそうな気がするのです。 をたずねて」を絵はがきに
 でも日本は、世界はどうな 致しました。五枚一組300円、
 るのでしょうか。今日選挙の 送料は一部70円、十部以上
 日でした。 無料。プレゼントに(馬場 加の雑誌を創っていき
 (中野) 無料。プレゼントに(馬場 加の雑誌を創っていき
 (半田)

We の告知板

▼自由大学連合が「冬の社会人合宿」参加
 者を募集している。テーマ『学ぶということ
 と、とき2月18・19日、ところ八王子セ
 ミナーハウス、費用8,000円(1泊2食)
 夜間中学生が学ぶ一松崎運之助/障害者と
 共に学ぶ一小島靖子/女が学ぶ一吉武輝子
 事務局・法政大学経済学部 03(264)9628
 ▼映画「下北半島・関根浜」の製作資金集
 めのための企画一ホット・ナイト・コンサ

ート！夜は地獄か極楽か 泉谷しげると淡
 谷のり子と愚安亭遊佐と とき3月8・9
 日午後6時開場、ところ一ツ橋ホール、前
 売3000円、当日3800円、問い合わせ・青林
 舎 03(504)1706

▼We も春の公開セミナーを開催しま
 す。69ページをごらんの上、ぜひお誘い合
 わせ、ご参加下さい。

▼継続手続きまだの方、お忘れなく！

新しい家庭科— We

Vol. 2 No. 11 1984年1月20日発行
 〒500
 編集兼発行人/半田たつ子

発行所/(有)ウイ書房

〒182 東京都調布市西つつじヶ丘2-25-14
 ☎03(326)1380 振替 東京6-59867
 印刷所/(有)岩佐印刷所 〒112 文京区春日1-6-7

引き続きWeの仲間になって下さい
Weの仲間をふやして下さい

Weの取り扱い店一覧

お近くの書店に、ぜひお声をかけて下さい 12月16日現在

川	富貴堂	〈杉 並〉	木風舎	名 古 屋	日比野泰文堂	神 戸	日進堂
	京栄堂書店		新愛書店		谷口正文館書店		明文館
川	いわた書店		ブラサード書店		稲沢文光堂		文進堂書店
松	矢野書店		たつみ書房		白樺書房西店	尼 崎	宣文堂書房
路	カノウ書店		みどり書房		白揚書店	姫 路	姫路九善
岡	東山堂	〈新 宿〉	模索舎		竹中書店	青 屋	大昭明文堂
	みみずく書房		ブックスミヤ	江 南	青雲堂	明 石	原書店
台	こどもの本の店		伊野尾書店	豊 橋	文教書店	岡 山	弘栄堂
	ブーの家		ジョキ		耕文堂	米 子	今井M.C本店
	八重洲書房	〈渋谷〉	すべすべえいがさい	豊 田	鈴彦書店		今井書店
	ポラン	〈葛 飾〉	宏精堂	岐 阜	宝島	出 雲	武田書店
	萩書房	〈世田谷〉	やまべ書店	新 潟	栗山書店	広 島	やまびこ書店
	高山書店		江崎書店	小 千 谷	島谷書店		いづみ書店
泉	ホビット館	〈練 馬〉	かじか書店	三 条	新潟書房	竹 原	草間書店
火 田	加賀屋書店	〈北 〉	愛京堂	長 岡	覚張書店	福 山	岡田書店
山 形	八文字屋	〈墨 田〉	業平堂	富 山	清明堂書店	山 口	白藤書店
福 島	岩瀬書店	〈三 鷹〉	第九書房	高 岡	清文堂	松 山	去来社
	西沢書店	〈府 中〉	国府書店会	岡 谷	笠原書店	観 音 寺	タカハシ書店
	深川第二書店	〈国分寺〉	青野書店	松 本	新光堂書店	徳 島	雄徳堂徳野書店
郡 山	十字屋書店	〈国立〉	東海書店	長 野	吉野屋書店	土佐山田	依光書店
	大槻店	〈立 川〉	石井書店	金 沢	うつのみや	北 九 州	北九州書店
藤 岡	川島朝日堂		オリオン書房		セールスセンター		白石書店
	初心堂	〈小 平〉	和中書店	福 井	ひまわり書店	二 日 市	丸山スコアレ店
前 橋	アルプス社	〈八王子〉	くまざわ南口		じっぷじっぷ	唐 津	日新堂
桐 生	近江書店	〈清 瀬〉	マルオカ書店		吉川隆文堂	長 崎	文光堂
く 戸	ツルヤB.C		飯田書店		春江書店		好文堂
い 城	太陽堂		日南書店	奈 良	品川書店	佐 世 保	紅屋書店
あ 和	岩瀬書店	〈町 田〉	久美堂	尾 鷲	海老山書店	熊 本	高校生協
川 口	新井書店	横 浜	文教堂	大 阪	尚古堂		三章文庫
	文泉堂		有隣堂		旭屋書店本店	大 分	開書堂
	ブックスサトウ	川 崎	北野書店		ユーゴー書店	日 向	片桐書店
上 尾	黒田書店		早川書店		増田書店	志 布 志	スズキ書店
東 松	比企文化社	相 模 原	ブックス上溝		樋口書籍	那 覇	琉陽堂
山 光	山屋	鎌 倉	たらば書房		米原十六堂	紀伊國屋書店	札幌、新潟、
船 橋	前原かつぱ		大船書房		西村書店		新宿、渋谷、玉川、住友、
松 戸	元山書店	相模大野	相模書房		タミーB.C		吉祥寺、川越、船橋、梅
津 田	大和屋書店	藤 沢	豊元書店	東 大 阪	ヒバリヤ		田、岡山、広島、松山、
鎌 谷	岡田書店	東松堂	東松堂	和 泉	かつらぎ		福岡、熊本
佐 原	多田屋	厚 木	内田屋書房	豊 中	昌文堂	大学生協	
市 川	大杉書店	秦 野	みどり書店	藤 井 寺	なににに書店	畜産大学、東北大学、福島	
東 京	蔭書店	小 田 原	伊勢治書店	寝 屋 川	香里書店	大学、新潟大学、群馬大学、	
〈千代田〉	ピッピ	甲 府	太洋堂	高 槻	コーベブックス	宇都宮大学、茨城大学、	
	日成堂	小 静 岡	百町森書店		西武	埼玉大学、日本女子大学、	
	書肆アクセス		吉見書店	京 部	松香堂書店	東京大学、東京家政大学、	
	三省堂本店		森上書店		好文堂	東京学芸大学、法政大学、	
	飯田橋書店	警 田	あつみ書店		オデッサ書房	成蹊大学、愛知教育大学、	
〈文 京〉	鈴木書店	浜 北	谷島屋書店	宇 治	大久保京都書院	金沢大学、大阪市立大学、	
	寿文堂	沼 津	マルサン書店	長 岡 京	恵文社神足店	立命館大学、宮崎大学、高知	
〈豊 島〉	池袋書店	一 宮	文正堂書店	和 歌 山	宇治書店	大学、熊本大学、琉球大学	
〈杉 並〉	柏木堂書店	名 古 屋	ウニタ書店	神 戸	流泉書房		
			ポランの広場		ヒカリ書店		

読者の皆様へ 上記の取り扱い店以外の全国各地の書店でも、本誌は書店購入
ができます。お近くの書店でお求めの際は、「地方小出版流通センター」経由
とご指定のうえ、ご注文下さい。